
仮想戦記 五族共栄

山川雷太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想戦記 五族共栄

【Nコード】

N4757C

【作者名】

山川雷太

【あらすじ】

かつて、アジアの覇権を目指した日本、そして太平洋戦争、敗戦。日本には他の選択肢は無かったのだろうか？ 霊能者王仁わにが日本の未来を幻視して、次々と先手を打ってゆく。変わる兵器、変わる戦闘、変わる日本、変わるアジア、はたして、世界はより良くなるのだろうか？

第一話 異形の実験兵器（前書き）

この小説はフィクションです。登場する人物、団体、地名、国はすべて架空の存在で、実在する人物とは一切関わりがありません。

第一話 異形の実験兵器

銀色の異形の飛行機が、白煙を上げて矢のように晴れ渡る空を上昇して行く。細長い卵型の胴体にブーメランのような後退角の付いた翼、無尾翼機だ。エンジン音は無く、代わりに爆発音のような甲高い音が当たりを引き裂く。桜の花びらがゆっくり春の風に靡いて舞う中を、一筋の光りが貫いて天に登るのだ。尾部から炎と共に吐き出された白煙は、残された飛行機雲のように立ち昇る軌跡を描き、地表に近い部分からばやけて桜の花びらと同化する。高度を得た銀の礫は、そのずんぐりした鍍金のような機体を水平にして、東外輪山を信じられない高速で超え去った。

この化学噴進実験機の略称は『秋水』、一九三一年に陸海共同で設立された軍用科学技術省の航空技術研究開発部、化学爆噴進研究課が本土防衛用高高度迎撃機として、初めて取り掛かった三年越しの実験機だ。ここ九州阿蘇山の内輪に作られた特別実験飛行場で、異形な航空機を見上げる、背の高い袴姿総髪はかまの一人の男がいた。傍らに立つ軍服姿の美しく謎めいた女が語りかける。

「王仁様、いかがですか。最新鋭のロケット実験機の感想は？」

「悦子さん、まるで天駆ける銀の礫だね。人が乗って操縦しているとは思えないよ」

男は横に立つ女に振り向かず、端正で華奢な横顔を見せ、秋水の白い軌跡の向こうを見入るように、涼しげに少し目を細めて遠い顔をした。袴の裾が春風でひるがえる。悦子と呼ばれた女は、くつきりとした目鼻たちが濃紺の軍服に良く似合う。均整の取れた細身の顔に情熱的な細い眉と、その下には大きな黒い瞳がエキゾチックな光りを放ち、傍らの王仁の端正な横顔を見つめ続けている。

悦子は最近の付き合いから、この男の癖だと判っていても、あの深い瞳を覗き込みたくて何とか振り向かせようと思ってしまうのだ。「最大速度時速八キ口、上昇限度一万二千メートル、対流圏の

一番上まで百八十秒で上がるのですよ」

「ふーん、凄いな。かつて見た幻が、今、目の前で見せられて……、感無量だよ」

「また、幻のお話ですか？ 秋水はれっきとした現実です」

悦子は貴方の側にいる高階悦子もれっきとした人間と言いたかった。

《振り向けば、貴方のその眼差しを受け止めてみせる、私に魅せられない男は居ないはず》

そう心の奥底で任務とは別の感情が少しにじみ出ていた。特務機関諜報員高階悦子、幼い時から特務専門教育を施され、この世界では美しき白蛇とさえ呼ばれた事もある。女性諜報員の最大の武器は、その美貌と男の心理操作だ。女として磨く事はすべて、初体験まですべて訓練の中で消化してきた悦子にとって、人と人との愛は普通とは別の形で存在した。男の心理を誘導し、情報を引き出す術。そのために磨かれた美貌と表情と声音なのだ。引き出された情報は国のためになり、国のために男と戯れることが、悦子の任務だった。そしてそれは面白可笑しい事で、それが人と人のごく普通な関係だと勘違いしていたかも知れない。

相変わらず、王仁は空の彼方を見上げて呟いた。

「悦子さん、日本は二発の新型爆弾を投下されて焦土と化し、人々が煉獄で焼かれる幻を見たのだ。それは、これから日本人が世界に対して行う事の因果応報なんだ……」

王仁さぶろう、類まれな霊能者であり、国家も頼りにするその未来予知幻視能力、特務機関幹部から王仁の素性を説明されても、悦子には容姿の優れたただの男にしか見えなかった。だが、彼の未来予知に基づいて、この軍用科学研究省が出来た由来を知る。父親は日本人、母は……、日本国籍を持っている事は間違いないが、それ以上は厳しい情報規制が掛かって知る事は不可能だ。おそらく国家中枢と縁がある母、そう言う情報しか持っていない悦子なのだ。その不思議な背景を持つ王仁は最近、ある理由で自ら進んで特務機関

の一員になったと言う。その教育係に、海外諜報活動が主だった高階悦子が指名される事自体、異様なことだ。

「幻を見るより、私を見てくだらないのかしら」

焦れた悦子が少しだけ甘えて言ってみた。王仁の横顔に笑みが浮かび、ゆっくり悦子に振り向いた。桜の花びらが王仁の後ろに舞う。麗らかな春風が王仁の漆黒の瞳をなでて行く。悦子は違うと思った。普通の男の反応ではない。普通なら、かぶり付くような顔の動きと射す様な、舐めるような視線が来るはずなのに、王仁の放つ気は柔らかに包まれそうなのだ。それは春そのもので、悦子は自分が王仁の瞳に吸い込まれて、自分の思考と訓練された術が消え去るように感じた。桜の木が再び風に揺れ、風の音が少し 鳴った。生き物の体温のような暖かい風が悦子を取り巻く。自分の目尻が少し潤む風のせいだろうか？

「悦子さんのその美貌に綺麗な花が咲く日が来るよ……」

王仁はそう言うと同じと悦子の瞳を見つめる。謎の言葉と視線を受けて、悦子は怯んだ。言葉は謎だけれど、表情は純であとけない。古武術の達人と噂されている王仁だけれど、背の高いひよろしとした雰囲気からは想像もできないほど、抱きしめたいような弱さが漂っている。柔らかくて奥行きが深い微妙な空間が王仁の周りを取り巻いて、僅かに振動でもしているようだ。その振動が悦子の心を揺さぶる。

《美貌に花が咲く？ 今の美貌では不足だというの？ この悦子が蕾だと言っの！》

自分の表情が少し硬くなったのを感じた。訓練では絶対に許されない失態だ。相手の言葉に自分の感情が出てしまう。逆なのだ。王仁から感情の波を引き出さなければならないのに。

銀の礫が空に光った。燃料が切れて音も無く滑空して飛行場に戻ろうとしていたのだ。悦子は話題を変えた。

「秋水が戻ってまいりましたね。現状の欠点は航続時間の短さです。約百八十秒しかありませんの。その間消費された燃料は二トンにも

及びます」

秋水は時速二百キロを超える着陸速度で飛行場に進入してきた。車輪は離陸時に切り離し、胴体下部の丸みを利用して形成された、弓状のソリで着地する。燃料を出来るだけ多く積むために、車輪は離陸後投棄される着脱式とされていた。だが、ソリでの着地は毎回、胴体着陸を行うのと齊しく、難しい技術を必要とする。着陸速度の速さは普通のレシプロ戦闘機（プロペラ機）の倍近く、命がけの着地となるのだ。

離陸後投棄される車輪

案の定、深い降下角度で秋水は飛行場の端に接地した瞬間、ヨー（機首の左右方向）のバランスが崩れて、少しバウンドし、二度目の接地で大きく機首を左に向けながら横転、右翼端を何かに引っ掛け、付け根から折れて、ひっくり返って止まった。サイレンが響き、緊急車両が走って行く。王仁も悦子が運転するオートバイに飛び乗り、現場へ走った。

下になった風貌をバーベルで打ち壊して、搭乗員が引きずり出されていた。奇跡的にかすり傷程度で大きな外傷もないようだ。医師の気付けで気がつくと、

「いやあ、申し訳ない。またやっちゃいました」

実験機搭乗員、大塚大尉がそう言うと、皆の顔に笑顔が戻った。ソリ着地の難しさを回りの皆が理解しているのだ。

王仁が大塚大尉に近づくと、大塚大尉は無理をして立ち上がろうとした。王仁と悦子が近衛師団管轄、特務機関から視察に来ていることを知っているのだ。腰を強打しているのだろう、立ち上がるのが辛そうだった。王仁は素早く手で大塚を制して、担架の上に横になるように指示した。

「特務機関視察員の王仁です。危ないところでしたね。貴方の勇氣に心から敬服します。大怪我で無くて何よりです。まずは養生してください。」

「王仁殿、国家の大切な実験機を壊して、誠に申し訳ありません」

「いえ、着陸がこんなに難しくては、実戦には役に立ちますまい。貴方の勇気と高度な技量をもってしても、着地のたびにこれでは、戦う前に操縦者が居なくなってしまう。早速、軍科研に報告して、改造の必要性を打診します。それまでは、実験を中止されますように。貴方が殉職されれば、開発はまた三年は遅れてしまうでしょうし……。貴方の知識と経験を生かしてこそ、実験成功が期待できると判断します」

王仁からそう言われた大塚は、神妙な顔つきで王仁の深い瞳を見返した。大塚は人に言えない覚悟で毎回、秋水に乗ってきたのだ。躊躇すれば臆病と見られ、失敗すれば技量不足を論う不屈き者が多いのだ。一つ間違えば確実に死ぬこの実験飛行、その心の葛藤を誰が知ろうか。胃がきりきりと痛み、足が竦む姿を見せまいと、わざと磊落に振舞う自分は、突けば崩れる砂の城とも思えた。人に言えないことを長く抱え込んでいると、小さな労りが心に沁みる。大塚は自分が涙目になっているのに気づいた。

「す、すいません！ すいません、王仁殿……。私がもつとしっかりと書いていけば……」

王仁が大塚大尉の手を握り締めた。

「大塚大尉、貴方の努力が何時の日か、日本の空を蹂躪するかもしれない敵の攻撃を必ず防ぐのです」

そう言う王仁は周りの幹部連中を見渡し、宣言するように言った。

「生死をくぐって事を為す人を失わないように、皆も最大の注意を払ってください。あなた方の注意と気配りが大塚大尉の命を守ります。大塚大尉が成功する事が、実験の成功を意味するのです！」

周りの人々が全員踵をただし、王仁に敬礼する。大塚大尉もまた、担架に横になりながら、丸顔に涙目で敬礼した。

悦子は鳥肌が立った。初対面の人間の心を的確につかみ、心の弱いところへの適切な労り。霊能者だからだろうか？ 自分が王仁の立場だったら、大塚大尉に声を掛けただろうか？ 彼の苦労を思い

やる余裕があるだろうか？ 悦子はそう考えると、自分の中に人としての歪み^{ゆがみ}が浮き彫りにされて、妙な痛みを内奥に感じた。だが、任務は果たさなければならぬ。

「王仁様、秋水が何故滑空して着地しなければならぬか、もう一つの理由はその危険な燃料にあるのです」

秋水のロケット燃料は二つの異なる液体を混合した瞬間に得られる爆発力を使用している。甲液の濃度八十パーセントの過酸化水素を酸化剤に、乙液（メタノール五十七パーセント、水化ヒドラジン三十七パーセント、水十三パーセント）の混合液を化学反応させるのだ。簡単に言えば、乙液を甲液の酸素が燃焼させる仕組み。しかし、これらの燃料は人体を溶解してしまう大変な劇薬で、特に高濃度過酸化水素は無色透明のうえ異物混入時の爆発の危険があった。基本的に着地失敗の可能性と搭乗員保護を考えると、燃料を空にして滑空させて着地させる必要があったのだ。

格納庫の方角から大きな物音が響いてきた。異様な物体が近づいて来る。ぎくしゃくと大きな人型にも見えるの機械のような物体が近づいてくるのだ。

「零式人型工作機ですわ。あれも王仁様のご指摘が生んだ異形の物……」

王仁は目を少し細めて滑走路脇の草原をよちよち歩きの幼児のように歩み寄る人型工作機を見つめている。王仁が指摘した事とは、日本の未来を幻視して、その危機を察知した時、危機を未然に防ぐ科学技術の方向性だった。一つは自力で飛翔する砲弾で、目標対して一発必中の命中精度を有するもの。そこから誘導弾開発の過程で生まれてきたのがロケット技術だった。一九四四年に日露戦争を経験した日本は、辛くも勝利したが、ロシア軍の圧倒的な物量に多くの犠牲を払った。資源・物資の少ない日本は、砲弾の命中率を上げて砲弾数を少なくする事が至上要求となったのだ。その誘導弾開発研究の途上から生まれたのが、ロケット迎撃機秋水なのだ。この技

術は誘導ミサイル弾にフィードバックされて生かされていると言う。

指摘した事柄は多岐に渡ったが、その中の一つに工作技術の向上があった。優れた工作技術と工作機械が無ければ、優れた物は生まれないし、生まれても製造技術が確立せずに生産はおぼつかない。

さらに材料工学と冶金学、新素材の研究との組み合わせで、軽く強靱な金属素材とそれを加工する精度の高い金型や旋盤、特に旋盤は自動化が望まれており、職工の技に頼ることなく、複雑で微細正確な加工を簡単に行える必要性を指摘した。今、目の前にやって来た人型工作機はそれらの先端技術の集大成なのだ。

「王仁様、ご覧下さいまし。なんと頼もしい人型工作機の勇姿！」

体長七メートル、頭部はフレームと金網で守られた奥に、サーチライトや角のようなアンテナが凝縮して配置され、目の部分は操縦席が装甲で覆われた場合の窓になる潜望鏡式になって操縦者前の覗き窓に繋がる。頭部フレームの上部には軍が使用する形のヘルメットを被り、首には頭を動かすための幾本もの油圧ケーブルとギアがあった。今は装甲が無いので、大きくて広い胸部の内部に人が乗り操縦しているのが見えた。操縦士の下、腹部には四百馬力の九気筒星型強制クーラー付き空冷エンジンが太いフレーム組の中で空冷ファンを回して唸りを上げている。動力を伝える油圧システムが操縦席の後ろに複雑怪奇なパイプの群れを両手足に伸ばされて、小刻みに振動して、無数の油圧ピストンを動かしているのだ。日本陸軍の一式戦車が二百馬力強であったから、二倍の出力を持つ力持ちの人型だ。

人型工作機は横転した秋水に近づくと、操縦者はクレーン車のアーム操作盤に似た操作を行い、左右の腕を微妙に動かしながら、秋水本体の強固なソリ部を軽々と右手に掴み、左手に折れた右翼を抱えた。腕の先に付けられた手のひらにリングを重ねた指が付いていて、器用に動いて物体を固定していた。操縦士の足先にはアクセルとブレーキペダルがあり、下半身の動きはハンドルで方向性を決めると、両足でコントロールできるように自動化されていた。

「少し動きが滑稽だけど、良く出来ているね」

「ええ、王仁様、人型工作機はとても力持ちで頼りになる巨人と言ったところですね」

零式人型工作機は現状、実験段階だが、軍首脳は将来、装甲を施し武器（四十七ミリ砲）を持たせて、満州国境に配置する計画もあった。一方、人型戦車にするよりも、人跡未踏のジャングルを切り開いたり、山岳地帯の先頭に配置して建設作業車が入り込めず、人力を頼らざるおえない場所での活躍も期待されていた。キャタピラ駆動の戦車と違って、現状、人型の移動は人と同じ歩行動作だ。移動速度を考えると戦車とは太刀打ちできないだろうと悦子は考えていた。戦車が能力を発揮する満州のような草原地帯より、戦車の動きが封じられる込み入った市内戦、あるいはジャングルで活用できると思っていた。

王仁が言った。

「あれを専用の移動戦車に乗せれば、色々活用できるだろうね」

「ええ、その試作、移動台戦車も来月には出来上がるそうです」

その年一九三三年一月、欧州では第一次大戦の敗戦国ドイツがインフレに苦しみつつ、国民は国粹政党ナチスのヒトラーを選ばずに、自由ドイツ民主党のラインハルトが政権を取った。列強国、米・英・仏の帝国主義政策に対抗するため、近隣諸国と協調路線を取り、独自の世界政策を展開し始めていた。ドイツは、同じようにアジアの中で列強支配に苦しみながら、台湾を一九一五年に、一九一九年には韓国を連合国家として、満州を一九三三年に独立させて、アジア民主連盟を形成しつつあった日本との東西民主協調交流条約を締結していた。日本はタングステン等の南方資源の供給を約し、ドイツは先端軍需科学の基礎資料を公開する軍需科学工業協約も締結されていた。高度な工作機械の技術を日本はすでに手に入れていたのだ。

「問題は、自重三十トンにも及ぶ人型を運ぶ戦車は大型にならざる

おえない。しかし日本には、それをあちこちに運ぶ道路も架橋も港湾施設も無いと言う事だよ、悦子さん」

やはり、この男の問題点を鋭く把握する洞察力は並外れたものがあると悦子は思った。今までの日本は明治時代から富国強兵を目指し、軍備拡張の無理が祟^{たた}つて、国内のインフラ整備は貧弱そのものだったのだ。王仁の国家中枢への数々の指摘の中にも含まれていた点だ。六十トン以上の戦車を輸送する道路と架橋、港湾施設と輸送船を整備する事は、今の日本には時間も資本も掛かる至難の業でもある。陸軍が考え出した策は、大型戦車を満州国関東州の大連で作る事だった。日本は高速小型軽戦車と装甲車、小型火器を担当、重火器と重戦車、重建設工作機械車両は大連でと分業方針がすでに出上がっていた。

「仰とおりですわ。輸送兵站を制すもの、世界を制す。ローマの道は世界に通ずですわね、王仁様！」

「貴方の聡明さは、日本の光りになるだろう。その時、貴方の美貌に花が咲くのだ」

王仁は再び悦子をじっと見つめ、穏やかなそして包むような氣を送ってくる。眼差しは悦子の心の襞に隠された恥じらいを呼び起こし、悦子が知らない悦子の女が蠢^{めく}いた。うっとりしそうな自分にブロックを掛けるのがわずかに遅れ、自分の頬が桃色に変わること驚いてしまう。王仁の言葉は暗喩^{あんゆ}に満ちて、明確な意味は判らないが、自分が光りになると言う意味だけが心に入り込んできたからだ。《あなたの光りになりたいだけ……》

そう、内心の声が聞こえた悦子は、教え込まれた術が敗れていることを悟ったのだ。自分の頬の色が変わるのを見つけたのか、王仁は無邪気な笑顔を向けて爽やかに言った。

「悦子さん、世界は稲妻のように声が伝わる時代になる。電磁波の力だよ」

軽くなつて舞いそうな自分の心を押さえつけて、悦子はやっと言った。

「ええ、王仁様、その件もすでに、実用化にこぎつけております。この件はドイツの基礎研究資料がもたらされて、電波探知と無線通信、そして電子計算技術の研究開発を東京で集中的に行っています。明日はそちらの見学にまいりましょう」

悦子はオートバイのエンジンを掛け、王仁を後ろに誘う。

「王仁様、東京行きの特別機は夕方になります。それまでオートバイでドライブなどいかがでしょう」

「うん、いいね。美しい人の運転でオートバイの後ろに乗るのは、桜散る季節に相応しい」

悦子は自分の顔に笑みが零れるのを感じた。オートバイは風を切り、よちよちとゆっくり歩む人型工作機の横を走り抜ける。人型のエンジン音とオートバイのエンジン音が重なり、悦子は後ろに顔向けて大声を張り上げた。

「人型に名前をお付け下さい。人型は貴方のお子様の一人ですから」「力持ちだから……、金太郎はどうかかな？」

「……」

「ははは、冗談だよ、悦子さん！ 力の道と書いて力道はどうかかな」「人型力道、良いお名前です」

オートバイは実験飛行場のゲートを出て、阿蘇山の外輪山へ登る道を走った。牧草地を抜け外輪山の内側を登る道が徐々に視界を広げて行く。悦子は風に吹き飛ばされそうな軍帽を脱ぎ、髪留めを外した。そうすれば、自分の髪が風に靡なびいて王仁に至ると思ったのだ。

春の風景が似合う静かな庭園に、池のほとりで東屋がひっそりと佇たたずむ。春風はここ東京にも吹き始めたのか、池に緩く細かい波紋が浮かび、明るい斑の鯉が時折跳ねた。桜は咲いたばかりだろう。舞いはせずに、麗うららかな日差しに桃色の陰陽を融かしている。緩く小さく起伏する芝生の庭には、池の端に松と庭石が仲良く置かれ、白い砂利石が小路を東屋へ誘うのだ。小さな東屋は四方に御簾みすが下ろされて、春風だけが中に入れるように、表から内側は見えなかった。

正面の傍らには小さな花壇があり、着物を着た女性達が、花壇前に置かれた茶椅子に並んで腰掛けている。花の匂いと東屋の内側で焚かれる香が、辺りに漂い春をいつそう深めていた。

王仁と悦子は東屋の正面に置かれた茶椅子に腰掛けて、雅楽を謹んで聴くように、御簾の内側の声に聞き入っていた。その声は美しく細く弱い、明るくはつきりと澄んでいた。

「そうですね。電波の力で遠くを見通し、電子の力で計算まで出来るのですね」

王仁が涼やかに、敬して答える。

「はい。日本に近づくいかなる物体も、艦船も航空機も電波探査機により逸早く知る事ができ、対応対策が施せます。軍部は年内に実用化したいと頑張っております。また、電算技術も格段の進歩がありました。誘導弾の中枢技術になりました。暗号解読にも大きな威力が発揮されるとの実証もありました。今回の視察で、私が示唆した項目は殆ど、実現されたかあるいはもう直ぐ実現される段階だと思いました」

「それはそれは、良い事です。貴方の努力と賜物と言うべき事。本当にご苦労様です」

「労いのお言葉、嬉しく思います……」

王仁は御簾の奥の女性を知っているのだろうか、眼差しは優しく寛いで落ち着いているようにも見える。時折、悦子には見せない親しげな笑みさえ浮かべて話している。すると、王仁は立ち上がり、御簾の前まで歩み寄ると、そこで片膝を付いて言った。

「兵器に関わる私の示唆は、ご尽力により、ほぼ完璧に準備されました。就きましては、さらに重要な、軍閥と財閥の解体解消の件、進展はいかがでしょうか？」

悦子は目を丸くしてしまった。この王仁は一体誰と話をしているのだろうか？ 日本国の実権を握る軍閥と財閥の解消をもくろんでいるなんて。特務機関には今まで決して無かった分野の話だ。即座にたおやかな声が答えた。

「数年の内に、日本は米国以上の民主国家となりました。恐れ多くも、我が君は人間宣言を決意されたのです。天皇陛下が人に戻る事を条件に、財閥と軍閥を解体され、民主の力で国が動くようにされるご所存。それもまた、アジアの中で、五族協和を率先するべき日本国の責務と決意されたのです。台湾国も韓国も満州国も、その意を汲み取ってもらえるなら、きつとこれからも自主独立を歩む対等の友として、アジアに自由と平和をもたらすでしょう」

王仁が震えている。あらひとがみ現人神と崇められている天皇陛下が、一般人にお下がりになる決意をされたのだ。王として、これほどの英断があるのか？ 否、それこそが民を思う王のあるべき姿といつも悦子に言っていたのは、王仁だった。そんなことが在ろうはずが無いと思っていた悦子は、歴史が変わるその瞬間に、偶然にも立ち会ってしまった。大日本帝国は今、日本民主国になろうと決意した。アジアの盟主として率先して仁政を示す。悦子も体が震えた。

「皇室ができる事は、ここまででしょう、王仁様！ 我らは野に下り、これから人として生きる道を模索せねばなりません」

「皇室は王室ではありません。日本民族固有の象徴となるのです。これからは民主に生きる人として、自由とは何か、人の道とは何かを日本の人々に率先して示す事こそ、皇室のお仕事になるでしょう。それ故に、人々は皇室を敬し、愛し、支える事でしょう。天皇陛下が神として崇められて、一部の老獪な人々や隠された陰謀に利用されてはなりません。皇室は先手を打たれたのです」

春の風が優しく吹いて、御簾の切れ目から麗人が垣間見えた。悦子は一瞬、王仁と良く似た美しく深い瞳を見たと思った。風はそれ以上、簾を乱すことは無く、池で鯉の跳ねる音がする。麗人の声はさらに涼やかに透き通る。

「古の予言通り、王仁の家系は日本を導きましたね。三郎さま！」

「貴方のご尽力のお陰です。感謝に耐えません。しかし、これから我らの役目、どうぞ、いつまでも我らを見守りください」

「ええ、見守り続けましょう、いつまでも！ これから、三郎さま

は大陸に行かれるのでしょうか？ 貴方の本当のお力が発揮されるときですね。きっと誰もが、貴方を受け入れるでしょう。楽しみな事です」

王仁は立ち上がると、御簾に向かって頭をたれて言った。

「きつと、五族共栄をアジアにもたらし、歴史をさらに変えて見せましょう。それまでお元気で！」

王仁は踵を返し、ゆっくりと歩み去る。悦子ははつと我に帰り、王仁の後を追おうとすると、御簾が風で揺れて麗人の声がした。

「悦子様、王仁さまをよろしくお導き下さりますよう、お願い申し上げます」

悦子は自然にふり返り、御簾の奥をしっかりと見つめて一度頷いた。そして何も言わずに踵を返し王仁の後を追う。春の風は命に溢れ、庭の緑は瑞々しく柔らかく靡き、桜を小刻みに揺らしていた。

第一話 了

あとがき：

読んでいただいた方、ありがとうございました。現在第五話まで完成しています。追々UPしてまいります。

小説楽土（津筆美影）

第一話 異形の実験兵器（後書き）

はじめまして。『小説家になろう』に初めて投稿させていただきました。今後ともよろしく願います。ありがとうございました。

第二話 解放への道（前書き）

上海を舞台に王仁と悦子は中国の民衆解放を合作する。上海マフィアとの戦い、豆戦車、四式百ミリ噴進砲、百式短機関銃の登場。共産党、周恩行との戦いを描きます。

第二話 解放への道

魔都上海、そこは列強が中国から吸い上げた富が、経済発展に取り残された多数の人々に、貧しさと苦しさを押し付けている。富める少数の外国人と大多数の貧困者達との間の軋轢あつれきは、上海が国際都市になるに従って、乗り越える事が出来ない絶望的な深淵しんえんを作り出し、中国人の希望と夢を打ち砕いていた。急速に発展する街の影に不協和音が響き、人を縛りつける闇の力が見えない縄となつて、街を縦横無尽に被い尽くしているのだ。モダンで煌びやかな表通りが「陽」なら、ビルの裏路地は「陰」が極まる。阿片あへんで始まり、阿片で栄える都市の裏路地。王仁は上海に到着すると、無防備にも悦子一人の伴を連れて、意図を持って裏路地を歩いた。

外国人のカップルが人気ひとけの無い暗い裏路地を歩いて無事ですむ訳が無い。魔都と呼ばれる由縁だ。外国管理の租界地は中国の法律が届かず、と言つて、治外法権であるがゆえに外国の法律も届かない無法の場所。自国管理の租界地の中に在りながら、各国とも無法を黙認するしかない場所なのだ。

物乞いに見せかけた見張り役の子供達が纏わりつき、やがて掻き消えるようにいなくなる。代わりに、目付きの悪い男共が、煉瓦れんが作りの路地の湿った壁に、一人二人黙して寄りかかり、王仁と悦子が通り過ぎるのを陰気な表情で見送る。三人も通り過ぎた頃、路地の影奥にヤクザな顔つきの男達が待ち構えていた。路地の前に七人、後ろに三人、王仁と悦子は挟まれたのだ。

「悦子さん、後ろの三人を牽制けんせいしてくれるかな」

「ええ、王仁様、牽制だけでよろしいのですか？ 風体ふうていと雰囲気から察すると、ただのチンピラやくざのようです。牽制より、地面に寝てもらうほうが簡単なのですが……」

「あなたのやり易いように」

王仁は正面の敵に向かつて自然体だ。悦子が振り向いて男達の動

きを冷めた目付きで観察する。王仁が数歩前に進む気配を感じた。チンピラのボスらしい大柄な男の声が路地に響いた。

「ここは俺らの縄張り、この奥に何の用がある？」

王仁から気迫が染み出て、眼光するどくチンピラたちを射抜く。

「路地も天下の往来！ 誰がお前らの縄張りと決めたのか？」

「命が欲しくないらしい！ 金めの物はここに置いて、引き返すことだ。もつとも金めの物が無いなら、命を代価としていただく」

悦子が日本語で囁いた。男達はこの先の青幫（チンパン：上海やくざ組織）の見張り役で、金を渡せば青幫の上部組織への仲立ちをする事になっていると言う。しかし、王仁はそのことには興味を示さない。

「道があれば誰でも歩ける。それを知らぬ阿呆は、相手にできぬ」

王仁は相手を平然と威嚇（いかく）する。悦子は王仁の物言いに隠された意図があるのか、あるいはこれが王仁の素なのかも知れないと思った。前の男達が王仁の挑発と気迫に反応して、叫んで王仁に襲い掛かる。王仁の衣が摺れる音がして、黒い物体が悦子の頭上を飛ぶ。チンピラの一人が悦子の前に鈍い音をさせて落ちた。

他の男達は一瞬怯んだが、悦子を女と見くびった後ろの三人が先に動いた。二人同時に悦子に迫る。もう一人が隙をついて王仁の背中を襲うつもりなのだ。悦子の赤いチャイナドレスの裾が大きく割れて、白い太腿に筋肉の躍動が走る。悦子を女と見くびった男に、刹那の蹴りが撓った。男の股間を見事に蹴り上げて、悶絶させる。もう一人は、悦子の技に用心して蹴りを繰り出す。靴が摺れるきびきびとした音をさせて、悦子は横に横にと受け流す。男が間合いに入る。悦子は素早く回転、相手の片目を狙い、右手で鞭のように打った。片目の視界が奪われた男は、もう片方の目をかばおうと顔の防御を固める。そこに悦子の蹴りがまた、股間を蹴り上げる。男は倒れて呻き転がる。後ろを三人目の男が王仁に向かって駆け抜けた。王仁が振りむいて、三人目は王仁の体捌きだけで、頭からもんどり打って前に転がり倒れた。後ろの敵を片付けた悦子が王仁の側に

動こうとしたとき、悦子は王仁の不思議な技を見た。前の男二人が同時に拳を繰り出したが、拳が王仁に僅かに当たるかと思う瞬間に、二人の男は中を舞っていた。まるで、王仁に弾かれたか、自分から飛び上がったかのか、刹那、途轍もない衝撃を受けて驚く虚ろな目が宙を泳いでいた。一人は王仁の前に、もう一人は悦子の前に落ちてきた。二人共、何故自分が弾かれるように飛ばされたのか判らずに、受身も取れずに地に落ちた。受身が取れない時、人体内の水分が音をたてる。鈍く嫌な音だが、敵の戦闘能力を確実に奪った証拠だ。

半数の仲間を一瞬にして失ったチンピラは、たじろぎながらも懷からナイフを取り出した。武器を持ったことで、失いそうになった戦闘意欲を取り戻す。だが、王仁は自然体でゆっくりと前に歩み寄って行く。狭い路地では四人同時に襲えない。それを見越して、路地の中央を気迫に満ちて穏やかに歩く。ナイフを持つ前の二人が後ずさりした。が、後ろのボスらしき男の短い言葉が飛ぶと、一人がナイフを王仁の胸に突き出す。王仁は左肩口を軽く後ろに引き、捌いてナイフをやり過ごす。伸びきる相手の手首を左手で捕らえ、王仁の肩口が小さな円を描いた。悦子は王仁の体全体が刹那に小さく振動することを見抜いた。円を描く振動だ。相手の力は一瞬にして円に吸収され、そして王仁の力と重なって倍になって返される。恐ろしい技だ。王仁に触れると宙に弾き飛ばされてしまうのだ。

再び、人間の体が石畳の路地に落ちる音、重なって金属ナイフが甲高い音を立てた。王仁は立ち止まらずに進む。ゆっくりと、爛々（らんらん）とした眼光が暗い路地の影を振り払う。一人がまた、王仁の見切りの内に入った。怯えがナイフの先端にわずかな震えとして伝わり、躊躇しながら王仁の腹をねらって繰り出された。右へわずかに体を捌いて、王仁の左手がナイフを受け流し、相手の腕が伸びきる直前に手首をつかみ、再び小さく円を描いて刹那に震えた。男の肩が外れる鈍く嫌な音がした。今度は飛ばずにその場に崩れ落

ちる。己の力と王仁の力の合計を、男の肩は支えられなかったのだ。悦子の目にはそう見たが、チンピラ達には触れるとやられるように見えたに違いない。残った男達の表情に驚愕と恐怖が同時に映ったからだ。ゆっくり前に進む王仁より早く、後ろの影に後ずさりし始め、悲鳴が小さく一人から洩れると、一目散に散って行つた。王仁が笑顔でふり返り、悦子を見つめる。悦子は一瞬笑顔を返したが、その笑みをわざと冷たいものに徐々に変える。王仁の技を試したい。そう思いついたのだ。久しぶりの戦闘で、ほてった体をもてあましていたのかも知れない。

「王仁様、悦子に手ほどきを！」

ドレスをはためかせ、蹴りと突きを繰り出す。技が風を切り裂く。悦子の技量は並では無く鋭い。そして華麗だ。王仁は見切りの外で悦子を遊ばせる。顔が優しい。その顔がすこし憎らしい。それは好きの裏返しかも知れない。足運びの速度と幅を変えて、一拳に王仁の間合いに入ると、拳を繰り出す。刹那、王仁の顔が目の前に現れ、悦子は右手首をつかまれ、逆手に緩く封じられてしまっていた。「大切な悦子さんを飛ばすわけには行かないからね……。この技は、掴んだ刹那、あなたの力の方向に誘うように小さい円を描いて、その力をあなたにお返しする技、王道の力返しの技だよ」

王仁は優しく悦子の目を見つめて言う。そして徐々に手首の力を抜いて、手首をつかんだまま、王仁の前に持ってきた。手首から悦子の手のひらを優しく握り返した。

「この技を伝えるのはあなたが始めて。門外不出の王道の技だよ」
悦子は手を握られたまま、すこし照れて悔しそうな表情を向ける。突然悦子に閃きが浮かんだ。内心、王道の力返し破れたりと思うと、思い切り微笑んだ。

「王仁様、では私のこの技はどのように返されますか？」

そう言つと悦子は、円を描く事の出来ない王仁の足を踏んだのだ。「痛い！」

王仁は悦子の技を返すことなく受け止めた。

翌日から悦子は尼僧になっていた。これから上海で行動するためには、僧行で出歩いた方が動きやすい。当然、悦子も尼僧にならねばならなかった。長い黒髪をばつさり切る。阿蘇山で、風に靡かせ、王仁の顔を髪の毛で撫でた罰かもしれないと、妙な想いがかすめた。しかし、ホテルの一室の鏡が写した尼僧、高階悦子は、そんな不安を払拭するに充分な、全く別の人間に生まれ変わったようだ。法名ほうえつを法悦と名乗る。

《男を手玉に取り、まるで娼婦のように女を武器に生きてきた高階悦子が、僧行となるなんて！ 私の中のどろどろとした女が、綺麗にそられた坊主頭から滲みだしてこないかしら？》

悦子は急に不安になった。内側のものは外側に何時かは現れると思うからだ。しかし、鏡に映る悦子の裸体は若く美しい。

《大丈夫、私の中の女は遠い昔に捨て去ったのだから。私はここ十数年、尼僧よりも辛い修行をして来たはず。やってきたことは娼婦と同じようなもの！ でも、心の中は尼僧と同じだったはず》

悦子は自分でも妙な事を考えていると思う。王仁に出会った後、自分の中の何かが変化しているのだ。悦子の脳裏には侘しい少女時代が浮かんた。物心がついた時には、東京駅の浮浪者の群れに居たからだ。物貰いから靴磨き、かっぱらいやスリまで、何でもやった。罪悪感など一欠けらも無く。周りは父母も知らず、親戚にも見捨てられた子供達ばかり。その中で生きる術（すべ）は幾つもなかった。浮浪者の子供同士で徒党を組んで悪さをして、いっばしに数人の仲間に指図するようになった頃、警察に捕まった。連れて行かれたところは、若年層矯正教育施設、聞こえの良い名前だが、実際は特務機関の諜報員養成所だった。最初は食べ物、寝る所が与えられ、衛生的な寄宿学校生活が嬉しかった。最初の教師も優しい人だった。だが、慣れるにしたがって教師が変わり、徐々に厳しく恐ろしい教育と訓練が待ち構えていた。全てが国家のためという洗脳が随所に刷り込まれて、『私』という個人は可能な限り消されて行っ

た。

だが浮浪者の生活を、外からふり返る事ができる能力が与えられ、父母も知らず身寄りもない自分も仲間達も、そこだけが自分の存在が許される場所だと悟らないわけには行かなかった。遊びも恋も知らず、十八の時には、多国語をマスターして、領事館員の娘と偽って渡航、上海の社交界に表向きのデビューをした。多くの男達、若者から老人までを狂わせ、国を売るような情報を引き出した。それは毎夜ひらかれる貴族達、資産家達の開く煌びやかな虚飾の宴、そこで悦子は美しい白い蛇のように泳いだのだ。悦子の素性を知らぬ男達は、遊ばれて袖にされ、悦子を魔性の女と詰（なじ）るだけ。自分達が犯した大きな過ちには決して気づく事はない。それが、悦子を敵国の反撃から守る砦だった。

今、目の前の鏡には、そんな過去など全く知らないかのような、清楚な尼が立ち竦む。その尼は写った自分を怖がるように、目尻に怯えを漂わせていた。上海に夜の闇と静けさがやって来た。男と女の嬌声が遠くに響く。新鮮な空気がほしくて悦子が窓を開けると、街のネオン灯に紛（まぎ）れて、河川を行く蛍のような船舶の明かりが灯り、湿気を帯びた風が部屋に舞い込んできた。風が喋ったような気がする。

《あなたは偽尼僧！ 罰が当たらないようにね》

悦子は神も仏も信じない。想像しても浮かんでこないような存在を、誰が信じるのだろう。だが、運不運は信じる。それは身をもつて経験して来たからだ。世の中の不公平と差別と人間の歪さはわかる。だから、内心、世界は怖いと思っている。その怖さは運が運んでくるから。罰とは悦子にとって、不運の事だったのだ。

《王仁様、私は宗教の事を何一つ知りません。私に尼僧役がこなせるでしょうか？》

昨日、王仁に少し甘えて訊ねてみた。しかし、何も知らないのは本当の事だ。常識的な事は詰め込まれているが、それはあくまでも誰もが知るような一般的な事。これから王仁の伴をして、ボ口を出

して王仁に迷惑を掛けるかも知れない不安が確かにあった。王仁の示唆（しさ）はちよつと変わっていた。

「悦子さん、何も心配する事は無いよ。宗教の修行は非常に単純だ。君が教わった謀報術たふひんじゆつに比べれば、簡単なものさ」

「王仁様、それはどんな修行ですの？」

「いいかい、悦子さん、どんな時も自分がしている事に気づいている事だ。ただそれだけで良い。喋しゃべるときも、食べる時も、歩く時もだよ。四六時中、気づきをいつも灯している事だ。そうすれば、君は立派な尼僧だからね」

王仁は気づきを灯せという。善を為すときも、悪を為すときも、例えば人殺しをする時もだと言った。いつもながら不思議な事を王仁は言う。でも、もしそれが本当なら、少しは気が楽だ。そう思つて自分に気づきを置いて見る。奥殿おくどのに眠っていた別の自分のような者が起き上がり、上海の美しい夜景を見つめる自分に気づく。不思議な感覚だった。何もかもが泡沫うたかたに感じられ、静かになったような気がした。しかし、気づきを保つ事はむずかしい。いつの間にか、些細な考えに気づきは奪うばわれている。感情や気分も気づきを妨げる。悦子は初めて自覚した。自分の思考と気分が取りとめも無い事を。

今年、一九三五年、上海はさらに外国資本が流入し、国際貿易都市として経済、文化の面で大いに発展している。一九二三年には長崎―上海定期航路（日華連絡船）が開設されて、上海在留の日本人は増加を続け、一九二六年には二万人を突破して今も急速に増え続けている。日本にとつて、上海はすでに中国貿易の不可欠な窓口として、日本経済の要にもなっていた。

米国は一九三三年九月、ルーズベルが大統領に選ばれ、対日批判を強めていたところへ、第一次上海事件が勃発ぼつぱつ。蔡廷楷さいえんかいが指揮する第九路軍が上海の各国租界地へ三個師団、三万三千の兵で押し寄せた。

この第九路軍は表向き、蒋介石率いる国民党軍と銘打たれていたが、実際は蔡延楷の私設軍隊、軍閥ぐんぱつだった。蔡延楷は蒋介石からの補給が無いので、上海の列強租界地を脅迫して軍資金を得る事を目的としていたのだ。当時、日本も列強も第九路軍の真の意図を知らず、国民党正規軍の租界地解放が目的であると考え、租界地の各列強は軍隊を組織して厳戒令を敷き、結局、日本側は在留民二万七千人を守るために、日本から戦力を逐次投入ちくしし、第九路軍を敗走させた。だが、その間に満州国の独立があり、且つ上海に海軍艦隊（空母二隻を含む十五隻艦隊）を集結させた日本の動向に、米・英を中心に列強諸国は日本の真意に対して疑心を募らせていた。

この頃中国は、国民党が保有する中国政府正規軍の他に、軍閥ぐんぱつと呼ばれる蔡延楷などの私設軍隊などが割拠かつきよしており、日本は中国と戦うというよりは、各地の軍閥（満州国境を含めて）と戦っていたのが実情だ。だが、列強諸国、米・英・仏・蘭はそう見ておらず、日本が勝利するほどに、自分たちの中国内での覇権はけんが脅かおびやされると感じていた。

この上海事変の経験を通じて、日本は中国の実情を学び、軍閥と協調あるいは反目する事を極力避けるようになる。代わりに中華民国の蒋介石しょうがいがんが国民党政府と強調して行く路線を決定した。国民党の目指すものは列強が中国を支配しようとする帝国主義からの解放であり、それまで、ドイツが蒋介石国民党を影で支えていたのだ。日本はドイツとも協議して、中国を民主国家とするために、動き出した。ドイツと日本に支えられた蒋介石中国国民党は、中国の各地軍閥を吸収し、次第に力を付け始めていた。

日本租界（上海内の日本人街）は虹口地域にあり、人口の半分以上は移民組みと言って良い。紡績・綿・軽工業を主力として、中小企業主や商店主らが上海に骨を埋める覚悟でやって来ていた。虹口南部周辺に固まる彼らは、中国人労働者を直に雇用じかし、彼らと毎

日顔を合わせて生活していた。労賃の安さや税制の特典に魅せられて上海に來た日本人を驚かせたのは、列強によって奴隸のようにこき使われる中国人労働者の劣悪な待遇だった。同じ人間を何故そこまで見下しえるのか？ そう誰もが感じた。フランス租界の公園にある立て札、

『犬と中国人入るべからず！』

同じアジア人として義憤を感じた日本人は、祖国にもやつと出来あがったばかりの、基本労働法の上海版を上海居留民団の総意で取り決めた。列強の中国人に対する給与が、殆ど無いに等しいので、それでも日本の労賃より安くできると自信があつたのだ。経営側が質素な生活に甘んじ、贅沢と虚飾を取り払えれば、皆が幸せになると考えた。会社組みと言われる日本の商社や銀行は猛烈に反対した。特に商社は実際に生産に携わるわけではなく、資本力を活かした仲介業者と同じ立場、上海製品のコストのアップを心配したわけだ。そこへ、日本領事館から日本政府の通達が入った。

- 海外で活動する日本国民は、その地の民族を同族として扱いかなる差別、待遇の不平等を行つてはならない。特に中国では、その点に留意して活動すべき事、甚重なり。それが出来ない企業は撤退すべし。かつて一八九八年、伊藤博文公は戊戌变法改革時の中国に 渡り西太后、光緒帝に面会した。その時改革派大臣に、
「貴方の国が法律を変えようと望むなら、貴方の国の自尊自大の因習を取り除く事が先決である。この世界にあつて、いかなる人種であるうとも、皆、天地の間に生を受けているもので、他人を賤し^{いや}み、自らを尊び、自らを中華と称して、他を夷狄^{いてき}と見なして排斥するよ^うな道理はない」

海外居留民は、この伊藤博文公の言葉を持って、日本人の戒めとすべし。

これを機に、日本租界は変わり始めた。列強諸国の租界地運営とは全く違う市政を開始したのだ。際たるものが中国人労働者の待遇

改善だった。台湾、韓国、満州で行われている労働者の最低賃金の保証と医療保険への強制加入を基本とした。また、人種により給与に差をつけないことも租界地令として実行された。もちろん、仕事の内容によって給与額の高低はあるが、港湾の肉体労働であろうと、租界地の清掃業務であろうと中国人労働者の最低賃金は、列強の租界地の十倍になっていた。日本租界地では飢える者は誰も居らず、路上で行き倒れる病人もいなくなったのだ。情報はあつという間に列強の租界地の中国人へ伝わり、情報に尾ひれが付き、日本租界への人口流入が起き始めた。狭い租界へのこれ以上の流入は物理的に無理がある。日本政府が対策として採用したのが、満州への集団移民の窓口を、日本租界に置くことだった。満州では人手がいくらあっても足りない。

王仁と法悦（悦子）は再び各国租界の貧民窟^{ひんみんくつ}を歩く。美しく豪華なビルが立ち並ぶフランス租界も、飾り立てられたビルの裏側に回ると、人がやつとすれ違えれる細い路地が迷宮のように広がり、日差しも届かぬ暗さと陰気な湿気が路地に沿ってずっと付きまとう。

ぼろを纏^{まと}ったやせ細った乞食達が、孤独に耐えるような目で路地の角に屯^{たむろ}する。日本国、王道楽土宗、僧侶王仁、日本国が与えた王仁の肩書き。他者救済を实践する禅宗の一派という触れ込みだった。乞食達が王仁に手を差し出す。

「何が欲しいのかな？」

王仁の静かな声が路地に響いた。

乞食達の中の一人の大男が、眉間に過去の痛みを刻む皺^{しわ}を寄せ、ほぼ肉が削がれ、鈍く虚ろな目を向け言い放つ。

「食い物をくれ！ 食い物が無かったら金をくれ！ 金が無かったらお前の命をくれ！ 俺達は飢えている」

「坊主に物をねだつても無駄。我らも自分の体とこの袈裟^{けさ}しか持つておらずだから。本来ならお前たちが我らに布施をせねばならんだらう」

「乞食に布施を求めるとは、酔狂な坊主よ！我らも飢えた体とボロしかもって居ないのに、我らに何を布施せよと言うのか！」

王仁はしゃがみこんで話す数人の乞食達の前に、同じようにしゃがみこんだ。深い目の色を乞食達に注ぎ、真剣に強く言った。

「布施は物ではない」

「物でなければ、一体何を布施しろと言うのか？」

「お前たちの命だ！」

王仁の表情は明るいが、気迫を込めた表情と声音が強くはつきり響いた。乞食達の表情が一瞬、こわばった。

「ははは、お前たちが我らの命をくれと言ったので、お返しに言つたまで。我らが欲しいものはお前たちの命を活かすということだ」

「流石は坊主、口が達者だな。だが、どうやって、我ら乞食、社会の鼻つまみ者の命を活かすのだ。我らは人が捨てた残飯を漁り、路上に臥して働かず、人の作つた仕来りと決まりごとから自由の身。活かしようがあるまい」

乞食の一人が、負けずに答える。その物言いが王仁の心に響いたのか、王仁はその男をじつと見つめ続ける。男は何かに打たれたように、見返している。

「だが、お前は飢えを満たせと言った！」

「乞食に物を恵む人間は大体決まっているからな。余り物を哀れみでくれるか、我らの臭いを避けたくて不浄を追ひ払うためか、我らの脅しに怯えてだ。それらが重なる場合もある。どんな場合でも、貰った後に我らが感謝する事はない」

貧民窟のよんだ空気を払うように、上海の海風が路地を吹きぬけた。路地の屋根に張り巡らされた、洗濯物がはためく。上空は強い風が吹いているのだ。白い雲が流れた。悦子は乞食達の物言いにどこか共感を感じていた。乞食に恵みを与える時、普通は見下して邪魔者として恵む事が多い。その乞食の人生や境遇を、深く同情して恵む事は稀だろう。そう思ってしまう。そして、子供の頃の駅前をうろついた自分の記憶を呼び起こした。

乞食は続けて言う。

「この間も、共産党の人間が来て、働けば食えると言う。働いて食って元気になり、伴に帝国主義者を打ち倒し、金持ちの金を自分達の物にしようと誘った。数人の仲間がついて行った。だが、我らは人を倒すために仕事をする事など望まない。人の金を無理に掠める^{かす}ことも無い。かつて、我らも社会の中に身を置いて、身を粉にして働いた。そして奴隷のような境遇とその代価に怒りを覚えた。正当な代価がもらえないなら、自由を奪われて働く事に意味など無い。乞食でいたほうがまだ」

王仁が乞食の手を取った。王仁はきつと乞食の物言いに感動したのかも知れない。乞食は驚いて手を引こうとするが、王仁の真剣な眼差しに怯む^{こまる}。

「新しい国作りと自由のために、働いて正当な代価を得たらどうだ！ 相場の十倍の代価だ。自由が生かされる国を作る仕事がある」

「その条件は高嶺の花、日本租界地の中国人労働者のもの。日本租界地に来いというのか？」

「いや、もう少し遠いところだ。満州国、新しい五族共栄の国だ。

日本租界地が全てを保障し、手配する。どうだ、この坊主に布施してくれないか？」

王仁は微笑んだ。乞食達に動揺が走る。

「貴方の名前は？」

「王仁！ 日本の王道楽土宗の僧侶だ。貴方の名は？」

「私は陳だ……。やはり、日本の方なのか。我ら皆、今の乞食の道が正しいとは思っていない。ただ、今まで、そんな運が回ってこなかったただけだ。日本人は我らを人として扱うと聞いた。日本租界にはクーリー（苦力）が居ないと聞く。苦しい仕事も汚い仕事もあるが、皆、人として扱われると聞いた。満州国も日本の国なのか？」

「満州国は満州人の国だ。日本人は国づくりを手伝っている。そして、日本人も多く満州へ移民しているのだ。中国もやがて満州と同じように、自由な国にしたいのだ。そのために日本租界地が拠点と

してある。陳さん！ あなた方は満州へ行き、国づくりを学ぶのだ。そして、時が満ちたとき、再び中国へ戻り、中国の国づくりを行う。それが 中国への布施だ」

陳は皆を見回し、仲間一人一人の顔色をゆっくり見た。堂々とした所作^{しよさ}だった。

「王仁さん、貴方は何人必要なのだ？」

王仁が爽やかな笑顔^{さわ}を陳に向ける。

「租界に住む全ての乞食とクーリー（苦力）達だ」

乞食達は言葉を失った。陳がやっと落ち着いて言う。

「私はかつて、人相学を学んだ。貴方が何者か知らぬが、貴方のその顔は敬されるべきと判^{はん}じる。よろしい。この陳の命の使い方を貴方に布施しよう。私が仲間を募^もつてあげよう。一晚時間をいただきます」

「陳さん、貴方は心でこの王仁を受け入れてくれたようだ。出会いに感謝しよう。貴方はこの王仁の良き友となつてもらいたい。一つだけ注意してほしい事がある。誘うのはこの租界内に住む乞食と貧しい人々、その家族だけにしたい。租界の外の人々は次の段階が必要だ」

陳は両手を前で組み、中国式に深く頭を下げた。仲間の皆が陳に倣^{なら}った。

「乞食の魂を理解する僧、王仁に我らは帰依する。我らの命が中国のために生かされるように我らの命を布施しよう」

僧王仁と乞食陳の二人を見守っていた悦子は、不思議な感慨に捕らわれていた。もし、悦子が浮浪者だった頃、王仁と出会っていたら、悦子の人生は一体どんな色に輝いていたのだろう。その日の空腹を満たすために、ぎらぎらとした眼差しを周囲に配^{くわ}って一日を過ごした。それは修羅と同じ。食い物に憑^つかれた餓鬼だった。だが、この陳達は違う。自らの考えで乞食を選択していたのだと言う。乞食を長年続けた悟りだろうか。陳の眉間に刻まれた縦皺は消え、美しい愁眉^{しゅうび}が開かれて、鈍くて虚ろな瞳に命の息吹が宿ったように王

仁と微笑み会っている。

乞食達を蘇らせた僧王仁、この男は一体何者なのだろう？ そう悦子は思い、じっと王仁を見つめた。

陳は乞食とクーリーの横の繋がりを最大限に使い、翌日には千人にも及ぶ乞食とクーリーが密やかに集まってきた。日本租界は衣服と食糧を学校や公会堂に用意して、グループ分けにして収容。海軍の輸送船が虹口港湾に接岸し、直ぐに収容を開始した。日本租界側の受け入れ体制を確認した陳はそのまま、王仁の弟子になったかのように、引きつづき列強各国の租界に赴き、小グループづつ、目立たぬようにとの指示を王仁から受けて、人集めに奔走していた。

駆逐艦一隻の建造費用で、中国人の平均年間所得から考えると十万人が一年間生活できる計算になる。租界に住む中国人口は約百五十万人、その内、貧苦にあえぐ人口は百万人前後だった。王仁はこの百万人の内の三分の一の三十万人を満州へ移民させるため、第一段階としての予算を日本政府から得ていた。租界で集め、支度をさせて満州に送り込み、満州での受け入れ住居と自活できるまでの保証期間を三ヶ月程と見込んだ。満州三十万人移民第一次計画はこれで駆逐艦建造費一隻分に相当した。

最初に王仁達の行動に反応したのは、上海マフィアの青幫だった。青幫のボス杜日笙は最も勢力が強く、一九二五年に大会社を設立して町の阿片市場の独占を図り、列強諸国とも太い繋がりを持っている。且つ蒋介石とも義兄弟の契りを結んで、上海の裏社会を実質上支配していた。裏社会の非法営利活動の基本は、阿片、売春、誘拐、暗殺、賭博だ。杜日笙は一九二七年、蒋介石に協力して四月の上海クーデターで上海市内の共産党員を駆逐（暗殺）した功績により、上海市の阿片取締り部長に任命され、且つ国民党政府の将軍の地位を得ていた。一九二九年には銀行を設立してフランス租界内の莫大な資金を一手に吸い上げ、一九三〇年代には事実上、中国全土の阿片を支配していたのだ。租界に住む中国人の四人に一人は

青幫の構成員だと言われていた。

悦子は事前に上海日本領事館内の特務機関に指示して、人集めに奔走する陳を用心のために追跡させていた。陳はできるだけ青幫の構成員以外に声を掛けていたが、狭い租界ではすぐに日本の王道楽土宗の僧侶が人を集めているとの噂になった。

陳と特務機関員二人共、忽然と姿を消してしまふ。翌日、特務機関員は日本租界の川べりに死体として上がったが、陳の行方は知れなかった。

悦子の報告を聞いた王仁は、特務機関員の死を聞くと顔色を変えた。悦子が始めてみる王仁の憤怒の表情で、仏閣山門横にある不動明王の憤怒の顔に見えた。

「悦子さん、貴方と私だけで青幫のアジト、大世界に乗り込むとしよう！」

「王仁様、二人だけでは危険すぎます。特務機関員全員を徴集します」

「いいや、我々二人だけでよい。しかし、陸軍の豆戦車と四式百ミリ携帯噴進砲を借りて行こう。王道楽土宗宣伝車と言う幟のぼりも立てて、拡声器も一個手配してください」

王仁の憤怒の表情がにやりとした不気味な笑みに変わっていた。

豆戦車は陸軍の九七式軽装甲車の事で、二人乗りの小型偵察戦車だ。七・七ミリ機関銃か三七ミリ砲を搭載し、時速四十キロで走行する。四式百ミリ携帯噴進砲は昨年ロケット技術の転用で完成した、歩兵用携帯ロケット砲で、直径十センチの砲弾をロケット推進で噴進させる。ロケット弾の尾部に噴射穴が三つあり、角度がおのおの付いて、砲弾を回転させて直進性を持たせた新兵器だった。

戦車の運転と機銃は悦子が担当し、王仁はロケット砲を小脇に抱えて豆戦車に乗り込んだ。悦子も王仁もおもちゃを貰った子供のように、喜々とした表情でフランス租界地にある青幫の根城、大世界に向かった。大世界は魔都上海の象徴、非合法のあらゆる快樂が味

わえる一大総合娯楽施設だ。豆戦車には『王道楽土宗、宣伝車』と中国語、フランス語で書かれた幟が立てられ、早朝道行くフランス人の興味を引いた。事は電撃戦を必要とし、悦子は最大速度で大世界前の広場に乗り付ける。王仁は拡声器を持って、戦車上部のハッチから上半身を出し、その僧行の姿をさらして怒鳴った。

「上海やくざのボス、杜日笙に告ぐ！ 我は王道楽土宗僧侶、王仁、すぐに我が弟子、陳を開放しなさい！ さもなければ青幫の咎、大世界は瓦礫の山と化すだろう」

魔都の象徴、大世界も朝っぱらは静かで客は殆ど居ない。昨晚の喧騒けんそうの疲れで皆寝ていたのだろう、返事は無かった。王仁は早速小脇に抱えた携帯ロケット砲を大世界の正面玄関の少し上の壁に照準を定め、躊躇ちゅうちよすること無く引き金を引いた。しゅるしゅると白煙を吐いて矢のようにに砲弾が飛び、大きな音と地響きが響き、正面玄関が瓦礫がれきに変わった。悦子は重ねて機銃を壁に向けて掃射する。ロケット弾が崩した壁の埃（ほこり）が収まると、中にいた杜の手共が拳銃を乱射しながら出てきた。悦子は機銃を的確に発射し、ばたばたと確実に青幫を倒してゆく。物陰に隠れた青幫へ、王仁のロケットが飛んだ。二人の攻撃は情け容赦が全く無い。大世界が静かになる。豆戦車の幟が風ではためいた。周り住民はすべて物陰に隠れて息を潜め、成り行きを見守っている。王仁の拡声器がどなる。「杜日笙よ！ 陳を帰さないなら我らの本気をさらに見せよう」

悦子が大世界の正面窓ガラス全てに機銃を掃射する。割られた窓から反撃があると、王仁がロケットを次々と打ち込んだ。大世界の幾つかの窓から黒煙が出始めた。娯楽の殿堂、大世界の正面は見るも無残な穴だらけの装飾に変わる。王仁はロケットをビルの屋上付近に向けて放った。上海の青い空にビルのコンクリートの欠片が舞う。人影を見ると悦子の機銃が火を噴いて沈黙させる。ビルの最上階の窓から、白旗が揚がった。

「杜日笙よ！ お前一人で、陳を丁重に我らが戦車の目の前に連れ

てくるように！ それ以外の人影は誰であろうと、即座に射殺するであろう」

王仁の拡声器から流れる声に抑揚は無かった。不退転の意思が滲み出ているのだ。

頭から埃を被り、豪華なフランス風パジャマのひよる長い男に支えられ、裸同然の体に鞭の跡が痛々しい陳が現れた。戦車の前まで来た杜日笙は怒りと恐怖に顔を歪め、ぶるぶると震えている。

「派手なモーニングコールはいかがだったかな、中国の阿片王、杜日笙よ！ 今日の午後、日本領事館、特務機関室に出頭するように申し渡す。特務機関員殺害の容疑がある。出頭しない場合は、国民政府蒋介石総統の許可に基づき、租界地の青幫は数日の内に日本軍により殲滅されるであろう。お前が経営する銀行も同じ運命になると知れ！」

王仁はそう言うと、陳を戦車に引き上げて、杜日笙を残したまま最大戦速で大世界を離れたのだ。陳は傷ついていたが、王仁を見て微笑んだ。そして遠ざかる崩れそうな大世界ビルの前で、杜日笙が膝から力なく崩れたのを見て、なおさら笑顔を浮べた。

日本政府は海軍所属の偵察機からその日の午前中、ビラをまいた。日本租界と国民党蒋介石総統は、上海の非合法組織撲滅を目指し、活動開始を知らせる内容だった。日本租界地内では、道路の要所に一式中戦車が配置され、青幫の反撃に備えたが、日本軍とともに戦うような愚か者は居ない。杜日笙は午後一番に日本領事館に一人で出頭して来た。

「杜日笙よ、お前も貧しい果物売りから成り上がった者。王道楽土宗、王仁が求めているのは、貧困と弱者の撲滅なのだ」

鈍い顔付きで内心を覆い隠す杜日笙に、王仁はいつもの平静な表情と声で語りかけた。

「では、何故おれを暗殺しないのだ！ お前の力ならいつでも殺せるはず！ 俺を利用しようと言うのか？ 蒋介石がそうしたように

……」

「非合法活動を行うおまえは許し難い。特に阿片を取り扱う事は、貧困の助長と弱者を際限なく作り出すことだ。だが、阿片に関する裏組織に最も通じ、阿片を撲滅させる効果的な方法を熟知する人間はおまえを他にいないだろう」

「……つまり、列強諸国と手を切れと言いたいのだな？」

杜日笙は、細い目を見開いて核心を突いたことを言った。王仁は逆に目を細め、微笑んだ。

「そうだ。さすがは青幫の首領！ 判りが早いな」

阿片の生産国は主に英領インドだ。阿片貿易が口火となつてかつての阿片戦争も起きた。杜が不敵な表情になり、吐くように言った。「日本は列強と戦争する覚悟があるのだろうか？」

「日本だけではない。おまえと義兄弟の契りを結んだ蒋介石もまた、覚悟を決めているのだ。満州国、韓国、台湾も同じだ。上海は列強と戦う拠点となるだろう」

「協力する見返りに、この杜日笙に何をくれるのだ？」

杜は不気味な笑みを浮べて強く王仁を見つめる。悦子はその表情をどこかで見たような気がした。

「おまえに与えられるものは何も無い！ おまえが中国、おまえの祖国におまえの命を布施するのだ。もう充分だろう、杜日笙よ。この世の泡沫^{うたかた}で流離^{さすらい}う旅路は！ 果物屋の杜日笙に帰るのだ」

杜は大きな声で笑い始めた。立ち上がり、領事館の窓に近づいて窓の外を見る。黄浦江に蘇州河が流れ入る角に日本領事館はある。

黄浦江は長江（揚子江）につながる。悠久の広がりを持つ大陸中国の上海で生まれた杜は、梟雄^{きょうゆう}と呼ばれるに相応しい人生を送ってきた。だが、作り上げた城は享楽の殿堂大世界と阿片王のもたらす莫大な利益。多くの夫人を持ち、金の力で出来無い事は無い頂点に達したのだ。そして、今日、その人生そのものを打ち壊す一人の僧に出会った。悦子は杜の顔に晴れやかな笑顔が浮かぶのを見た。

「僧、王仁よ。人を利用する者は、その代価をちらつかせて利を持

つて誘うものだ。だが、おまえは我が命を祖国に布施しろと言う。それは誘いと言うのだ。青幫の男は死を恐れない。おれはそうやって、己の命を賭けて成り上がってきたのだ。手段を選ばずにな。人を落とし入れ利用し、殺して、弱い者からは搾り取り、人の人生を踏み台にして……。そう言う男を誘うというのか？」

「人は目覚めなければ、おまえと似たり寄つたりの人生を歩むもの……。過去のおまえにしがみ付きたければ、無理にとは言わない。おまえがおまえの道を決めるだけのこと」

「誰が過去にしがみ付きたいと言った！？」

激した杜が王仁を睨みつけ吐くように言った。杜の気迫が部屋に響く。王仁がその気を柔らかく受け止めた。

「柵を切り捨て、自由な杜日笙になりたいということだな？」

「くそつ！ おまえと話していると、自分が赤子になるような気がするわ」

王仁が笑う。親しみのある笑顔だ。杜が苦々しい顔を返すが、棘とげしい気は消えていた。

「闇の世界の王、杜日笙よ！ いつ裏切っても良いぞ。おまえの心が望むままに暴れてみる。但し、自分の欲のためではなく、祖国の貧しい人のために」

「くそつ！ くそつ！ くそつ！ 坊主の説教は沢山だ！ 三日後にまた来る。話はその後だ！」

杜日笙はそう言い捨てると肩を怒らせて出て行つた。悦子はその後ろ姿を見て、はたと思い当たつた。杜は乞食の陳と何か似たものを持つていたのだ。違うところは、人の施しで生きていたのではなく、人から奪つたもので生きてきたこと。だが、そのために、陳より多くの自分自身を縛り付ける枷かせを巻きつけた男、杜日笙。陳と同じく、自分で稼いで糧を得てきた訳では無いのだ。

「王仁様、あの男、命を布施するでしょうか？」

「ああ、悦子さん、間違いなく、あの男のやり方で布施するでしょう。しかし、それが杜日笙を上海で、生まれ故郷で命を全うするこ

とを許すのです」

王仁は再び、杜日笙の運命を幻視したに違いない。

翌日の午後、杜の行動は早かった。杜の手下が密書を運んできた。早くも上海の阿片事業のカラクリと重要人物のリストが記されており、杜日笙が阿片から手を引いた後の列強、特に英・仏が押すであろう杜に変わる人物のリストまでが予想として書かれてあった。杜は裏社会の組織と全面戦争に突入する事を宣言し、裏社会の戦争は青幫が担当し、列強への対応は応仁がするように依頼されていた。

王仁は返信をしたため、戦争開始前にできるだけ貧しい人を日本租界へ移す事と、列強の動向を探るために特務機関員を派遣する事を伝えた。同時に、日本政府へ第二段階への移行を連絡、蒋介石にも連絡させた。二日目になると青幫に誘われた多くの人々が日本租界へやって来て、満州行きの船舶に次々と収容されて行く。同時に杜は、それまで付き合いの在った阿片貿易商の黒幕に、阿片から手を引く事を通知した。その通知文がふるっていた。

坊主に諭^{さと}されて、果物売りの杜日笙に戻る事を決心。今までの罪滅^{せつ}ぼしに阿片撲滅のため、阿片を扱う全ての人間に宣戦布告する。今までの付き合いは一切考慮しない。敵か味方か？ 阿片を取り扱うか？ 扱わないか？ 敵に対しては杜の命を掛けて殲滅^{せんめつ}するまで戦うだろう。青幫王、杜日笙

租界に動揺が走り、列強がうるたえた。英・米・仏もこの時すでに、租界から貧乏人やクーリーが姿を消しつつあり、日常の貿易業務に支障を来し始めていた。安い労働力があって初めて成り立つ上海経済なのだ。労働力は日本租界に流れ、そしてその先に満州があることにも気づいた。その上、阿片の元締め、杜日笙が列強阿片商社の中国側配下組織に宣戦布告状を送りつけて来た。暗号電波が上海を飛び交った。南京の蒋介石が動いた。国民党軍は三個師団三万三千を持って上海に向かった。日本側と連動して、租界を大陸か

ら封鎖するためだ。日本の陸軍と海軍も動いた。日本租界への一般人の流入は続けられたが、陸軍と海軍陸戦隊が要所を固め防衛線を引いた。

三日目、杜日笙は先手を打って、自分の意に従わない青幫内部の肅清じゅくせいを始めてあつと言う間に駆逐くちくしてしまった。四日目の朝、杜は一人で日本領事館の王仁を訪ねてきた。日本租界の外側には蒋介石の先発機械化師団三千名が到着、ドイツ式の塹壕陣地ざんこうを要所に作り始め、租界を封鎖し始めた。米・英・仏の戦力は若干の陸戦隊と上海海上に数隻の軍艦が停泊していたが、日本海軍はその列強艦隊を囲むように停泊していた。上海港湾には列強の商船が数多く停泊中だった。クーリーが足りずに荷の積み下ろしが出来ないで往生している。列強の租界地総督は日本租界地に労働力の借用を打診してきた。日本領事館は日本企業と同じ条件なら、協力すると申し出た。列強諸国総督は、コストの増加を嫌って租界地外の労働力を引き込もうとするが、すでに国民党正規軍によって、各道路は封鎖されていた。

「王仁殿、役者は揃そろったようだ。今日の夜からでも戦争開始となる」
「杜よ、この機を狙ねらっている者がもう一人いる」

「共産党の連中だろう？ 判はっている。青幫の組織を甘く見るなよ。連中の規模も所在を全て把握はあくすみだ」

「租界内の共産党は君らに任す。だが、どうも大軍が上海に迫ってくるかも知れぬ。そちらは我らが料理しよう」

「租界内の共産分子退治は、帝政ロシアの移民に自治団を作らせて武装させた。あいつらがうまく料理するだろう。祖国ロシアをソビエト共産党に取られた連中だからな。共産主義者に容赦はしないだろう」

窮した列強諸国は青幫の代わりに紅幫ほんばんの組織に目をつけ、且つ共産党に上海の權益をちらかせながら協力を仰いでいるのだ。王仁は一つだけ危惧していた。共産党の周恩来が指揮する正規軍が南京を襲うかもしれないということだ。周恩来ならやりかねない。三個

師団を上海に送った南京の守りは薄い。南京を攻略されたら、蒋介石の力は弱まる。日本にとっては由々しき大事となる。だが、日本側にも戦力を割く余裕は無かった。できる事は、海軍の駆逐艦隊で揚子江を遡らせ、南京近郊で示威行動を起こし、海軍航空隊の偵察を強化する事だった。王仁はすでに指示を与えていた。

「ところで王仁殿！ あんたが使ったあの豆戦車とロケット砲を俺に貸してくれ。あの幟も一緒に」

王仁が杜の依頼の理由を考えていると、

「いや、あんたがおれにしたあの強烈な目覚ましを紅幫の連中にやりたいだけよ」

杜はそういうとからからと笑った。

王仁は特務機関に指示して、豆戦車と操縦員に悦子をつけた。

「法悦さん、あなたは杜と一緒にいて、連絡係を務めてもらいたい。豆戦車を操縦できるのも、今のところ民間人としては貴方しかいない。私はおそらく外の敵と戦うようになるだろう。内と外の様子を詳しく把握する必要がある」

悦子は静かに頷いた。

「王仁殿、この杜日笠、尼さんと戦車に乗って戦う事になるとは……。あんたに出会えてよかった」

「杜よ、それはこの王仁も同じ事。貴方のお陰で、新しい歴史が始まったようだ。貴方の勇氣に感謝する」

杜は大きく笑って、

「感謝は勝ってからしてもらいたいねえ。だが、久しぶりに血が騒ぎやがる」

杜はそう言って悦子を見つめた。その目は子供のように純な目だった。

「杜よ、日本女性の中で最も優秀な尼僧を貴方に貸すのだ。判ってくれような」

「わかっているよ。傷物にすると言う事だろう！ この生臭坊主！」

杜が答えて、悦子はその意味がやつと判った。悦子を守れと言っているのだ。

王仁は帝政ロシア移民の自治軍の規模を聞いた。人口三万人の移民から軍役経験者を中心に二千名程度が組織されていた。それを聞いた王仁は、紅幫と戦う前に共産分子の一扫を今晚中に行い、それが終わったら、帝政ロシア軍二千名を日本租界に越させるように指示した。周恩行が来襲した時の備えをさせるためだった。

杜は頷いて、豆戦車受領のために悦子連れ立って出て行った。

悦子は寡黙を保ちつつも、すでに杜をその術中にひきづり込む品を後姿に漂わせていた。実際、悦子の仕事は連絡係だが、実は、杜日笠を守るという密命を帯びていた。だが、本人には悦子を守れと言う指示を出す事によって、杜がいつも悦子の側にいなければならぬと言う状況を、王仁は作り出してくれた。その深謀は、彼の靈感から出てくるのだろうか。悦子は陳と言い、杜と言い、王仁の周りに集まりだした人材に、自分もわくわくしているのに気づいた。目の前で見た王仁の人寄せは、前世と言うものがあるなら、まさしくその縁さえ感じさせる既知感を伴った人々が集まってくる。何のため？ 悦子は一度、その質問を王仁にしたことがある。

《日本人の過ちを未然に防ぐために……》

王仁はただそれだけと言った。

その日の深夜、青幫に扇動せんどうされた帝政ロシア自治軍は、租界地の共産党アジトを全て同時に急襲し、四百名に及ぶ党員を逮捕抑留した。翌日の朝、帝政ロシア自治軍の指導者達は日本領事館に集結し、状況の説明を王仁から受けていた。王仁は周恩行が指揮する共産党正規軍が揚子江のどこかで集結を始めているらしい事、その規模はおそらく一師団一万名前後だろう事、それは上海かあるいは南京を狙っていることを予測した。そして、帝政ロシア自治軍に対して、日本政府とアジア民主連合は最大の援助を惜しまない事を通達した。白ロシア人達は勇躍し、引き続き戦闘態勢を継続することを誓った。日本陸軍は七・七ミリ機関銃を装備した豆戦車二十五両、三十七ミ

り機関砲を装備した豆戦車二十五両をそれぞれ操縦士と射手を付け、四式百ミリ噴進砲を百門、五百丁の百式短機関銃を供与した。これにより帝政ロシア自治軍は俄かに機動力と破壊力を兼ね備えた部隊と化したのだ。周恩行の共産党正規軍はソビエトから武器供与を受けているはずで、機械化部隊の存在も予想されたのだ。ゆえに日本陸軍は砲兵隊一大隊を帝政ロシア部隊の後方支援に当たらせる予定でいた。

日本海軍は揚子江の何処でも飛行場として使用できる複葉機、零式観測機（略称零観、複座あるいは三座）を多数河川に沿って配し、空からの索敵（さくてき）を強化していた。この零観はその優れた運動性による積極的空戦もこなすほどの傑作機。海軍はこの零観部隊を駆逐艦とともに南京近辺に先に派遣し、共産党軍の動向を探ると同時に、共産軍を南京ではなく上海に導こうとしていた。この頃の共産党は都市内部での黨員獲得、破壊活動をほぼ国民党に阻害され、政策転換を行い、農村部のアジェーションと農民洗脳を心がけていた。中国の農民は都市の労働者よりもさらに虐げられていたかも知れない。

その日の夜、杜日笙は法悦（悦子）と豆戦車で紅幫との戦闘を開始した。紅幫は青幫と違い、一拠点を持たずに、複数のボスが存在し、青幫と同じように闇の世界の非合法な仕事をしていたが、杜の阿片撲滅宣言を聞き慌て、列強に取り入り、杜日笙の代わりに後釜に入ろうとしていた。そのための集会を開いたところをすかさず杜は狙った。闇がいつそう濃くなるような小雨が降りだし、紅竜飯店（レストラン）に向けて杜と法悦は豆戦車をごろごろと走らせ、後ろに青幫の組員五百名が続いた。雨に濡れた豆戦車は、黒金を夜のネオンに写して鈍く光らせて、王道楽土宗の幟と国民党阿片撲滅運動実行車の幟が雨に濡れてしな垂れていた。

「法悦さん、王仁殿がおれにしたと全く同じに攻撃したい！ おれ

が指示するまで後ろの組員は何もすると指示してある」

「お任せあれ！ 杜日笙様。 ロケット砲の準備はよろしいか？」

「ああ、ぶっ放してやるぜ。 だが、法悦さん、あんたとどこかで会ったことはないかなあ？」

悦子は杜と話した事はないが、実は挨拶程度で数度出会っていた。大世界は上海の列強要人も良く利用した。その頃、悦子は諜報員として大世界を情報徴収の一つの舞台にしていたからだ。

「私の素性をお知りになりたいのですか？」

悦子は飛びつきりの笑顔を杜に向けて、片目をつぶって見せた。美しく可愛いその表情を見た杜は怖気を感じたかもしれない。

目線を外して遠い記憶を探るような目を戦車の覗き窓に向けた。杜が見た悦子の目は、断じて尼僧のものでは無い。王仁とは正反対の無機質な冷たい目の色、美しいが妖しい眼差し、可愛いが危険な色引き込まれそうな魅力の後ろに畏^{わな}が無数に仕掛けられ、華奢な体に隠された無数の匕首（あいくち）を連想させた。

「どうもおれは、最も危険な美貌の尼僧と、一緒に仕事をする羽目になったようだ」

「杜様、私の素性はお忘れ下さい。 私も王仁様と出会い、過去を失いつつある女なのです」

「そ、そうだな。 とすれば、我らは同じ境遇と言っわけだ。 ははは」

「杜様、ロケットの準備を！」

「おう！」

戦車は紅竜飯店の前に付くや、戦車砲頭のハッチを開けた杜は有無も言わず、ロケットを三階の一室に向けて発射した。轟音が石造りの建物に響いた。法悦が七・七ミリ戦車機銃を同じ三階に乱射する。 ばりばりと破片が飛び散った。 杜は戦車の中で、機銃を乱射する尼僧、法悦の後姿に清廉可憐な影を見た。

《俺は本物の仲間を持ったかも知れない》

杜はそう呟いて、二発目のロケット砲を放った。

日本租界は虹口港をほぼ中心に東西に広がるように作られ、租界の北東を守るように租界外へ向いていた。租界外には国民党の先発機械化部隊と工兵がドイツ人軍事顧問と一緒に早くも到着して、塹壕やトーチカを建設中だったが、未明、突然、朝霧に紛れて共産軍の砲撃と歩兵突撃に見舞われた。霧が晴れて、日本の偵察機がもたらした情報は、周恩行率いる中国共産党がほぼ集結しつつある状況だった。どうやって？　どこから湧いて出てきたのか。周の戦術の妙だ。王仁の推察によれば、おそらく揚子江を怪しまれないように小さな小船に分乗し、便衣（一般人の服装）を着て小グループに分かれて集結したのだろう。虚を付かれた国民党軍は守勢となり、かなりな損害を出していた。

日本軍は海軍から地上攻撃機を発信させ、敵陣地を空襲。九七式陸攻と一式陸攻を台湾基地から飛び立たせ、世界で始めての渡洋攻撃を実施した。前線の後ろに控えた敵の軽野砲陣地に大きな被害を与えた。日本軍は帝政ロシア軍二千名とともに海軍陸戦隊三千を援軍に差し向け、防衛を強化。その間、空からの攻撃を強化して、敵の後方兵站路には常に偵察機を飛ばした。

日本軍の爆撃により、敵の軽野砲は沈黙した。偵察によると、敵は重野砲を備えていないようだ。だが、歩兵はソビエト式の軽機関銃と重機関銃、迫撃砲（歩兵携帯式）を備えており、火力は盛んだった。陸軍の空爆は日に二回、午前と午後の一度ずつ。その間は海軍の九六式戦闘機と陸軍九七式戦闘機がカバーした。

日本軍の砲撃部隊は前線後方で満を持していた。日露戦争の戦訓で強化された野砲は百ミリと百五十ミリが主力であり、国民党や共産党のそれは第一次大戦時の標準七十五ミリだった。破壊力（炸薬量）は口径の三乗に比例する。

零観で空から戦場を視察した王仁は幕僚会議で新戦術を提案した。その戦術が始まるうとしていた。敵の野砲が沈黙し、共産軍は塹壕や建物の影に隠れて、時々突撃を仕掛けてくる。制空権を奪われた

共産軍にはそれしか方法がなかったかも知れないが、敵の士気は高かった。それは日本軍が積極攻勢を一度も仕掛けていないからだ。日本機が空襲に来たら蛸壺に隠れ、去ると活動を開始する。敵の戦線は横に長く伸びて、日本租界を囲むように広がっていた。

「この作戦の要点は速度です。そして、一度攻撃して撃退した場所には駐屯しない事。風のように通りすぎて、跡をふり返らない事です。中国軍の思惑は、重火器も制空権も無く、日本軍と戦うなら、中国大陆の奥へ奥へと我々を誘う仕掛けを用意してあると考えられます。その際たるものが『便衣（農民服に着替える）』によるゲリラ戦だと断言できます。突破された前線で生き残った敵共産軍兵士は一般人に化けるでしょう。日本軍が勇気ある猪突猛进型しよとうもっしんの軍人であることを洞察した上での戦術です。勝利して過ぎ去った後方で、狙撃や破壊活動が行われ、それが軍服を着た兵士では無く、一般の中国人が起こしていると錯覚したとき、日本軍はパニクに陥るでしょう。中国の一般人をも虐殺するかもしれません。この戦術に乗ってはなりません」

「王仁殿、貴方のこれまでのご助言と英明な判断に敬意を表します。中国軍に関する専門家としての貴方の力量を信頼し、陸海軍は緻密な作戦を立てるでしょう。これは大本営の意向でもあります」

陸軍少将大西は軍を代表して王仁の策を取り入れることを了承した。

王仁は便衣戦術を回避する方法は一つしかないと説明した。戦線を拡大せずに、現在の共産軍を一箇所まとに纏めさせるように、砲撃を工夫する事。国民党軍の本隊三万がそろそろ戦線に到着するので、これと連絡を密にして、共産軍を囲み込み、兵站輸送路しやだんを遮断して局所的な機動攻撃を行う事だった。

「では、国民党軍本隊が前線到着を持って、この王仁が指揮する帝政ロシア移民軍による攻撃を許可いただきます」

王仁と悦子は豆戦車に再び搭乗、日本租界の東の端に、帝政ロシア移民軍が集結した。豆戦車五十両、携帯式四式噴進砲百門、百式

軽機関銃五百丁を主軸とした選別七百名の機動突撃部隊だ。豆戦車には日本陸軍の兵士が乗り込んだ。その日の未明、国民党軍本隊が前線後方五キロに到着、戦闘準備を開始した時を見計らって、日本の野砲が火を噴いた。敵陣の東最端に集中して砲弾が打ち込まれる。弾着地点は上空の零観から逐次確認され、敵の移動を確実に捉えて誘導する。東の一点に集中された第一砲撃の次は少し東へ着弾を移動、敵を西へ誘う。後方北へも着弾させた。敵が西へ走り始めようとする刹那、豆戦車五十両が突撃を開始する。東へ突き進んで、西へ曲がって敵を追うような形になった。敵が潜む陣地と建物の影には容赦なく噴進弾と三十七ミリ戦車砲が打ち込まれた。そこを帝政ロシアの機銃装備兵が乱射しながら駆け抜けてゆく。誰も後ろをふり返らないスピードだった。約一時間の作戦行動後、部隊は租界へ急速に撤退した。日本の野砲が再び元の東の端から砲撃を開始、ゆつくり西へ着弾点を移動させて行く。これを午後一杯繰返すと、上空の零観から、第一次作戦終了の連絡が入る。共産軍が撤退した場所には国民党軍がすかさず入って来て、防御陣を作った。

翌日の未明は同じ攻撃を前線の反対側、西の端から開始、一時間の作戦行動で同様な効果を上げることに成功したのだ。数両の豆戦車が敵の迫撃砲と手榴弾により破壊され、十数名の帝政ロシア兵が戦死。だが、百門の噴進砲はその威力を遺憾なく発揮した。また、百式軽機関銃五百丁の弾雨は、共産兵の側面を付く各個撃破の火力を見せ付けた。ロシア兵の突進力は時折、敵の手榴弾に手をこまねた豆戦車隊を助け、幾度と無く危機を救った。

前後左右を囲む事に成功した日本軍は、もっぱら砲撃と空襲による攻撃に切り替えて、共産軍が消耗する戦術に切り替えた。一万の共産軍は、おそらく半数以下になっていると予想された。三日目の午後、便衣に着替えた敵兵がぼつりぼつりと前線から脱出を図り、すべて捕らえられて行く。女子供以外は容赦するなど全軍に通達гされていた効果だ。囲んだ地域の住民はとくに避難している。

四日目になると、破れかぶれの共産軍による突撃が一度づつ、租

界の内側と外側に向かって行われたが、重機関銃の餌食になるだけだった。零観よりピラを撒き、降服の勧告が為された。軍服を着て降服する者は丁重に扱うが、便衣に着替えた者はスパイとしてその場で処刑するだろうと但し書きが書かれていた。

五日目、周恩行自ら白旗を掲げ、共産兵四千名が捕虜となる。武装解除された捕虜は、士官は拘留^{こじう}され、農民出身の一般兵士は満州へ旅立つか、上海で再教育を受け、自由人になる事のどちらかの選択が許された。殆どの兵士が満州行きを望んだ。故郷に帰っても、虐^{しいた}げられる過酷な環境が待っているだけだと考えたのだ。周恩行は日本へ捕虜として護送された。

輸送船が虹口港を出港してゆく。様々な人生をたつぷり船内に溜め込んだ船は喫水線が低くなっている。共産党を影で支えた周も、軍の解^{はしけ}で連れ去られて行つた。王仁と悦子は埠頭^{ふとう}に立ち、川風に吹かれて去り行く船の先を見つめる。百五十万人もの生活水がこの川に流れ込み、水は淀み、かすかな異臭も時折漂うが、それも川風が強く吹いて消し去って行く。黒い流れをじっと見つめていると、黒色がいつの間にか銀を帯びた輝きにも見えてくる。流れる事、それが穢れを浄化するのもかも知れない。王仁は一つの大事な仕事を成し遂げた。しかし、その横顔は晴れやかではない。哀しみも漂う表情は、また遠くを幻視しているのだろうか。

「王仁様、ご苦労様でした。これで貴方の見た、日本軍による南京大虐殺は防がれたのですね」

悦子は出来るだけ優しく労りを込めて言つた。年は明けて一九三六年にいつの間になつていた。

「悦子さん、貴方こそ、ご苦労様。貴方がいたからこそ、出来たことだね。心から感謝するよ。貴方の言う通り、日本の過失を未然に防ぐ事ができたようだ。それと周恩行を捕虜に出来たからね。中国の共産化を挫^くいたかも知れない。あるいはもつと大きな変化となつて違ふ形で出てくるかもしれないが……」

「中国は共産化されるはずだったのですか？」

「私の幻視には赤い中国として現れていたからね。たぶんそうだろう」

悦子は不意に、王仁は自分の幻もかつて見たのだろうかと思いつた。口に出そうか迷ったが、王仁が先手を制するように言った。

「悦子さん！ 仏教の縁という言葉の本当の意味はね。『共に相抛りて』という意味なんだよ。君が居なければ今の私も無いし、私が居なければ今の君も無いと言う意味だ。それは君と杜、君と陳、私と杜、私と陳も同じだ」

「では、あの周恩行はいかがでしょう？」

「もちろん、彼が居なければ、我も無し。それが縁だよ。そして、大事な事は、それは死んで逝った人々にも縁が当てはまるんだ。戦友や敵兵の死も、それが無ければ我も無し……」

悦子の心に王仁の気持ちの流れがきて、泣きそうになってしまった。氷の心を持つ高階悦子はいつの間にか、氷を融とかされている自分に気づいた。

《そうか！ そうだったのか！》

悦子は心のなかで繰返した。それが無ければ我も無し。我が無ければ彼も無し。

第二話 了

第二話 解放への道（後書き）

第二話はちよつと小難しい話でしたね。第三話以降、徐々に本格的な仮想戦記的になって行きます。

第三話 人間宣言（前書き）

捕虜となった周恩行が見た変わり行く日本。蒋介石やドイツ首相ラインハルトとの出会い。ノモンハンでの戦闘とソ連イルクーツク上空での空戦を描く第三話です。

第三話 人間宣言

第三話 人間宣言

《日本は変わった！》

捕虜として日本に到着した周恩行は、刑務所の塀の向こうに霞む雨空を見つめ、若き頃の留学時代を回想していた。当時帰国直前、訪れた京都嵐山で雨中に詠んだ己の詩を思い出したのだ。濛々（もうも）と降る雨の中、青々とした松に挟まれた桜が雨に打たれて、根元の苔むした石にうす桃色の桜の花びらが、流れいでる水に浮かんで石を巡る。その先を見ると水が落ちて消える先は、雨に霞む黒々とした山が鮮やかに見えた。やがて、雨足が弱まると、一縷（いちろう）の光りが雲を穿（うが）つて地に降り注いだ。まるで濛濃（もうのう）と立ち込める霧を打ち払うように、あでやかに地を照らした。人の世は殊更（ことさらに）模倣（もほう）として無明（むみょう）に感じていた周は、天地の間を繋ぐ光の柱にも感じて、森羅万象の真理のあでやかさを覚えたのだ。

十八で日本に留学、東京神田区高等予備校（法政大学付属学校）に通いつつ、孫文、辛亥革命の息吹を胸に抱き、さらに、京都大学経済学部にも聴講生として通った。河上肇教授からマルクス共産主義を学んだ。中国を救うのはこれしかないと思った。それからフランスにも留学した。理論を必死に学び、共産国家樹立のために武装闘争の道をまっしぐらに走り続けてきた。

だが今、己は捕虜となり、再び縁深い日本にいる。挫折！ 敗北！ 今、心に吹きすさぶ嵐は、若き頃の未知への苛立ち（いらだ）と余り変わらないと周は感じている。しかし、あの当時と比較して、この日本の変わりようは一体？ 人々の表情が明るく、町も通りもかつての暗さが払拭（はつしよく）されている。貧しい身なりの人さえ、なにか支えがあるように、元気に道を歩いている。あの、暗い閉塞感に満ちた日本は何処に行つたのだ？ 我が敗北の惨めさがそう感じさせるのか……

？

巢鴨刑務所に設けられた特設外国人用捕虜抑留施設で、周は日本国によって丁重に扱われた。抑留と言っても、質素なホテル並みの設備を持つ二部屋が周に与えられ、専属の保護官が二名随行するが、外出も基本的に自由だった。午前中の取調べが終わると、周は良く巢鴨周辺を歩き、時に懐かしい神田辺りまで足を伸ばし、日本の変わりように目を見張ったのだ。新聞を読み、ラジオに耳を傾け、本を読んだ。そして、周を驚愕させる事件に巡り合った。

一九三六年二月二五日、厳しい寒さの中、皇居周辺に近衛部隊が完全武装で集結する。戦車と装甲車が深夜の闇に紛れて蠢き、キヤタピラの道路を転がる音が住民を驚かした。皇居内謁見大広間では、皇道派の青年将校が数十人、中央上座に向かって緊張した面持ちで整然と腰掛ける。近衛兵士が両壁に立ち並び、押し黙っている。皇道派に賛同する将軍達は右側に、政治家達は左に腰掛け、皆張り詰めた気持ちを隠せぬ表情で中央の御簾みすの向こうを見つめていた。

侍従長が御簾を厳かに上げると、陛下が一段高い御台の上に腰掛けていた。御簾が上がり、天皇の尊顔を拝す事態が晴天の霹靂へきれき。静まり返る場に、天皇の声が響いた。

「帝国の若き軍人達よ！」

そう天皇は語りかけた。

「君達の国を思う気持ちは聞き届けた。この国は力をつけ、世界に羽ばたいている。だが、このままで道を誤らないと誰が言えよう。否！ このままでは、日本は大きな過失を必ず犯す」

天皇は言葉を切って、静かに皆を見回した。大広間は誰も居ないかのような静寂に包まれる。

「君達が憂慮する奸は、今夜の内に近衛師団によって縛くはされるであらう」

広間にざわめきが走る。

「軍人だけで無い！ 政治家も活動家も財界人も然しかり！ 奸妖かんようは全

て捕縛され、日本は世界の範となつて今夜、生まれ変わるのだ」

天皇の重大な決意が徐々に伝わったのか、どよめきが広がった。

「だが、皆の者、忘れてはならないことが一つある。明日、私は人間宣言を行い、軍の統帥権を放棄する」

政治家と将軍が大きくさらにどよめいた。

「自由と民主の国を作るためだ。皇室と貴族制度を廃止して、国民が国民の意志を持つて国を司るのだ。不平等と搾取を無くし、貧困を撲滅し、他国の搾取に完全と立ち向かう自立の国を作るのだ。人を神と崇めてはいけない。人は過ちを犯すように作られている。その過ちを小さくするためにこそ、民主の道があるのだ」

身じろぎ一つ無い静寂が訪れ、やがて青年将校達から嗚咽おえつが漏れ始めた。

「何故泣くのか？ 若き軍人達よ！ 私もまた君達と同じ人。私の人生も君達兵士の人生も、人生には変わりが無いのだ」

嗚咽が激しい感涙に変わり、政治家も将軍達も涙ぐんだ。

「泣いてはいけない。皆が泣けば、我が心も切なくなる。今は喜こばう！ 新しい日本の誕生なのだ。今日から大日本帝国は日本自由民主国となるのだ。民のために我らが命を布施しよう。アジアのために、アジアの五族共栄のために、万難を排して戦つてほしい」

青年将校の一人が立ち上がり、天皇陛下万歳を叫んだ。皆が泣きながらそれに従った。

二月二十八日に天皇陛下自らのラジオ録音放送があつた。人間宣言である。二月二十六日、天皇陛下勅命により近衛兵团と皇軍派青年将校が指揮する全国の陸海軍の師団は、軍閥と財閥の解体を目的として、双方に癒着した将軍や将校、および財界人を悉く逮捕抑留した。

同時に陸海二軍加えて空軍を創設し、三軍を統括する総司令部が設置された。また、貴族院は廃止され、代わりに智慧院が創設され、各界の知識人が民主主義および自由主義への貢献度から選ばれる事

になっている。衆院はそのまま誰でもが投票できる国民院として機能するが、もう一つ新しい院が創設された。礎院いしづえんと呼称し、十八歳以上のある一定額以下の所得者が参選件を持ち、貧困層の代議士を選出できることになる。陳のような乞食でも人々の支持を得て代議士になりえるのだ。

誰の顔にも爽やかな笑顔が映った。上に立つ者の英断と勇氣に感動して、さらに、国民の皆が自由市民という言葉の意味を、嬉しさと開放感を持って、受け入れたのだ。政治の知識の無い者さえ、なにかとんでもなく良き事が訪れたと感じて、うきうきした。それが日本の力になる。底力になるのだ。

世界の人口の八割は貧困所得層だろう。五パーセントの富裕層が世界を牛耳っている時代だ。日本も改革が進行したとはいえ、七割の人口が今だ貧困に喘あえいでいた。そこから選出された代議士がどう政治に参加してゆくか？ 世界が注目した。この三つの院がお互いを牽制、切磋琢磨せつさたくまして、民が国を司つかさどることが始めて許されたのだ。一番驚いたのは日本の共産党員だったかもしれない。貧困層の代表と自負してきたからだ。そしてそこに扇動の余地・要があり、武力革命の下地があつたのだが、今や貧困層が政治に参加するとなると、それは期待できない事になる。

その危険な匂いをソビエトも嗅ぎ付けた。ソビエトは周りの国々を共産化して、ソビエトの衛星国としつつ、列強に対する砦とする世界戦略。ソビエトは危機意識を確実に持ったのだ。さらに彼らを慌てさせたのは、翌日、台湾も韓国も満州も同じ政治組織を採用し、アジア民主同盟として共栄圏を高々に宣言した事だった。ドイツと中国国民党蒋介石も歓迎賛同の意を表し、列強、米・英・仏は驚愕し、世界戦略の建て直しを迫られていた。

特に米国は、日本が選択した道が米国の国是と根本のところまで一致しているにも関わらず、ルーズベル大統領は苛立ちを募らせていた。このままでは中国とアジアが日本の属国になってしまうと疑心して、帝国主義の後発国米国の、アジア戦略が瓦解し始めたことを

嗅ぎ取ったからだ。列強とソビエトが急速に手を握る環境が整ったのだ。この歴史の転換点で、もし列強の選択肢に共存共栄と言う思想があつたならば、全体主義と共産主義、そして帝国主義あるいは資本主義は力を得ずに歴史から消え去ったかも知れない。アジア民主連合とドイツ民主連合が見抜いた列強の真実とは、資本主義の影に隠れた帝国主義の匂いであり、アジア、特に中国で現実に発生していた貧民の増大と利益の搾取だった。

日本から見れば、この時日本も列強と互角に対決するためには、全体主義へ傾いて全体主義の影に帝国主義を模倣する道もあつたに違いない。だが、日本は違う道を選んだ。時を同じくしてドイツ民主連合も同時性が生じ、天佑に恵まれ、強力な友を西側に日本は持つことになった。

簾すだれの君から王仁が天皇の人間宣言決意を伝えられてから三年が経過していた。皇室はこの三年間、人材を育成し、国の礎となるべき人々を育ててきた。それはアジア民主連合に所属する各国で同時に進行させてきたことだった。

周恩来は巢鴨刑務所の高い塀の内側に、雨に洗われた紫陽花の花を見ていた。花の輝きも瑞々しさも中国にあるものと変わらない。人の営みも変わらないが、政治は異なる。そう言う事か？ 周は自分の知る日本人を幾人か思い浮かべてみる。

《日本人も中国人も、知る人は皆、神ではない。過ちを繰返しながら時に押されて、無明の中を手探りで進む。信じてきた事が、人生をかけて行ってきた事が空しいと感じるのは神で無い証拠。それこそが人である証明……、日本の天皇の人間宣言か！》

中国の皇帝でそんなことをした人物はいない。皇帝も貴族も神に近いと思わせて、人々の間に権力を築き上げて来た。あるいは富みを力と思わせて、権力を積み上げる。だが、日本の天皇は……！ 周は日本の変わりやうの理由がすこし判ったような気がしたのだ。

日本軍部は上海での共産党との戦いから幾つかの戦訓を導き出していた。爆撃機による渡洋攻撃の効果、敵の砲兵を壊滅させ補給路を断ち切る事ができ、地上攻撃用戦闘機により常に敵を劣勢心理に追い込むことが可能と知った。周恩行の取調べが進むにつれ、周は元々電撃的に上海租界に侵入し、都市内の同志と共同で日本租界地の中に陣を敷き、日本人の居留民を人質として都市戦を行いながら、日本軍と国民党軍が市民保護のために砲撃出来ないようにする作戦だったことが判明した。だが、租界地入り口にはドイツ軍人指導による強固な建物陣地・塹壕が築かれ、それに難渋していると何処から飛んできたのか、空からの爆撃機の攻撃を受け、虎の子の軽野砲を失ったばかりか、日本軍の砲撃でその場所に釘付けになってしまった。さらに、戦車と噴進砲の大きな火力と、軽機関銃を備えたロシア突撃歩兵が伸びた前線に沿って急速に移動しながらの攻撃に、大きな損害を出してしまった。

共産軍の敗因は機械化部隊、戦車や重野砲が無く、単純に租界地に対して薄い包囲前線を作った事による。周はこの日本軍の作戦を見事であると供実し、作戦の士気を取った人物が誰であるか知りたがったが……。

日本軍は今後、ソビエトの機械化部隊と対決するために、豆戦車では無く、重戦車が多量に必要なことを想定するが、日本にはまだ重戦車が存在しなかった。満州での開発製造計画があったただけだ。ドイツへ軍事技術将校を引き連れた使節団が飛び立ったのはこの頃だ。噴進砲隊と軽機関銃歩兵隊を強化し、重戦車隊と組みで将来戦わせる戦略が不可欠で在り、陸軍大国ドイツの重戦車研究と軍事協力を加速させるためだった。

陸軍と海軍は協力して、台湾、韓国及び満州に戦略爆撃機隊を配備し始めたのだ。航続距離の長い一式陸攻爆撃機とそれを護衛する初期型海軍零戦改戦闘機、陸軍隼改戦闘機などが着々と整備されていた。

時間の余裕の出来た周恩行は、ゆつくり巢鴨刑務所で思う。戦いに敗れて自分の人生が変わった。脇目も振らずに突っ走ってきた間に、周の知らない世界が生まれて来ていたのだ。そんな微妙な流れを感じとる余裕と受容性が周に生まれつつあった。己の運命を変えたあの上海の戦い。日本軍の戦いは賢者の戦いだと感じた。あれは一体誰が指揮していたのだろうか？ 周は雨中、あでやかなうす紫の花に語りかけた。

「悦子さんは、機械なら何でも操縦できるんだね！」

伝声管から王仁の声が響いた。高度二千メートル、上海の虹口港を飛び立った水上偵察機零観は南京に向けて右手に揚子江が緩く蛇行する中国大陆を見下ろしていた。前方の輝く千切れ雲が近づいてきて、いつの間にか白い塊がぼやけてうすい霧になる。通り抜ける」と青い空と悠久な中国の大地が果てしなく続いている。

「戦車や飛行機の操縦は、特務機関員の必須習得項目ですわ。特に水上小型機は諜報作戦上、重要な道具ですもの。湖・河川があれば離着陸できますし。でも私、飛行機は大好き！ 王仁様はいかがですか？」

悦子はそう言うと、機種を下げて急降下する。機速を充分得ると、機種を急激に上げて宙返りを打つ。地球が縦に回転したかのように風景が流れて、悦子は笑みが零れる自分を感じた。

「ち、地球は我々で動かす事が出来たんだね！ 悦子さん」

伝声管から伝わる王仁の声は、悦子が好む素の王仁の声だった。

《王仁様、貴方の言うとおり、地球も歴史も我々で動かす事が出来るのです》

悦子はそう言うと、背面飛行に入れて、逆宙返りを素早く打った。水平に戻ると即座に背面飛行から右へ九十度傾けた小さな左水平旋回を描く。Gがずっと係り、体が遠心力で座席に吸い付く。大地が飛ぶように流れた。唸りを上げたエンジンが絞られて、機種が目指す草原の彼方に南京が見えてきた。

目の前に、中華民国主席、蒋介石がいる。この男、王仁の幻視によると反共の闘士であり、今は日本と協力していて国作りを行っているが、一つ間違うと親米派に寝返り、日本の敵となる可能性も高いと言う。そしてこのままでは毛沢西共産党に勝てないとも言った。細長い顔にバランスの取れた鼻と細い目が愛嬌のある笑顔を作っている。角ばった顎先が頼もしくも見え、如何にも指導者の風格を漂わせている。杜日笙に言わせると、嘗ては青幫かっの構成員ちんぱんだったそうだ。つまりやくざ上がりと言う事か？ 蒋介石を王仁はその大きな目でしっかりと見つめ、既知の友にあつたかのような微笑を送っていた。

「我が義弟、杜日笙と親しい王仁殿は我が友！ 良くぞおこし下された。そしてまずはお礼を申し上げたい。あなた方日本が周恩来を捕虜にしてくれたお陰で、中華民国は反共の第一段階を達成する事ができたようだ」

「いいえ！ 蒋介石主席、このままでは……、貴方は毛沢西の共産党に決して勝つ事はできません」

蔣の笑顔が曇る。王仁の槍のような真つ直ぐな言葉に、思い当たる事があるという表情をした。

「王仁殿、貴方がそう断定する根拠は何かね？」

強い断定に根拠が無ければ、それを言い放った王仁とは、生涯付き合わないという強い意志が込められた声だ。蒋介石の細い目が強く暗くなつた。

「根拠を論あげう前に、どうすれば勝てるかを考えましょうか」

王仁の応答は、相手の気を受け流す。負ける原因を分析するよりも、勝つ方法が判れば負けはない。道理だ。蒋介石は虚を付かれていた。虚を付かれると人の頭脳は一瞬、空白になる。そこに王仁の巧みさがある。それこそ、禅の真髄かも知れない。

「日本は今、飴玉二つのお金で買える鉱石ラジオを、上海と満州で無数に作らせています」

王仁はそう言うと、イヤホンコードがまきつけてられた小さな手のひらに乗る木箱を懐ふところから取り出し、蒋介石に手渡す。

「貴方に進呈するためです。貴方のお国の農民の殆どに無料で持たせたいと思います。このラジオは、ご存知のように無電源で動きません。飛び交う放送電波に同調して、その電波そのものを貰って音を鳴らします。電波の届くところなら何処でも放送を聞けるのです」

一九二五年に日本はラジオ放送を開始していた。真空管式ラジオは相当数普及していたが、何分消費電力が大きく、大型になりコストも張る。貧乏人には手の届かない物だった。しかし、基本的に四つの部品よりなる鉱石ラジオは、部品さえあれば子供でも組み立てられる。結晶板に電圧を掛けて振動させて音を出すクリスタルイヤホンとセレン検波器、バリコンとアンテナになるコイルを回路図に沿って繋ぐだけの非常に簡単なラジオだった。日本は電子技術に最大限の力を入れ始め、ドイツとの技術交流を強化して行く過程で、半導体の魁さきがけとしてゲルマニウムダイオードをセレン検波器の変わりに作り出し、真空管に変わるトランジスタを開発していた。昨年には製造工場を、埼玉県川口市内に建設して、極秘工場として稼働中だった。部品は満州と上海に送られていた。

怪訝そうな蒋介石は小箱からイヤホンコードをほどいて、自分の耳につける。小箱の横に小さなダイヤルがあり、中のバリコンに直結している。それを少しずつ回転させて同期を図る。蒋介石は目を細め言った。

「南京放送の音楽が聞こえる」

「貴方のお国の農民が、貴方が何を考え、何をしようとしているのか、これで知る事ができます。アジア民主同盟は中華民国に必要な放送設備もどんどん提供致しましょう。未開地へ運搬可能なように、トラックに放送設備を積んだ放送車も準備しました。貴方の声を録音するレコード録音設備も整っています」

王仁の言葉を吟味して聞いていた蒋介石の目が徐々に見開かれ、

王仁の意図が明白に伝わった。

「これで、共産党の農民洗脳に対抗せよということか！」

「そればかりではありません。先手を打ち、共産党の頼みとする基盤を打ち壊すのです」

「どんな先手だね？」

「小作人開放です！」

王仁は真剣勝負に出ていた。その目は爛々とし、蒋介石を気迫で包む。地主と小作農の関係こそ、因果応報、列強帝国主義と中国の關係の雛形ひながたとなつていいるのだ。少数の地主が富み、小作農は生きるだけで精一杯。それが民衆の不満となつていいる。清朝の時代から数百年も続いてきた因習だ。毛沢西の路線は農民革命を目指し、地主から土地を奪い、農民に分配する。そこに目標があつた。土地が持てるならと希望を吹き込まれた農民は必ず共産化されてしまうだろう。王仁の危惧はそこにあつた。王仁が続けて言う。

「貴方が先にやるか？ 毛沢西が先にやるか？ それで中国は決まつてしまいます！」

南京城の蒋介石私室は北と東の角にあり、城壁の向こうに揚子江の流れがみえる。果てしなく広がる大地に、鋤すきを引く牛と農民の働く姿も見えた。日長一日、外で働き、疲れ切つた体を休める小屋に帰る。粗末な食事、娯楽も無く、夢や希望は眠つていいる間にも現れない。病めば捨てられる事さえある。生活の苦しさは、家族の団欒さえ蝕むしむ。絶望のちよつと手前まで追い込まれた人々が、自分の土地を持てると煽あおられたら、その力を止めることが出来るものは誰も居ない。

蒋介石はこれまで、力で都市部の共産勢力と戦つてきた。そして列強や日本の手を借りて、勝ち続けて来た。だが、共産勢力は農村部でますます、勢力を増やしていたのだ。毛沢西は、地主や企業家、政治家に対して憎しみを募るだけで、小作人開放をまだ宣言はして居なかつた。だから、チャンスは一度だけかも知れない。そして一度に中国全土に知らせる必要もあつた。鉱石ラジオはそれを実現さ

せ、その後の教育にも継続的に一役買うだろう。国の主席が何を思い、何をしているか民衆が知る手段ができるのだ。

「孫文先生が時期早々と仰ったことを今、私にやれというのだね」

「日本に五年も留学された貴方なら、かつて、日本の小作人が同じ状況で在った事はお分かりのはず。小作人が解放されて土地を持ち、天皇陛下が人間宣言をされて、自ら財閥と軍閥を解体されたのです。貴族制度もその貴族の長たる皇室が率先して、壊された。今、清朝が滅んで満州人が満州へ帰った後、孫文先生の大アジア主義を実現できるのは貴方しかおりません」

「王仁殿、時が満ちていると言うのか？」

「貴方の心が、民衆の心を理解できた時、時が満ちると呼ぶのです」
王仁は蒋介石を躊躇^{ちゅうちゆ}させているものまで、見抜いていた。それは上海南部農村地帯の塩商人の息子として生まれた蒋介石をここまで引っ張って来た原動力、財閥の力だ。

蒋介石は十五歳の時、四つ年上の村の娘、桜福梅と結婚していた。二十九歳の時、子蒋経涯^{けいぎ}を設けたが、その後、桜福梅は離婚して出家してしまう。四十の時に今の妻、宋美麗と結婚する。この宋は上海を中心として活動する浙江財閥の娘、姉は孫文の妻だった。

「貴方を影で支えてきたものを壊すことが、貴方にできましようか？」

王仁の瞳は冴えて澄みきっている。蒋介石はたじろいだ。王仁が何を暗示したか感じ取ったからだ。力をつけるために選んできた道をふり返ると、子供の頃の貧しさを同時に思い出させた。父が早世した家族は母の頑張りで何とか食いつないだ。そして十五の時、姉さん女房、桜福梅を母が選んだ。若い蒋介石は、家の事を顧みずに孫文の後を追った。その間、家を支えていたのは、あの出家してしまった桜福梅なのだ。

今の妻、宋美麗は米国育ちも同然。米国との太いパイプと上海の財閥とのつながりを持つ。贅沢で可愛げの無い女だが、その力は利用できる。宋も同じ。主席となった蒋介石とつながりを持つことこ

そ、浙江財閥の安泰を確かなものにしていたのだ。

《この日本の僧王仁は、私が財閥と縁を切り、且つ列強との縁を完全に切ることを望んでいる。そして、共産党に打ち勝ち、中国を日本と同じように民主の道を歩めと言っている。アジア民主連合に参加させたいのだ》

蒋介石は一つの自分の道を見出しつつあった。そろそろ五十に手が届く年齢で、世界の虚飾が良く見える蔣は、己の我がままと癩癩かんしゃくの癖を見抜く眼力も育てた。それは後悔にはつながらず、子供の頃への懐かしさに化けていたかも知れない。蒋介石はあの優しい微笑みを浮べて王仁をまじまじと見つめて言った。

「王仁殿、貴方の気持ちは良くわかった。まずは鉱石ラジオを下され！　だが、小作人開放、財閥解体については即答を避けたい。

古く腐った木は切らねばならない。が、いつどのように切るか？

それは我ら中華民国にとって、一大事！　日本の本当の実力を見ねば、そして、アジア民主連合の動向と成長を見させてもらいたい。しかし、これだけは約束しよう。今まで通り、中華民国は日本の友であること」

王仁は蒋介石の言葉よりも、その目つき、肩の上がり下がり、息継ぎの深さ、そして手の動きを深く観察していた。王仁は一人納得して、肉体の微細な反応を見届けた上で、蒋介石が嘘や謀略無しに本音を語った事を知り、笑顔を返す。

「蒋介石主席！　貴方の本音が聞けて、我らも嬉しいです。貴方には我らを利用して、中華民国の力を蓄える道もあった。しかし、貴方は率直に思いを語ってくれました。我々は貴方の心の時が満ちることを待ちましょう」

「うむ、王仁殿、久しぶりに、まるで孫文先生とお話しているようで、この蒋介石も楽しかった」

比較的近代化が遅れがちだった東邦ヨーロッパ諸国は、ソビエトの南下政策と衛星国（植民地）への誘いに辟易しながらも、民衆

は確実に共産化されて、ドイツは危惧意識を高めていた。王仁と悦子は来るべき次の大きな戦いのために、特務機関専用二式大艇改（晴空）に乗って、対流圏の頂点、ソビエト上空一万メートルを飛行していた。目指すはドイツ、約九千二百キロ彼方、約二十時間に及ぶ飛行だ。

二式大艇晴空は、飛行艇でありながら当時の列強大型爆撃機（B2 5, B17）を大きく凌駕^{りょうが}した性能を誇り、四発千八百五十馬力の火星エンジンと縦横比九の細長い翼が長大な航続距離と爆弾搭載量二トンを誇った。且つ二十ミリ旋回機銃五門および七・七ミリ機銃四門を備えていた。完全武装で六千四百キロ、偵察目的では七千四百キロにも及ぶ。特務機関専用機は開発されたばかりの過給機を搭載した新火星エンジンで、上昇限度を八千八百メートルから一万二千メートルまで改善していた。また、また全ての武装が取り外されており、航続距離は九千五百キロにも及んだ。ドイツ 東京間は九千二百キロ。給油無しの二十時間の旅だ。日本空軍はこの過給機付きタイプで世界初の水上機戦略爆撃隊を創設しようとしていた。これも上海渡洋爆撃の戦訓が活かされたと言える。

高度一万メートルは別世界だ。大気の対流圏上限、その上は空気の対流が無い成層圏。氷点下数十度の極寒で、空気密度は地表の三分の一に薄くなり、気圧は四分の一だ。仮にソビエトの戦闘機に発見されて、彼らがここ一万メートルにやってきたとしても、彼らのエンジン出力は三分の一以下になり、浮いているのがやつとで攻撃は出来ないだろう。それに、我らが空飛ぶ船は、時速五百キロ以上で飛行している。過給機^{ターボ}のお陰なのだ。空気が薄い高空では、エンジンに強制的に空気を濃くする必要があった。それには空気を圧縮するファンがどうしても必要だ。高速で回転させるファンの仕組みは、考えると単純だが、工作に非常な精密さを要求される部分だ。この技術はジェットエンジンの空気圧縮部分とほぼ同等の技術を要するからだ。ファンに使う材料にも工夫が必要で、日本は新たな合

金を過給機用とジェットの圧縮ファン用を開発、実用化をほぼ達成していた。

高高度を飛ぶ飛行機のためのエンジン開発、これも王仁のかつての示唆にあった項目、それが今、発案者を乗せて敵国ソビエトの上空を悠々と飛行していた。

「王仁様、いかがですか？ 空飛ぶ船の乗り心地？」

「いやあ、寒さとこの邪魔な酸素マスクを除けば、とても快適だね。ここまで高いと地球はほんとに丸くみえるね」

出来たばかりの二式大艇晴空にはまだ、与圧室が無く、二人はまるでエスキモーのように着膨れし、ホースにつながった酸素マスクを顔に掛けていた。二人の正面には同じように寒さにちじこまった二人の技術将校が各々黒いカバンを大事そうに抱えて座っている。

ドイツで開かれる日独定期軍事技術交流会議に出席する黒田大尉と佐々木大尉の二人は、王仁と悦子が何者かは知らない。だが、この特別な空飛ぶ船に乗っていると言う事は、要人か特務機関の人間かどうかと目星をつけているのだろう。口数少なく書類に目を通したり、酸素マスクのわきから二人で囁くように話合っていた。

悦子はこの二人の技術将校の仕事内容も全て把握していて、王仁にもその内容を概略報告していた。あの黒いカバンの中には、日本が開発した電子部品、ゲルマニウムダイオードやトランジスタの見本と、それを利用した誘導弾、レーダー、無線機と電子計算機の原因解説書や回路図が入っているのだ。この情報はドイツの現状の軍事開発技術と交換される。ドイツは工作機械分野では非常に優れていて、日独は今、全力で工作機械の自動化を推進していた。誘導弾、レーダー、無線機を初めとして、列強を凌駕する最新の兵器の開発が成功しても、それを量産する技術と生産設備こそ、死活問題なのだ。豊かな物量を活かした大量生産は、今でも米国の独壇場。これに対抗するためには、高度技術兵器の生産を労働者の熟練に頼る方法では太刀打ちできない。両国とも電算機の導入と自動化がどうしても必要だった。

また、仮想敵国ソ連も米国に次ぐ高い兵器生産能力を保つ。ソ連陸軍戦車隊との戦いを想定した重戦車に付いても技術交換が為されるだろう。ドイツは重戦車においても日本より先行していた。だが、あの帝政ロシア軍が上海で使用した四式百ミリ噴進砲の見本も機内のどこかに詰まれて入る筈。この携帯兵器にドイツ戦車は耐えられるのだろうか？ 今日日本で開発している新型高速戦車には射程距離を伸ばした五式百ミリ噴進砲が主砲として組み込まれている。そしてその砲弾には、やがて誘導装置が付けられるのだ。山や建物の影に隠れた敵をレーダーで捕捉、放たれる噴進弾は九十五パーセントの命中率で目標を破壊する。この新型五式中戦車は今年の年末までに満州前線に配置される予定なのだ。それだけでは無い。海軍の軍艦もこの噴進弾を放つ砲頭に順次改装している。海軍には五十ミリが対空用に、百ミリが対地用、三百ミリと四百ミリが対艦用、四種の噴進弾が配備される予定なのだ。

操縦室の副航法士がコーヒーを四つ、盆に載せて運んできた。悦子は素早く立ち上がると、礼を言つて盆を受け取る。

「一万メートルの高空での、コーヒーの味は格別です。どうぞ召し上げ」

そう言つて、技術将校二人に進める。酸素マスクを外し羽毛のフードを被つた悦子の可愛い顔が微笑むと、緊張がほぐれたのか黒田も佐々木も人懐っこい笑顔を向けた。佐々木大尉がおずおずと口を開いた。

「あの、多分聞いても答えてもらえないと思いますが、あなた方は一体どなたなのでしょう？」

隣の黒田が肘で突いた。悦子は答えなかった。だが、王仁が口を開いた。

「あなた方の任務を全て知っている者と答えておきましょう。お二人がドイツにもたらす技術は、今後の欧州の戦を全面的に変えてしまふほど、重要な技術の根幹です。おそらく数年内に起こる大戦の帰趨^{きすう}を制する技術となるのです。そしてドイツから得る工作技術お

よび冶金技術はアジア民主連合の土台となる製造技術になるでしょう」

二人の目が大きく見開かれ、返す言葉を失った。黒田大尉が答えた。

「お名前はお尋ねいたしません。ですが、ここでお二人に出会えた事を光栄に思います」

黒田大尉は自分達の任務をそこまで把握している人物は、政府部内の極少数しか居ないことに気づいたのだ。

「さあ、コーヒーが冷めてしまいますよ。それでも低い沸点で沸いたのですから」

高高度では、水の沸点は百度以下だ。それが丁度飲み頃の温度になって、体に沁みるような旨さだった。悦子が無気なく聞く。

「ロケット実験機、『秋水』の開発状況はご存知かしら？」

「秋水もご存知とは！ はあ、伝聞ですが、補助ロケットを装着しですでに滞空時間二十分にまで伸ばす事に成功し、問題のソリ部は小さな車輪、車輪というよりベアリングボールですな。それを縦にやはりソリ状に並べて離着陸もほぼ安全に出来るようになったらしいです」

「そうですか。二十分なら実用的な空戦にも耐えられますね。大塚大尉もがんばったんですね」

「お、大塚をご存知なので？」

「ええ、一度お目にかかりました」

「あいつの働きで、今年中に秋水は迎撃ロケット戦隊として実戦配備されるようです。大塚は特進して、中佐となりまして、ロケット戦隊長に任命されました」

悦子と王仁は丸顔の大塚を懐かしく思い出した。

「大塚さんも苦勞されたんですね。ところで、一式人型工作機、『力動』はどんな具合でしょうか？」

二人の顔色が変わった。それこそ、極秘中の極秘、彼らの所属する部署がもたらす新技術は殆どすべて『力動』の開発から派生して

来ていた。二人共少し後悔するような微妙な表情になり、

「す、すいません。少し喋りすぎました。ただ、『力道』は赤ちゃん歩きから子供歩きになりましたとだけ、申し上げましょう」

「王仁様、貴方のお子様は成長されているようですね！」

悦子は晴れやかな笑顔を王仁に向けた。

「うむ、悦子さん、いつかきつと『力道』に出会えるだろう。それまでは二人の胸の内であってもらう」

ベルリンの北東約七十キロにパルステイネル湖がある。縮尺の大きな地図には載らない田舎の湖。その東の端の湖畔に、二式大艇は着水した。ドイツの美しい田園に囲まれ鏡のように静かな湖面に、細長い胴体をもった四発の飛行艇晴空が大きく綺麗な波しぶきを立てた。九千二百キロ彼方の日本から無着陸で飛んできたとは、だれも想像しなかったろう。ドイツ陸軍三小隊が、湖畔を警備し、着岸地には首相ラインハルトが政府要人と共に直々に出迎えていた。黒田と佐々木とは湖畔で別れ、王仁と悦子はラインハルトと共に、近くの湖畔の別荘に案内された。小さな森が湖の岸边にこんもりと茂り、街道から脇道が別れて続く。小さな古城を改造した別荘で、こざっぱりとして日本にある洋館のような感じがした。

ラインハルト首相は、政権を争ったナチス党のアドルフ・ヒットラーと、偶然にも双子のように良く似ていた。本人もそれを気にして、ヒゲを綺麗に剃ってウェーブの掛かった髪を出来るだけ長めにカットしていた。ヒットラーと違うところはゆったりとした雰囲気と微笑を湛えた眼差し、目の色は濃い青だが、その深さはなんとなく王仁に似ていなくも無い。

ラインハルト、王仁と悦子、三人だけのディナーテーブル、蓄音機からクラシックの音楽が静かに柔らかく聞こえた。これから話される内容は三人だけが望ましい。悦子はブライトブルーの清楚なイブニングドレスに着替えて、通訳をこなす。四十そこそこのラインハルトは東洋の美女に目線が釘付けになりそうなのを、その聡明さ

で自然な眼差しを保ち、悦子と王仁に注いでいた。

「王仁殿は日本の特務機関の所属とお聞きしているが、同時に宗教家でもあり、霊能者でもあると伺った。あなたのこと少し知りたいのだが」

「我が宗派は元々、皇室の中だけに存在し、本来は隠された宗派です。皇室が道を誤らぬように時に応じて助言するために、霊性を磨く修行を子供の頃から致します」

「どんな修行ですか？」

「気づきの修行を主体とした普通の日常生活です。気づきとは肉体への気づきから始まり、感情、気分と進んで行き、人の思いに至り、時には日本人の総体想念や世界想念への気づきまでを含みます」

ラインハルトは王仁が『気づき』と言う単語を使ったときに、表情を変えた。何か既知の事柄がその言葉でより明瞭に映像化できたというような、はつとした表情を一瞬みせたのだ。王仁はその機微を見逃さずに言う。

「そうです。あなたもそれをお分かりのはず。出なければ、列強英・米・仏の次の手はなかなか読めないですからね！そして、日本とドイツの連合の深い意味が生きてくるというものです」

「なるほど、東ではあなたがその役をこなされている。それが判っただけでも、私は心から嬉しい」

「私もです。ラインハルト首相！」

悦子は通訳をしながら、言葉の意味を超えて、二人が共振しているような感じを持った。通訳が逐語訳した言葉を解釈できていないのに、当の二人はお互い快い微笑みを浮べているではないか。だが、役柄、妙な質問は挟めないのにちよつと苛立ったが、後で王仁に聞こうと気を取り直して仕事に集中した。

「王仁殿、中国の民主化が今後アジアでは鍵となると思うのだが、蒋介石は本気で小作人解放をやるだろうか？」

「ドイツと日本の実力を眺めて決めると言っていますが、すでに準備を始めたようです。そんなに先のことではないと感じます。蒋介石

岩が列強側に協力しなければ、上海は中国の経済的要となり、列強は上海からの撤退を模索するでしょう」

日本租界地の開明的な市政とそれに追随する蒋介石中華民国の圧力により、上海での列強の利権は急速に失われつつあり、すでに阿片がらみの商社は拠点を香港に移していた。この動きはどんどん加速して行くだろう。列強は艦隊を編成し、香港とフィリピンを拠点に活発に動き始めていたのだ。

「ソ連も軍団を満州国境に集結させつつあるね」

「それです！ ラインハルト首相。ドイツと日本は独日防共協定を結んで、ソ連の南下を防ぎ、植民地と成り下がるかも知れないソ連衛星国を民主化して守らなければなりません」

ラインハルトも膝を打った。ドイツは来年早々、オーストリーと連合国家を創設する下準備をしていた。そしてその次はポーランド、デンマーク、ベルギー、オランダ、ノルウェイ、イタリアと計画されていた。日本が台湾、韓国、満州の独立を後押しして連合を組み、もっぱら民主的な通商によって、各国とも活気にみちた経済活動に裏打ちされて国力を蓄えている事例が、強い刺激になっていた。

「アジア民主連合の発展は、我々欧州民主連合創設への重要な指針となっている。おそらくソ連は満州をまず攻撃してくるだろうね。列強諸国にそそのかされて」

「そこです！ ラインハルト首相。ソ連が満州に攻め込んできたときが、ポーランドや近隣諸国を民主化させる千載一遇のチャンスだと申し上げたい」

「満州でソ連軍を膠着へまびくさせてくれるというのかね？」

「いいえ、もつとです。日本はおそらく、ある程度までソ連に侵入して行くでしょう。モンゴルのウランバートルとソ連のイルクーツク辺りからです。そしてその地域をソ連邦から外して、民主化してロシア民主共和国を建国し、ウラジオストクを行政・軍事拠点とし、ソ連から東の海への出口を奪うでしょう。さらにその時、日本はソ連の機械化師団を完全に撃破して、日本の陸軍と空軍の力を見せな

ければなりません。イルクーツクは弱体化したソ連への睨み^{にら}とします」

列強とソ連は共同して、地勢的に北からソ連がドイツを睨み、南は英・仏が押さえて挟撃されかねない場所にある。ソ連が南下しないようにするためには東のイルクーツクからいつでも進撃できる態勢を作るだけでよかった。モンゴルとイルクーツクが民主化されれば、中国の毛沢西共産党も孤立化を深めるだろう。イルクーツクへ進撃する兵は基本的に満州国の分担だ。それに帝政ロシア時代の移民軍が加わる。満州にはすでに数万の白ロシア移民が流れ込んでいた。満州国の民主化と発展を見た白ロシア人はソ連を追い出し、民主国ロシアの建設に燃えていたのだ。そしてそれが満州国の独立を確保し、生き延びる道でもあった。そうしておいて、日本はフィリピン・香港を拠点とする列強と、海空軍力で対峙できるのだ。ドイツは日本がソ連をけん制している間、英・仏に集中できる。

「日本国、いや王仁殿の聡明な予測に敬意を表し、且つソ連に対する牽制のお申し出に対して、心から感謝したい……。もし、アドルフ（ヒトラー）が政権を担っていたら、ドイツは大きな惨禍を世界にもたらしただろう。それが判る以上、私の責任は重く辛く孤独だった。だが、王仁殿にめぐり合う事が出来て……。そしてアジア民主連合が道を示唆してくれて……」

ラインハルトは僅かに頭を下げた。二人の間に透明な震えがゆっくり刻まれているような気がして、悦子の通訳の声が僅かに揺らいだ。

「それは私も同じです。我ら二人の魂は元々一つが分かれ、西と東に生まれた。そうも感じます」

「うむ。我らは我らの祖国が犯すかもしれない過失を未然に防ぐ。民主主義という仮面を被った帝国主義を駆逐し、さらに！ 人民のためと偽り、独裁政治を作り上げている共産主義を倒すことにある」

二・二六事件で、天皇は人間宣言を行い、財閥を解体して傘下の子会社を全て別会社とした。人事はもちろん実力主義。陸海軍の軍

閣も大将、中将、少将級の將軍と呼ばれている殆どを退役させ、若手の実力者を登用、かつ軍の中の学閥さえも解体させる民主的で実力本意の昇進制度を敷いた。最も重要な点は、作戦指導部たる大本営が実戦経験者と現地代表者によって、机上の空論の戦術戦略が執行されることを防ぐように構成されたことだ。現地代表とは戦地の実践に参加する参謀が交代で務め、常に現地の最新の状況と情報が作戦に生かされることになった。その中で、急速に頭角を現してきたのが、日本では、海軍航空隊副司令から異例の抜擢を受けて、日本空軍の初代司令となった大園安名大佐、その男が今ドイツに來ていると言う。もともと五・一五事件を起こした海軍皇道派青年将校とも繋がりがあり、国体論に心酔していた人物だが、天皇の人間宣言に最も胸を打たれ、愛国心と人道主義に溢れた人物だった。

「いや、あなたのお国の空軍司令、あのミスター大園という人物は誠に面白い人だね」

ラインハルトが微笑みを浮べて言った。大園は日独で定期的に開かれる空戦技術研究会に参加するために、王仁達より少し早くやって來ていた。各々の国で実戦配備された最新鋭の戦闘機、爆撃機を日独双方で実際に模擬空中戦を行い、それをお互い分析研究するのだ。大園は自分で考案した斜銃を装着した単座戦闘機、零戦改（発動機を千八百馬力の誉に改装し、防御武装を改装した新型）を空軍指令である小園自らが操縦して、ドイツの最新Fw190（フォッケウルフ社）もBf109（メッサーシュミット社）も写真銃判定ではたばたとなぎ倒したというのだ。さらに、大園の愛弟子の遠藤大尉は、双発複座全天候迎撃機、月光改に乗り、ドイツの爆撃機をあっという間に平らげてしまい、ドイツ空軍幹部は顔面蒼白になったと言う。

その勝因がすべて、大園が考案した斜銃だった。斜銃は前方斜め上方に三十度の角度で固定された機銃で、零戦改には二十ミリ二門が操縦者の後ろに装着されていた。旋回性能の優れた零戦で、相手

の後方につくと、機体をダイブさせてさらに機体速度を得て相手の下に潜り込み、相手機の少し手前で発砲を開始して機銃の曳航射線を見ながら速度を増加させる。当然、その射線上にある敵機は被弾してしまうのだ。さらに格闘戦に入り、ぎりぎりの旋回中でも機銃がさらに三十度に向いているので、相手の真後ろに付く必要は無く、旋回中、敵機が風貌の前上方に見えたら見越し射撃できるのだ。正面对峙ですれ違う場合でも、相手の下を潜る刹那に発砲できるのだ。ドイツ空軍のパイロットは何処から打たれたのかが全くわからなかったらしい。この方法は、相手の真後ろについて接近してから狙いを定めて打つという高度な空戦技術が必要としない。軸線さえしっかり捉えれば、急降下して相手を追い越し離脱する一撃離脱戦法にも非常に有効であると実証された。高度の優位を持つて、敵機を捕らえる。そこに狙いを定めて急降下し、相手の進行方向の見越し射点に通常の前方固定銃を発射、すれ違う時には相手の下を潜るので、その時に斜銃を発射しながら通りすぎるのだ。つまり、二度射点が生まれ、撃墜率は大きく向上し、経験の少ないパイロットでも出来る技量の範囲なのだ。

実は、日本国内では、斜銃という発想が余りに突飛だったので、実際の戦闘ではどうだろうという疑念が寄せられていた。大園はそれならばと、ドイツと日本の模擬戦に全てを掛けて、自ら出てきたという話らしい。ドイツ空軍は翌日から技術将校を呼び集め、斜銃の研究に入った。これが後日、ドイツを救う事になる。

「大園指令の活躍で、ドイツ空軍指令部の頭の固い上層部は全て退役することになったのだよ。最もガンであったゲーリングを筆頭にね。今のドイツ空軍は日本機研究で大騒ぎさ」

ラインハルトは楽しくて仕方が無いと言った表情だった。日本の軍部上層部が二・二六事件後、大挙して退役させられた事件と呼応して、ドイツでも同時性が発生していた。王仁もまた、事件の意味する事を歓迎するように、笑顔だった。ラインハルトは少し興奮気味に続けた。

「そうそう、君達が乗ってきたあの大型飛行艇も凄いね。九千二百キロを無着陸で飛んできた！」

「ええ、あの機体もすでに別途お国に運ばれる途上にあると思います。欧州大陸には無数の湖がありますからね。あれを利用すると、簡単に重爆飛行場が出来てしまふ。冬期はフロートを通り化して使用も可能ですから。それ以外にもあなたを驚かす新軍需技術が二人の技術将校のカバンに詰まっていますよ」

「うむ。楽しみだね。お返しにいつてはなんだが、ドイツの最新鋭戦車をお送りしたいと思うが……」

「ええ、我々の目的はそれです。来るべき対ソ戦に備えて、ドイツ陸軍の最新鋭重戦車を二百両ほど満州へ供与していただきたいのです。それと満州での同型の製造技術と製造ライセンスも含めて」

「タイガー戦車の事だろう？ 喜んで供与させていただきますよ。ソ連を牽制してドイツを守るためだからね」

ラインハルトは手を差し伸べ、王仁と堅く握手した。

「ところで、大園指令から一つ頼まれていてね。君達が帰国する時に一緒にあの空飛ぶ船で帰りたいそうだ」

帰りの機内は楽しかった。大園指令は周恩行が上海に攻め寄せた時、日本海軍の航空部隊を率いて始めて渡洋攻撃を成功させた時の、当の飛行隊長だった事がわかったからだ。話がそこから花を咲かせた。

「いやあ、あの日の初出撃の日は、実話、麗しき悦子嬢の前で恐縮ですが、前の晩、どんちゃん騒ぎをやってまして、うとうとしていたら緊急出撃のサイレンがなりましてね。慌てて飛び出したら、右足は軍靴、左足には芸子の下駄をつっかけて、そのまま渡洋攻撃に出陣でした。ははは。敵も味方も飛行隊長がそんな格好で戦ってるとは、ははは、思わんばい」

王仁と悦子が杜日笙の根城、大世界攻撃の話や豆戦車とロシア兵団による共産軍前線横断突撃の話をする、大園は目を輝かせて聞

き入った。話が一段落すると、大園は機内をあちらこちら歩き回り、操縦室に入り込んでパイロットに根掘り葉掘り飛行艇晴空の性能や操縦の癖を聞き出しているのだ。王仁も興味があるのか小園の後をくっついて歩いた。

悦子はラインハルトとの通訳で少し疲れを感じたので、硬い椅子に寄りかかりながら気の合う二人の話を小耳に挟んでいた。

「大園司令、あなたの勝負運は強い。並み居るドイツのパイロットを模擬空戦で打ち負かせたとか!」

「王仁殿、すべて零戦改と斜銃の組み合わせの妙が為せる技です。操縦しやすく速度と防御を向上させた零戦改に、格闘戦で相手の意表と付く事ができる斜銃があつたから勝てたのです」

大園は細長い顔にどかっと乗った大きな型のよい鼻を擦りながら、斜銃の話に熱を入れた。

「言つて見れば、宮本武蔵の二刀流ですな。前方固定銃に角度を変えた斜銃の二刀流。敵は想像もしないところから狙われ、太刀筋を読めないのです。ドイツのエースパイロットは皆今頃、残してきた零戦改と月光改を使って、戦術研究をしていますからねえ、次回は苦戦しますよ」

「いや、列強諸国とソ連戦に有効であれば良いのです」

「米国のF4F、P-38あるいは最新のF6Fやコルセア、英軍のスピットファイアーには現状の零戦改と古参パイロットの技量を持つてすれば、劣勢に回る事は無いでしょう。しかし、戦力と言うものは少しずつでも消耗して行きます。補充された経験の少ない新米パイロットが充分に戦える戦術をもたらすのが斜銃なのです」

「米国の人口は日本の十倍、工業力も底知れないし、物資も十倍はあると考えたほうが良いですね」

「そうなのです。日本が一人前のパイロットを育て上げると、米国は十人育て上げることができる。戦闘機も十倍、日本より早く出来上がってくる。いくら古参のエースでも、十対一の戦いを常に課せられたら、やがて負けてしまう道理です」

大園はさらに目を見開いて続けた。

「さらに、米国一国では無い。仏領インドシナは大した抵抗にはありませんが、南方資源の向こう側にはオーストラリア軍があり、英国もインドに鎮座しています。それに北にはソ連ですからね。圧倒的な兵器の優勢が無い限り、戦争ははいけません」

「斜銃の運用をあなたにお任せしたら、どのくらいの期間、優勢で入られるでしょうか？」

「そうですね。緒戦の半年くらいは絶対的有利を保てるでしょう。あと後半は十五パーセントの損失率、二年目は三十パーセント、三年目は互角になると考えなければなりません。ですから緒戦の半年で、圧倒的な戦果を上げて有利な講和に持つてゆくべきでしょう。出なければ、さらに有利な兵器の優勢を作り続けなければなりません」

「半年に一度、画期的な軍需技術の革新をもたらさなければなら無いのですね」

「ええ、もともと、国力から言うと、図式で例えると、小さな島国の台湾が日本と戦うようなものです。無謀な事を仕出かすには、絶対の必勝をささえる根拠が必要です」

王仁は、書類カバンから今年から来年に配備されるであろう新兵器のリストを取り出して、大園に見せた。大園は見る見る内に顔色を変え、目を見開いてリストを見る。数ある分類中、航空兵器リストには第一段階として、斜銃の有効性が大と明記されている。一万メートル上空での航空戦を予測し、過給機にも赤丸が記されていた。第二段回にはジェットエンジンとロケットエンジンが主流の優勢を保ち、第三段階は誘導ロケットによる優位性を確保するとある。

歩兵分野では、携帯式の軽機関銃と噴進砲の発展過程がやはり三段階に別れ、誘導弾とレーダーによる第一撃による敵の戦力の無力化を目指していた。戦車・重火器も同じ過程だ。海軍艦艇も戦艦は建造中の巨大戦艦大和も武蔵も信濃もキャンセルされ、レーダーと誘導弾装備の大型高速空母と同じく駆逐艦に建造に変更されていた

のだ。言葉を失った大園に、王仁は言った。

「帰国後の司令のお仕事は、対満州国におけるソ連戦と、台湾以南の列強基地、フィリピンと香港の攻略を前提とした戦略です。この飛行艇晴空を爆撃機に改造した天空がそろそろ出来上がる頃です。湖を利用した晴空戦略爆撃隊と台湾・上海を基地とする天空の戦略爆撃隊、満州のソ連国境からソ連内イククツクまでを想定した満州戦略爆撃隊とそれを護衛する高高度戦闘機隊の創設をお願いしたいのです」

「王仁殿、あなたはなんと戦略眼をお持ちなのだろう。それこそ我が意を得たり！　一つだけお願いがあります。この晴空を改造した爆撃機天空を地上攻撃機に仕立てたい。斜銃を下向きに付けまして、満州の蛸壺に隠れ潜む敵を誘きだす役をやらせましょう」

大園のアイデアでは、建物に隠れた敵には有効ではないが、蛸壺を陣地とせざるおえない満州の草原では、上向きの防御は無いに齊しく、そこへ十三ミリ機関銃百門を爆弾槽に下向き三十度から六十度に調整可能なように設置した天空が編隊を組み、敵の陣地を横断掃射してゆくのだ。これでは、蛸壺陣地の意味が無くなってしまふほどの弾雨が空から降ってくる事になる。味方の護衛戦闘機が制空権を確保できれば、壊滅的なダメージを敵に与えられるというのだ。王仁は深く頷いてリストに記入した。

「日露戦争の時、日本軍の歩兵はロシアの機関銃に苦戦しましたからね。お返しは百倍返しと言うわけですよ。それも空から」

この下向き斜銃百門の天空は後日、爆撃機同士の空中戦でも大きな効果を上げる事になる。

王仁は大園の実践的な智慧に舌を巻いた。高度な技術を要する兵器を苦勞して作るよりも総意と工夫で有利な態勢を作ろうという勝負に生きる武人を見た気がした。こう言う人に軍を指揮させないといけないと痛切に思った。軍閥解体後も山本五十七長官と大西大將は残っていたが、二人の大園に対する信頼も厚い。空母を母艦とす

る海上攻撃隊は玄田大佐が隊長を勤めていたが、大園は陸上を基地とする陸軍と海軍の航空隊を総括する司令だった。二人はライバル同士だが、新軍令部は大園を高く評価した。これで歴史が変わると王仁は思った。

一九三八年早々、日本は満州国と合同で、満州ソ連国境に兵を集めた。合同演習と称して、韓国及び台湾からもアジア民主連合の各国軍隊が集結し、五十万人による共同軍事訓練を開始、約一ヶ月に渡って、有事の際の役割分担、連絡網、補給体制が陸海空三軍それぞれによって確認された。

ソ連は合同演習が終わると、即座に大軍を国境に移動させて来た。日本、台湾、韓国、満州と続々と極東連盟が構成され、民主制度が確立され、それぞれの国威が増すにつれ、ソ連はモンゴルを属国化して対抗、満州の都市、ノモンハンの近くのハイバル川周辺国境線を巡って、威嚇衝突、小競り合いが続いていた。このハイバル川が満州とモンゴルの国境線として定められていたが、この川は毎年流れを変え、国境線が移動してしまうのだ。

日本はモンゴルに使節団を送り、共に相拠りて立つ、連邦制への参加を呼びかけたが、当時の大統領はロシアの傀儡で拒絶された。ソ連は国境紛争という名目と、折角ソ連の衛星国になったモンゴルを守るために、大軍を極東に移動させ始めた。日本軍は晴空特別高高度偵察機により、ソ連BT戦車千両を中心とする十万人の兵力がハイバル川西岸後方に集結したことを確認、また、後方のイルクーツクソ連空軍基地には千機近い戦闘爆撃隊の集結を確認したのだ。

日本は天空重爆撃機百機と一式陸攻二百機を中心とした戦略爆撃隊を満州へ集結させ、護衛戦闘機隊として零戦改百機と武装を強化した隼改百機を配備した。さらに陸軍はドイツから供与された二百両のタイガー重戦車を中心として、九七式中戦車の砲塔を噴進弾発射用に改造してエンジンと装甲を強化した一式中戦車二百両、補給線保持用あるいは貨物牽引用として対空装備の九七式中戦車三百両

を前線に投入。四式百ミリ噴進砲千門を保有する噴進部隊と、百式軽機関銃一万丁を配した歩兵二万名を配置。後方に砲撃部隊四個師団を配した。

三月、ドイツがオーストリーと欧州民主連合創設を発表し、ソ連の南下政策に大きな楔を打った。

五月十一日、満州国ハイバルでソ連の本格的砲撃が突然開始された。ソ連の戦爆編隊がハイバル川東岸の日本軍陣地を空爆した。日本軍はその攻撃に反撃せず、写真と映画が記録され、二日後には世界にニュースとして発信された。

『赤軍、満州を襲う！』

同時に、特別偵察機晴空から取られたソ連陣地の兵力集結写真も公開された。世界の目が満州ハイバル川に注がれた。日本軍はハイバル川東岸から夜間、あるいは砲撃の間隙をぬって、三キロ後方の自軍戦車陣地まで後退し、体制を整えた。ハイバル川西岸のソ連陣地は東の日本軍陣地より、三十メートルほど高地になり、敵軍を平地へおびき寄せる作戦が取られたのだ。ソ連軍は思惑に乗り、ハイバル川を渡河し、日本軍が使用していた蛸壺陣地に入り、前面にBT戦車五百両を配した。越境侵略の証拠写真が取られた。三日後、日本とアジア民主連合はこぞってソ連に対して宣戦布告を行った。

同日の午後遅く、大園高名司令率いる満州戦略爆撃隊が制空権を奪うためにハルビン基地を出撃、モンゴル領内のチョイバルサン近郊基地を空爆を開始、且つソ連領イルクーツク周辺およびモンゴル・ウランバートル周辺へも空爆を開始した。同時にハイバル川では日本軍の砲撃が開始された。

王仁と大園は再び晴空特別偵察機で高度一万メートル、重爆天空百機の戦略爆撃隊の指揮を取り、ソ連領イルクーツクに向けて飛行していた。護衛には零戦改百機が高度八千を飛び、その下高度四千には一式軽戦闘機（隼改）百機が飛んでいた。

晴空に搭載された新型レーダーにソ連機の機影が雲霞のごとく映

り始めた。大園が三式航空無線機で各部隊に方向と機数を指示する。「南東方面に向かっているのは敵の爆撃隊だ。おそらくS B（ソ連双発爆撃機）だ。そいつらは坂井の鵲鴿隊せきりいたいに任せろ。爆撃隊に向かってくるのは単葉戦闘機I-16だろう。これは菅野の示現隊しげんたいがかかれ。南下しようとするのは敵の複葉戦闘機I-153だろう。それは加藤の隼隊の受け持ちとする。かかれ！」

大園はリーダーに写った影の塊から、即座に実践的勘を屈指して指示を与える。王仁は頼もしく思った。爆撃隊の下を飛んでいた坂井四郎少尉の指揮する鵲鴿隊五十機が敵の双発爆撃機の機影を見つけ、緩く左旋回して行く。敵は高度七千メートル。千メートルの高度優位がある。

坂井はS B双発爆撃機約二百機が左下方を日本機の進行方向から逃れるかのように緩く右に旋回しているところを捉えた。高度差を保ちながら、敵編隊を銀翼左に捉える。

「こちら坂井隊長機！ 敵エスベー（S B 2）約二百機発見。左下方八時、訓練通り、二機一組で一機に当たれ！ 二刀流だ！ 忘れるな！」

坂井は左にバンクを掛け、敵編隊の後方に狙いをつけ、降下してゆく。王仁の示唆した製造技術改善の指針は、精密加工技術と素材改良や工作精度向上に発展して、プロペラ加工精度、エンジン出力、航空機関砲強化に大きな貢献をもたらしていた。結果、エンジンの出力は二五パーセント向上し、その分を6・3ミリの防御板採用や武装強化と二十ミリ機関砲携帯弾数の増加を実現した。零戦改は初期型の零戦十二型と違い、十五パーセントの上昇率および速度増加と急降下による速度超過が招く翼のたわみが発生せず、急降下特性も改良されていた。

敵の最後尾のエスベーが視界にしっかりと納まる。敵も後部銃座から七・七ミリ機銃をばら撒いてきた。しかし、急降下で六百キロを超える速度を得た零戦に当たるはずも無い。照準機にエスベーが

浮かぶ。操縦棒の引き金を引く。前方固定銃の二十ミリ二門の曳航弾がエスベーに吸い込まれ、胴体の破片が飛び散る。そのまま敵の真下を潜る軌道を保持し、通り過ぎる刹那、操縦席上後方の二十ミリ斜銃二門の引き金を引く。敵機との間隔が余りにも少く、高速であるために、斜銃の曳航弾は見えない。が、敵機を潜りぬけるとすぐさま機種を挙げる。急降下で速度を得た零戦は前方の編隊の下方後ろに突然沸きあがったように現れたに違いない。敵機編隊は驚いたように機銃を打ち始めるが、坂井の機はまだなお、急降下で得た勢いを保ち、斜銃を放ちながら敵機を二機ほど追い越し、そこで再度急降下に入れて離脱する。下を通られたエスベー二機の内、一機は翼の付け根を折られて失速墜落、もう一機は最初の一機と同様に炎に包まれて落ちて行く。敵機銃の射程から離れた坂井は、緩い上昇旋回に入れながら、続く部下の攻撃を見守った。まさに、二刀流、圧倒的な破壊力、無敵の戦術だと思った。

錬度の高い猛者は、前方固定銃で必ず倒し、その勢いで下に潜り込んで二機三機と屠^{ほぶ}っているのだ。速度が遅くなると、急降下で逃れた。錬度の低いものは、固定銃で倒せなくても、下にもぐった時に確実に撃墜していた。エスベー（SB）は最高速度四百五十キロ。零戦改は六百五十キロだ。二百キロの速度差があれば、燃料の続く限り、何度でも反復攻撃が可能だ。坂井は徐々に高度を上げ、今度は高度差五百から機速をつけて攻撃する。すでに半数に減った編隊はばらばらになり、それを二刀流で確固撃破する。十数分の空戦で、敵は壊滅した。味方の損傷は無い。

「こちら鵜鴒隊、敵エスベー約二百機を全機撃墜せり！ 我が方の損害、無し！」

三式航空無線から坂井の声が流れ、大園は笑みを溢した。だが、大園の声は厳しい。

「鵜鴒隊へ、後続の編隊約二百機が北にあり。高度を八千まで上げ、イルクーツクへ向かえ」

「了解」

「こちら菅野示現隊、敵戦闘機I-16、百機と交戦。全機撃墜、我が方に損害無し」

「こちら加藤隼隊、敵複葉戦闘機I-153、百機と交戦、全機撃墜、我が方に損害無し」

この日の空戦で、イルクーツク周辺に集結していたソ連空軍の戦力の八割が殲滅した。また、別働でモンゴル・ウランバートル周辺飛行場を爆撃した一式陸攻と九七式戦闘機の戦爆編隊も、敵の複葉戦闘機I-153を主とする空軍勢力をほぼ駆逐してしまった。日本軍はたった一日で極東の制空権を確保したのだ。王仁はまだなおレーダーをじっと見入る大園の後ろ姿に、大きな勝利への第一歩を実感した。

第三話 了

第四話 対ソ戦（前書き）

南方進出の不利を王仁に指摘されたアジア民主同盟は、スターリンによる粛清渦巻く、極東シベリアに無限の資源を見出し、シベリヤ送りになった一千万のロシア人救出を視野に入れ、イルクーツク攻略を含む極露作戦を発動。
ノモンハンでの戦車戦が勃発。

第四話 対ソ戦

第四話 対ソ戦

満州の大地に遅い春が訪れ、草原をゆったり流れる川も、川面に遊ぶ水鳥もいつそう白く輝いて見える。彼方の霞む山々は青々と若葉で飾られ、小さな花々が刹那を競うように鮮やかに燃えている。やがてやって来る短い夏に備えて、生き物達が命の上昇気流に乗ろうと躍動しているのだ。

悦子の立つ丘に風が吹き上がってきた。渡ってきた風は、密やかな甘い匂いを含み、目を快い冷たさで撫でて行く。風の中に一人いると、いつも思い出すのは悦子の原風景、浮浪児だった頃の事だ。今の己の成長した肉体に、目を閉じて意識を向けてみる。さらに浮浪児だったころのやせ細り、腹をいつも空かしていたころの自分の肉体を思い起こす。刹那、あのころと今の間の時間が消えた。浮浪者のころのすえた匂いと今の自分を取り囲む甘い草原の匂いの差が、くつきりと感じられた。両方の違いを感じ取っているのは、時間の無い何時も今に居た自分だった。

風が下る丘の下には、日本軍を中心としたアジア民主連合の機甲師団が集結し、兵士達が高い士気を表してきびきびと動いている。兵士達に不安があるとするならば、故国を偲ぶ望郷と新しい国づくりへの希望の狭間に揺れることだろうか。悦子に帰るべき故郷と呼べる場所はあるのだろうか。浮浪児の記憶と特務機関での熾烈な訓練の記憶は、境目がばやけて、心の中の切なさが連続していた。決して幸せな記憶では無い。しかし、それでも、祖国を思う気持ちがあった。浮浪児のころが懐かしく思えるなら、きっとそれさえも祖国が悦子という人間に与えた、決して自ら望みはしなかったけれど……、かけがえのない贈り物だとしたら……、だからこそ、この丘に両の足で立ち、風に吹かれる自分がいるのだと思った。

ドイツから寄与された二百両のタイガー重戦車を先頭に配置し、エンジン出力を高め、装甲を強化した噴進砲搭載の一式中戦車二百両、陣形を取り囲むように、同じく馬力と装甲を強化して対空対地兼用二連装二十ミリ装備の九七式中戦車三百両が補給線保持と貨物牽引用として陣形を組んでいる。狭間には千台以上にも及ぶ輸送トラックが陣を出入りし、噴進砲千門と軽機関銃一万丁装備の歩兵二万名が陣の外側で進撃準備を整えていた。日露戦争と上海での経験が、陸軍に機工化を即した結果だ。

大園司令の満州爆撃隊がモンゴルとイルクーツク周辺のソ連航空隊を壊滅させて制空権を奪うとすぐに、アジア民主連合軍は最新鋭の機械化部隊を送り込み、ここ満州とモンゴルの国境ノモンハンに集結したのだ。

「悦子さん」

振り向くと現地総司令官の大西大将が立っていた。悦子が踵を正し敬礼を返すと、特務機関専用の濃紺の制服が良く似合う悦子を、大西は我が娘を見るように目を細めた。

「楽にしてください。悦子さん」

「大西閣下、こんなところを一人で歩いていたら、危険です」

「それは、あなたも同じでしょう。しかし、この場所が軍全体を見渡すには一番良い……」

大西とは上海での周恩行との戦い以来だ。王仁によれば、天皇陛下の人間宣言を補佐した皇道派の指導的立場にある人物、王仁と悦子の独自活動を全面的に後押ししてくれている。そして、常に前線にあつて、現場の状況を基に作戦指揮を行う実戦型の司令官だ。大西はほぼ集結を終わった陣容に目を移し、これからの作戦に思いを巡らしている。

作戦とは……、極東ロシア民主共和国建設のための魁さきがけとなるイルクーツク進行作戦だ。これはドイツのために行われる作戦ではない。もちろん欧州民主化のために西のソ連の動きを封じ牽制することになるのは間違いない。しかしそれ以上に、この作戦はアジア民主同

盟の生き残りの戦いなのだ。天皇陛下の人間宣言以前、日本軍部の間では、資源小国日本の行く末は南方への進出しかないと考えられていた。石油、ボーキサイト、鉄鉱石、天然ゴムと、豊かな資源に恵まれた南方進出は海軍力の増強とともに規定の計画であったのだが、それは列強諸国と世界を正面きつて敵に回し、戦線を限りなく拡大することを意味した。すでに南方は列強諸国の植民地になっていたからだ。

皇道派は南方進出に反対しつつ、しかし、安定した資源供給を確保する別の方策を模索した。王仁が示唆したことは、驚く事に、足元の極東に必要な資源があるということだった。それを受けて、特務機関と各分野の研究者が連携し、極東の資源の洗い直しと調査が数年に渡り行われた。結果、石油は北樺太のオハ油田がすでに存在し、且つ、満州の直ぐ隣のハバロフスクには非常に有望な石油鉱床や錫、錫、タンゲステン、銅、鉛、亜鉛、銀なども豊富に産出される事が判明した。希少金属、インジウム、ビスマス、バナジウム、スカンジウム、カドミウム等もあわせて錫から抽出できるのだ。ヤクーツクには優良な天然ガスと鉄鉱石鉱床があった。マガダン州ではボーキサイトやタンゲステンが産出される。極東シベリア全体が金やダイヤまでを含む鉱石資源の宝庫だったのだ。

すでに友好国となった蒋介石の中国、貴州はボーキサイト、石炭、リン、水銀、マンガン、アンチモン、金、重晶石、硫化鉄、セメント原料、レンガ原材料およびさまざまな用途のある白雲岩、砂岩、石灰岩などが豊富に取れることがわかり、すでに両国による共同開発計画が始まっていた。

列強諸国に南方資源を独占されている限り、アジア諸国の行く末に希望は無いと判断した日本政府は、ソ連との合従も検討したが、当時ロシアでは大変な事が内部で起こっていた。スターリンの大粛清と呼ばれ、権力を手に入れたスターリンは共産主義の理想はおろか、権力を守るために疑心暗鬼の独裁の鬼と化していた。一九三六年から一九三八年までに、反革命分子として処刑された人は七十二

万人を数え、反抗的分子として処罰された人はシベリアでの重労働に送られた。述べ一千二百万人以上が粛清されたのだ。

特務機関からその事実を聞いた王仁は、極東へ送られた政治犯を何とか救出する方法までを示唆していた。放って置けば、間違いなく一千万人以上の人々が重労働の末に死ぬことになると言うのだ。そこで生まれてきたのが、イルクーツクから東を民主国家として独立させる極東ロシア民主化、極露作戦だった。このために、東の彼方にはアジア民主連合五十万の兵士がすでに集結していた。大西の彼方を見つめる目の理由がそこにあった。

海軍は空母四隻を主力とする連合艦隊が流水去ったオホーツク海に集結し、ソ連の潜水艦を掃討しながら、同時に艦載機によるウラジオストツク攻撃と上陸を準備していた。

「そろそろ王仁君が空からやって来る頃合だね」

「はい、閣下。満州の約三分の一の戦略爆撃機がこの先十五キロのソ連陣地を空爆、地上攻撃をかける予定です。大園司令と王仁様が晴空で陣頭指揮に当たっています」

悦子と大西が東の草原の彼方を見つめる。そこには天空重爆が二百機、一式陸攻が二百機、九九艦上爆撃機二百機、護衛戦闘機二百機の戦爆連合の大編隊が小さな黒い点として見え始めていた。

大園は戦爆連合を五陣に別けていた。第一陣は九九艦上爆撃機を陸上使用にした急降下爆撃隊による敵対空陣地の撲滅、第二陣は天空重爆百八十機による高高度からの精密水平爆撃で、敵砲兵陣地を受け持つ。第三陣は一式陸攻二百機による敵歩兵陣地への爆撃。第四陣は大園発案の十三ミリ機銃百丁を下向き斜銃として装備した天空特別陸上攻撃機二十機による同じく敵歩兵陣地への攻撃だった。 「こちら友長隊！ 視界良好。現在、友軍陣地上空を飛行中。約四分で敵目標に到達！」

先頭に行く急降下爆撃隊から無線が入った。

「零戦隊は中高度索敵、隼隊は低高度索敵を行え！ 北西に敵機の

影あり。機数僅か！」

大園が晴空のリーダー室から命令を下す。眼下を飛行していた菅野示現隊零戦の半数が右にゆっくりバンクをかけて迎撃に向かう。

「隼戦闘機隊はリーダーに掛からぬ低空侵入機を注意せよ！ 敵を侮るな」

イルクーツク空襲でソ連空軍の殆どを叩いたとは言え、やはり打ちもらしがいたのだ。低空域を飛行中の加藤隼戦闘隊の内約五十機が散開して北に進路を変えた。

ソ連軍司令官ジェーコフは幕営の中でお粗末な地図を睨んでいた。「このモンゴルにはもつとまともな地図はないのか！」

遊牧民族国家、モンゴルにはまだ精密な地図などあるわけは無いのだが、ジェーコフ司令を内心イラつかせていたのは別の事だ。スターリンが赤軍への統制を強めたために、有能な將軍や幹部將校の殆どを肅清してしまい、日本とアジア民主連合の宣戦布告に対抗する人材が居ないということだった。加えて、先日日本軍機によるイルクーツク爆撃により、現地の稼働機は数十機しか残っておらず、今日あるか明日あるかもしれない日本軍機による空爆に対して、自軍の戦車五百両、装甲車四百両、火炮四百五十門と歩兵五万七千人が丸裸で満州の草原に晒されている事だ。

さらに、心の芯では、スターリンの肅清への恐怖がジェーコフを不安に陥れていた。司令官がそうであれば、何も言わなくても幹部將校へ不安は伝わる。兵士達も航空戦の惨敗を噂で知っており、アジア民主連合への小さな畏怖が根付いていた。かつての日露戦争でも、日本兵の苛烈なまでの戦闘意欲は噂となっていたし、戦車兵も歩兵も怖気が無いと言ったら嘘になる。幸い、斥候偵察の報告では歩兵の数ではソ連が勝っているようだが、アジア民主連合軍は急速に機械化されていると言う情報もあった。

この戦に負ければ、間違いなくジェーコフも肅清されるのだ。そしてこの兵達の怖気を振り払うには、背水の陣しかないと思った。

本来なら、負けを装いつつ内陸へ、本国からの兵站が届きやすい場所へすこしづつ敵を誘い込み、冬の到来をまって攻勢に出たいところだが、それをやると、軍が崩壊する可能性が高かった。陣形にしても相手の空爆を予想して広く分散させておきたいが、その場合、各所で敵前逃亡や命令無視の後退が起こる可能性があった。ジェーコフは火砲は出来るだけ分散させ、戦車軍を前に配置、半分の装甲車を後ろに置いて歩兵を挟む陣形を取るしかなかった。ジェーコフの非凡な点は、そうであっても、空爆の影響を最小限にとどめるために、歩兵を小隊単位で横に長く間隔を開けて配置、蛸壺を掘らせた点だろう。だがこれが、航空部隊に付け入る隙となってしまう。「ジェーコフ司令官！ 配置完了しました。ご命令通り、各自の部署を死守するようにと伝達。戦車・装甲車兵には己の足を鎖で各々車体に繋げと指示しました」

副官の報告に冷や汗が噴出した。己の命令とは言え、そこまでやらねばならない戦とは、勝っても負けても間違いなく己の汚点となるだろうと思うからだ。そこへ友軍の航空隊からの無線が入った。

「只今、敵機と交戦中、敵多数」

ジェーコフは幕営を出て、北の空を見渡す。小さな粒がちかちかと輝き、小さな火となって落ちるのが見えた。

「対空砲準備！ 兵士は蛸壺から一步もでるな！ 車両は散開せよ！」

ジェーコフがそう怒鳴ると同時に、空から急降下爆撃機が空気を切り裂くような音を立てて、攻撃してきた。敵機は陣を囲むように配置した対空砲を的確に爆撃している。爆焰が赤黒く立ち昇った。高高度を敵爆撃機が密集して通り過ぎて行く。後方の砲兵陣地に無数の爆弾が落ちて行った。炸裂する光りと赤黒い炎が地に満ちた。ジェーコフは齒軋りするばかりだ。西から戦闘機を先導役に低空を進入してきた別の爆撃機が歩兵陣地を横切るように爆撃する。歩兵陣地を横になめるように閃光と大きな破裂音、強烈な爆風と地響きがジェーコフの立つ丘にも届いてきた。副官がジェーコフの手を引

つ張って、近くの塹壕に引きずり込んだ。ジェーコフは副官の手を振りほどき、塹壕から首を出して見ると、同じ方角からまたより低空を飛ぶ数十の爆撃機がやって来た。ジェーコフは恐ろしい光景を見たのだ。その爆撃機は爆弾を落とすことなく、爆弾倉から光りの雨を兵士が潜む塹壕に降らせた。横に伸びた塹壕に沿って、豪雨としか形容しようの無い、おそらく一機百丁にも及ぶ機銃の銃弾が無数に打ち込まれている。塹壕は横からの攻撃のためだけに作られた物。上からの垂直に近い角度の機銃照射から兵士を守るべきものは何も無いのだ。ジェーコフの膝が力なく崩れた。

《これは……、私を知る戦争では無い……》

ジェーコフは制空権を握られた不利を今更ながら実感し、一箇所に留まる不利を悟った。

《撤退すれば肅清、留まれば弾雨の雨、残るは捨て鉢の前進攻撃で、敵歩兵と戦車との混線に持ち込むしかない》

無線兵から隣の副官に次々と被害の報告が入る。

「砲兵隊、ほぼ全滅」

「歩兵各分隊、半数以上が負傷・戦死」

「戦車隊、五十両が破壊、二十両が破損、行動不能」

「装甲車隊、百両が破壊、四十両が破損、行動不能」

ジェーコフは火砲の援護無しに、残った歩兵二万と戦車四百八十両、装甲車三百六十両で突撃を指示した。

「副官！ 全軍に伝えよ。制空権が無い以上、ここに留まっても退却しても、敵航空機の攻撃は必ず我らを補足して全滅するばかりだ。生き残る道は敵陣に突入して敵を撃破し、敵の捕虜を人質にすることだ。これ以外に方法は無いと伝えよ。戦車隊、装甲車隊、歩兵の順に突撃開始だ。生き残り砲兵は戦車砲だけ進軍させろ！」

ソ連軍は東に向かって動き出した。ジェーコフが上空を見上げると、一機的大型偵察機が大きく旋回している。

「悦子さん、聞こえるかな？ こちら王仁」

「はい、王仁様、感度良好」

「敵の野砲はほぼ沈黙させた。車両には約十五パーセントに被害を与えたはず。歩兵は半数弱が戦闘不能と見られる。ソ連軍は東に向かつて移動を開始した。作戦イの発動、よろしく」

「了解」

悦子は無線機のマイクを置くと、側に立つ大西司令を見上げた。

大西は強い眼差しを返した。

「よし、作戦イ発動！」

二百両のタイガー戦車が前進を開始した。悦子は一式中戦車に乗り込み、別働隊の連絡将校として噴進砲搭載の一式中戦車五十両と対空対地攻撃用二連装二十ミリ機銃装備の九七式中戦車百両を率いて迂回路を進撃する。敵の背面を突くのだ。敵の陣形は上空の王仁から逐次情報が入る手はずになっている。

戦車の中で揺られながら悦子は、空爆の恐ろしいほどの効果を考えていた。特に天空の爆弾倉に十三ミリ機関銃百丁を斜めに装着した対地攻撃の戦果は信じられないものだった。敵歩兵の半数を戦闘不能にしたのだから。大園の発案、イルクーツクの空戦もそうだったが、今回も下向き斜銃は大戦果をもたらしたのだ。

「悦子さん、敵は真っ直ぐ本陣に向かっている。悦子さんの隊はそのまま直進して、地図ホの地点の丘の影に隠れて敵をやり過ごし、その後、後ろに回り込むのが良いだろう」

「王仁様、この無線、暗号使わなくても良いのですか？ 敵が聞いているかもです」

「いや、聞いていても、相手の動きはここから手に取るように見えるからね。相手が動きを変えたらそこで対応すれば良い。そもそもこの無線の会話が罾かもしれないと思うだろうね」

「ほほほ、王仁様らしい豪胆な作戦ですね」

「大作戦に男と女が日常会話をするなんて、敵には信じられないだろうよ」

「悦子さん、日露戦の仇は天空陸上攻撃機が仇を討ったぞ！」

大園が無線に割り込んできた。

「大園司令の斜銃には大西司令も舌を巻いていましたよ」

「いや、王仁殿と悦子さんの尽力のお陰だよ。気をつけて戦ってくれよ、悦子さん」

「はい、上空で見えてください」

ジェーコフは陣の殿しんがりで無線設備搭載の特別装甲車に乗って移動していた。スターリン宛に暗号電文を打ったばかりだ。アジア民主連合軍の驚異的な航空機戦力によって制空権を奪われ、かつ歩兵の大半を対地攻撃で失った事を柔らく表現し、早急なる援軍派遣と、戦車と航空機の補充を要求した。さらに、このままでは極東ソ連への侵入も予想されると脅しておいた。そのくらい脅さないと、きな臭くなってきたドイツに後押しされたフィンランドとの紛争準備へ、戦力を割かれてしまいかねない政治情勢を良く見抜いていたのだ。

「航空兵力はまだまだ西で温存されている。スターリンがやる気になれば千機や二千機は直ぐに集まってくる。もともと、アジア連合軍の航空戦力を甘く見て、イルクーツクに集めたのは航空機もパイロットも第二線級だった。だが、スペイン内乱当時の熟練パイロットが来れば、次はそう簡単にはやられはしないだろう。歩兵と重火器、戦車は移動に時間がかかるが、二週間もすればシベリア鉄道でどんどんやって来る。後、二三週間、何とか持ちこたえれば……」

だが、問題はイルクーツクの航空本部が事実をスターリンに報告しているかどうかだ。ほぼ壊滅とは決して報告しないだろう。すれば、肅清されるに決まっているからだ。己も歩兵の半分を失ったとは報告していない。甚大なる損害とばかりしている。それで、スターリンが腰を上げるかどうか？ 残る手は、アジア民主連合の戦力を水増しして報告する事だ。

「それにはまず、敵の機械化部隊と手合わせをした後で考えよう……」

部隊の先頭に行くBT5とBT7の中戦車は、ジェーコフの知る

敵のどの戦車より快速で重武装はず。歩兵も潤沢な軽機関銃と重機関銃を携えている。敵の歩兵の大部分は小銃のはず。劣勢になる訳が無いと考えていたのだ。一抹の不安は、敵の航空戦力が驚くほどに充実していた事実だ。もしかして、機械化部隊もまた……。

ジェーコフは考えるのを止めた。敵の野砲が怒涛のように落ち始めたからだ。その弾幕が徐々に先頭を行く戦車隊を包んで行く。

「怯むな！ そのまま最大戦速で突っ切れ！」

戦車隊は各々百メートルほどの間隔を開けて進撃している。直撃弾を食らう確率は少ないが、至近弾を食らうと、BT戦車の欠点であるエンジン部分の発火しやすさが出て、炎上する車両が出始めていた。火を噴いた戦車から搭乗員が出てくることは無い。鎖に繋がれているのだ。ジェーコフは歩兵の前進を暫し止め、戦車・装甲車だけをがむしやりに前進させた。砲撃がびたりと止み、硝煙の霞みが晴れると、前方に約二百両の敵戦車が見えた。やけに砲身が長く角ばった形の戦車だ。ジェーコフが知るどの日本戦車とも違った形だった。

「ちっ！ 新型だ。日本にも重戦車があったのか！」

一段高い位置に陣取った新型戦車は横一列の陣形。味方のBT戦車が射程に入る前から、敵戦車は砲撃を開始してきた。ジェーコフは怖気を振るった。二百両の敵戦車の砲撃の正確さと砲弾の威力が信じられなかったからだ。最前列を進むBT7の五十両が一瞬にして爆裂した。まるでブリキが捻じ曲がるように車体の変形して燃え上がったのだ。無駄に逸れる弾は一発も無かった。直撃か至近弾が確実にBTを屠った。第二撃が二百両の新型戦車から放たれると、再び五十両の戦車が鉄くずに変わった。BT5の第二列は第一列のやられ方をみて、直進前進をジグザグに変えて進もうとしたが、前百両が頓挫した第一列を超えようとした地点で、横腹に同じように正確な砲撃を受けてさらに損害を大きくした。敵戦車の次弾装填の時間も信じられないくらい早かった。BTを二百両ほど失ったジェーコフは思わず、進撃中止を後続に命令した。まだ、友軍の戦車は

射程に入れずに一度も砲撃をしていない。

「あの距離の敵を攻撃するには野砲しかない！　が、野砲は殆ど爆撃でやられた……」

このまま前進すれば、ＢＴ戦車は全滅するだろう。時速三十五キロの快速戦車と呼ばれるＢＴが狙い打ちにされるなら、速度が遅い装甲車両はなおさら不利だ。ここに留まれば、敵の重戦車は野砲の砲撃の後に進撃してくるだろう。戦車隊を分散させて敵戦車を丘下におびき寄せよう。ジェーコフはそう判断すると、全軍を敵野砲の射程距離外へ撤退させた。

大西は後退して行く敵を見ながら、各々のタイガー戦車の両脇に噴進砲装備の一式中戦車と二連装二十ミリ機銃装備の九七式中戦車を一両ずつ付けて、三台で一組を編成して進撃を開始した。遠距離の敵にはタイガーで、短距離の車両には噴進砲と二十ミリ、近距離の歩兵には各々の車両装備七・七ミリ機銃で対応する作戦だ。速度が時速三十キロ弱と遅いタイガーと九七式の前に、時速四十キロの快速一式戦車が先導する。その後ろには四式百ミリ携帯噴進砲を持つ歩兵と百式軽機関銃装備の歩兵が続いた。特務機関の情報では、敵ＢＴ戦車には基本的に小隊指揮車にしか無線が搭載されておらず、その指揮車は砲塔に鉢巻上のアンテナが付いていることが判っていた。全友軍戦車はその鉢巻アンテナ車両を攻撃するように指示されていた。最もソ連は多民族国家で、無線が全車両にあったとしても意思疎通が出来たかどうかは疑問だが。

進撃を開始した自軍を眺めていると、一式中戦車の一部の部隊五十両が突出して行く。副官に尋ねると満州軍属の満州人の戦車隊であることが判明。無線で進撃をあわせるように指示すると、一時は速度を落とすが、しばらくすると戦車同士がお互い競争するように速度を上げ始めて再び突出してしまう。それを見ていた旧ロシア人移民組みの戦車部隊五十両もその後を追うように突出してしまうのだ。やがて、五十両ずつ二組の一式戦車は雪崩のように先走りして

後退するソ連軍の最後尾を捕らえた。

B T戦車の装甲は平均して二十ミリ前後、一式も九七式もソ連戦車との戦闘を予想して、敵の主力砲四十七ミリの至近距離からの砲撃に耐えられるように六十ミリ前後に強化されていた。両戦車ともエンジンは共通の一〇〇式改空冷V型12気筒ディーゼルで四百四十馬力を誇り、初期型からすれば倍近い馬力になっていた。且つ、本来装着されるべき一式四十七ミリ砲を噴進砲に転化したため、軽量化がもたらされた分を装甲強化に回せたのだ。中戦車としては世界の水準をはるかに超えた戦車になっていた。タイガー戦車は八十八ミリ砲を備え、且つその装甲は八十三ミリから百ミリになっているのだ。初期タイガー戦車はエンジンとギア及びサスペンションに問題があり、長距離操行が出来ない欠点があったが、ドイツと日本の技術協力は旋盤・プレス・溶接技術と工作機械の精度を高め、欠点を克服していた。

日本が開発した四式百ミリ噴進砲は射程が短い、弾頭部分に軟鉄が使用され、百ミリ前後の装甲なら滑ること無く破壊した。高速で移動し、近距離線に持ち込むことが一式戦車の最大限の力を発揮することだった。おそらく、満州人部隊と旧ロシア人部隊の部隊長はその点を熟知しているだろう。大西はそれ以上の牽制指示を出す事をやめ、一式戦車の实力を見てみようと思った。

ジェーコフは後方から追撃してくる敵戦車軍の内、一部の高速中型戦車が自軍の快速B T戦車に追いついて来たことに目を見張った。大きさはB Tと同じだが、B Tより十キロ程度早い。ジェーコフはしんがり殿のB T部隊二百両に反転迎撃の砲撃を命じた。反転したB T戦車の四十七ミリ砲が一斉に火を噴いた。着弾雨が敵の戦車約百両を取り巻いた。いくら距離がまだ一キロ離れているとは言え、直撃弾もあるはずだが、敵戦車は燃える事も頓挫する事も無く突き進んでくる。ジェーコフは連続砲撃を命じた。B Tが次弾装填に手間取っていると、敵の中戦車は距離五百メートルまで肉薄した。だが敵はま

だ発砲しない。ＢＴの砲が再び放たれた。命中弾が視認できた。敵戦車の前面や砲塔に砲弾が当たり発光爆発が見えたのだ。しかし、敵戦車の動きは止まらなかった。ジェーコフは戦車隊に後退を叫んだが……。二百メートルまで接近した敵戦車の砲塔から白い煙を噴出した砲弾が放たれた。真っ直ぐな煙の矢がＢＴに向かって飛んで、見事な命中率でＢＴを一撃で破壊する。重戦車の砲弾と同じような閃光がＢＴを取り囲み、一瞬の内にＢＴは燃え上がった。敵戦車は高速を活かし、ＢＴ戦車の間を走り回り、信じられない次弾装填スピードで次々とＢＴを屠っている。次段発射まで五秒と掛からないのだ。

ジェーコフは戦車隊を見捨てざる終えなかった。このままでは敵の中戦車たった百両に全軍をやらねかねないと判断したのだ。装甲車と歩兵は元の塹壕陣地までの撤退させるしか方法が無い。ジェーコフの戦闘指揮装甲車から身を乗り出して後ろを振り返り、ＢＴ戦車隊が壊滅し、敵戦車が高速で追いかけてくるのを見た。遅れた歩兵が敵戦車の機銃掃射ではたたと倒れて行く。草原に隠れた歩兵が手榴弾を見舞うが、怯むことなく敵戦車が、歩兵は後続の部隊に任せるかのように、歩兵を追い越して迫ってくる。ジェーコフに付いて来ているのはいまや、Ｔ２６装甲車三百八十両だけだ。十五ミリの装甲で敵戦車と戦えるわけは無い。ジェーコフは目眩を感じながら前方を見ると、右側面の丘から新たな敵が行く手を阻むように下り降りてきていた。百数十両の別働戦車部隊だった。五十両の高速戦車を先頭に、急速に接近して煙を吐く砲弾で装甲車軍を次々と屠り混乱させると、約百両の二連装二十ミリが一斉に火を噴いた。Ｔ２６装甲車の装甲は敵二十ミリの焼夷徹甲弾を弾けずに、弱点であるガソリンエンジンに火がついて燃え上がってしまう。対戦車用の特別強力な二十ミリ砲弾なのだ。ジェーコフは後退しながら暗号電文を打った。

『現状のソ連兵器では、アジア民主連合に太刀打ちできず。我が軍は全軍を挙げて降服する。祖国の繁栄を期されたし』

ジェーコフは全軍に戦闘停止を命令、白旗を掲げるように指示した。

赤い毛足の長い絨毯が敷き詰められたクレムリン宮殿の執務室は、スターリンが吐き出す葉巻の煙が立ち込め、漂う煙を掻き消すように人がひっきりなしに出入りし、電文や報告書を机の上に山積みにして行く。重要な軍事情報は、粛清の結果、新たに將軍となった顔も知らない新米が、電文を携えて報告に来た。中には、極東の敗戦をスターリンに伝える事が初仕事の將軍もあり、詳しい事情を聞いても拉致があかず、おろおろする將軍を見て、スターリンは次々に送られてくる信じられない暗号電報の内容とともに、癩癩を爆発させて誰彼となく当り散らすしかなかった。

アジア民主連合軍をモンゴルとの国境線ノモンハンに釘付けにする作戦だったはずが、敵の爆撃機がイルクーツクまでやって来て、現地空軍力を壊滅させ、その上今日は、ノモンハンへ派遣したジェーコフが降服し、ウラジオストクとナホトカは日本海軍の猛爆で湾内外にいた僅かな極東ソ連艦隊がほぼ全滅、加えて敵海兵隊の上陸を許して占領されてしまったのだ。樺太のオハ油田をはじめ、オホーツク海沿岸の都市は何処も同時に攻撃を受けて、占領されたか陥落寸前の状態だった。敵の推定される敵兵力は五十万にも登る。

オホーツク海北の町マガダンに上陸した日本軍は西のヤクーツクに向かい、ウラジオストクに上陸した舞台は満州国陸軍によって占領されたハバロスクを目指していた。ノモンハンの機械化部隊はモンゴルには見向きもせずそのまま満州ハイバルに一度戻りそこから満州鉄道でソ連領チタを目指す模様だ。満州からは敵の重爆撃隊がイルクーツク以西の軍需拠点を波状爆撃しており、イルクーツクより西側のシベリア鉄道と幹線道路も爆撃にさらされ補給補充が出来ない状態になっていた。敵がイルクーツクより東のシベリア鉄道を占拠すれば、極東シベリアは西から動脈を断たれてしまう。敵はシベリア鉄道を使い、ハバロスクとハイバルの両方からチタに移

動し、イルクーツク攻撃用兵力を集結させるだろう。と言う事は、今からソ連赤軍を準備して西から援軍を送る以上に速く、敵も五十万の軍勢をイルクーツクの東に集結させることが出来ると言う事だ。

スターリンは米国ルーズベル大統領へ電話を掛けた。

「ルーズベル大統領！ 状況はもうご存知だろう！ 日本とアジア民主同盟はソ連領東シベリア、イルクーツクの東全てを領土とするために全面攻撃をしてくている」

「ソ連赤軍はどうしたのですか？ 極東の黄色い人種にやられるはずが無いと思いますが……」

「もちろんだ。ただ準備不足なのだ。米英仏蘭からの緊急支援が必要だ」

「何が必要なのですか？」

「兵士は充分いる。だがパイロットと戦車兵が不足している。さらに兵器だ。戦闘機・爆撃機・戦車だ」

「わかりました。チャーチルやドゴールとも協議の上、分担を決めて至急出来るだけの援助を行います」

「（バリシヨーエ スパシーバ：

どうもありがとう）」

一人になりたかったスターリンは、電話を切ると秘書にドアを閉めて誰も入れるなと指示し、来客用ソファーに深く沈みこんだ。

《列強は日本とアジア民主同盟の矛先を北に、ソビエトに向けさせる事に成功したのだ……。支援援助はするだろうが……。この上はドイツと妥協してでも、東の防衛に全力を傾けねばならない》

スターリンは窓の外に広がる赤の広場を見た。人影は疎らだ。己が課した粛清の嵐は市民達の憩いも奪ったのか？ 春だと言うのに、疎らな人々はなぜかよそよしく足早に広場を歩き去って行く。遊び惚ける子供達はどこに行ったのだと、スターリンが広場を見つめていると、広場は何時しか寒い冬の光景に変わった。降りしきる雪に人々は戸を閉ざし、じつと家々に籠もるロシアの冬。子供の時か

ら慣れた脳裏の中の情景が春の広場に重なったのだ。長い冬に耐えることこそ、ロシア人の鉄の意志を作り上げる。己の人生もそうではないか？ 靴屋の息子に生まれ、母は農奴だった。そんな自分が今、ソビエト連邦の頂点に立っているのだ。極東の黄色い人種に我が道を壊される事など、絶対あり得ないはず。

「そ、そうだ。冬將軍の到来まで奴らをイルクーツクの東に釘付け出来さえすれば、道は開けるに違い無い。ロシアの冬の厳しさを黄色い連中は知らないだろう」

スターリンは主だった將軍を呼び寄せ、東への大軍編成命令を下した。それが終わるとドイツ大使館にも電話を掛けた。英仏の帝国主義に対抗して、共に戦おうとラインハルト首相に伝えるように依頼したのだ。

そのころ米国でもルーズベル大統領の前には米国のアジア関連の専門家と軍人達が集まっていた。テラス続きの明け放たれた窓から、ホワイトハウスの庭の木々を揺らす風が穏やかに舞い込み、薄着になった誰もが、春の訪れを楽しめるような一日だ。マッカサーは大統領の顔色が悪くない事に気づいて、今日の報告の幸先の良さを感じていた。

大統領が会議の口火を切った。

「まずは、ノモンハンでのソ連軍敗戦の理由を聞きたいのだが……、マイク（マッカサー）はどう分析するね？」

「ソ連軍はスターリンの粛清で、有能な將軍將校が殆ど居なくなっ
てしまいました。また、今回のノモンハンに集まったソ連軍の陣容は、飛行パイロットも戦車兵も訓練の充分でない未熟な連中が主体です。且つ、兵器も第二戦級がその殆どだったと報告を受けています」

ルーズベルは頷きながらも、疑問が消えなかった。

「そうだとすると、一千機に及ぶイルクーツク周辺の航空兵力が一日にして壊滅し、且つ、ノモンハンでは一千両に及ぶ戦車・装甲車

が壊滅して、歩兵は二・三万がやられて降服するなんて事が、実際にありうるのかね」

CIA長官のルイスが立ち上がり、補足説明を始めた。

「モンゴルからの情報によれば、日本を主力とするアジア民主連合の航空機も兵器も圧倒的な強さを持っているとの報告です」

「だから、どんな強さなのかが知りたいのだが？」

ルーズベルの切り替えしが鋭く一同を舐めた。ルイスは机の上の報告書を何枚かめくると説明を始めた。

「日本軍の重爆は現在我が国で完成したB17重爆と遜色ない性能だと思われます。戦闘機も我が国のカーチスP40とほぼ同様な性能だと想定しております。ソ連の航空戦力は、現状I-16が主力ですが、性能及び武装とも我が国のP40あるいはF4Fと比較すると、第二戦級であり、かつパイロットも未熟とあれば、結果は眼に見えていると申し上げます」

「うむ。では陸上での戦いはどうなのだね」

「ソ連戦車BTはアメリカ人ジョン・W・クリスティーという技術者が開発したM1940という戦車がベースとなって改良されたもので、主力砲も速度も装甲も、M4シャーマン戦車に及ばない旧式戦車です。現在ソ連では新型戦車の七十五ミリ砲を搭載したT-34を量産し始めたばかりですし、戦闘機もYak-1が新型として開発を終わっています。これらの新型が出ていれば戦局は変わったかもしれません。かつ、情報によれば、日本はドイツから新型重戦車を多数輸入して戦線に投入したらしいのです」

「ドイツのどんな戦車だね？」

「コード、ティーゲル（虎）と呼ばれて開発されていたもので、昨年より生産開始の新型です。七十五ミリ砲を搭載した重戦車でM4あるいはT-34と同じクラスだと思われます」

世代の違う兵器同士がぶつかったのだとルーズベルはイメージした。兵士の熟練度もソ連は劣ったのだ。これではソ連は最新鋭の兵器と優秀な兵士を東に向けなければならないだろう。西のドイツとの牽

制役は果たせなくなる。

「スターリンから兵器援助要請が出ている。政治的に共産国家に武器を回したくはないが、日本の目を南方から北に剃らせて置くことが国益につながると思う。ソ連に肩入れすれば、ドイツに対する暗黙の牽制になると思うが、どうだね。どの程度の兵器をどのくらい送ればよいか？ 智慧を絞ってもらおう」

マツカサーが真つ先に発言する。

「大統領、日本とはいつかどこかで戦火を交える可能性が高いと思います。この際、P40の二百機程度供給し、内百機は義勇軍を募り、我が軍のパイロットを実際の戦闘に参加させて、相手の実力を知る事が肝要です。且つM4戦車も同様に二百両ほどで、内百両は陸軍からの義勇兵を含ませましょう」

「うむ。英国やフランス、同盟諸国にも同じように提案しよう。共産国家だから、第三国経由での武器輸出になるだろう。まずは至急航空戦力を派遣しよう。戦車は北極海の陸揚げできる場所からモスクワに送りつけて、後はスターリンに任せよう」

マツカサーは頷くと、真剣な表情で続けた。

「現在連合国の太平洋の拠点は、フィリピン及び香港、それ以南のアジア諸国ですが、何処の国もアジア民主連合の国威が増すほどに列強諸国からの独立運動が高まってくると予想されます。中国の蒋介石はアジア民主連合とも我々連合国ともうまく付き合うように立ち回っていますが、極東ロシアが民主化されれば、アジア側に立つかも知れません。そうなると香港やシンガポール、フランス領インドシナ（ベトナム）当たりも危なくなってくる。まずは、今からフィリピンに戦力を集中して睨みを利かせて置く事が必要です」

ルーズベルはマツカサーの顔をしげしげと見て、不思議そうな顔をした。フィリピンに米軍を集中することはもちろん必要だが、それはアジア諸国に睨みを利かせるためでは無い。米国の国益を考えたら、フィリピンに留まっただけで何の国益があるのか。中国・満州に覇権を振るう日本を叩き落とすための準備であるのかと考えて

いたからだ。日本が全力で極東ソ連に前線を拡大して、補給線が延びきった頃合が勝負時だと思っていた。それはスターリンもシベリアの風が強く吹きすさぶ頃だと思っているに違いないのだ。マツカーサーの報告に答えずに、ルーズベルは他の質問をした。

「ウラジオストツクもナホトカも、オホーツク海の諸都市もほぼ、日本の機動部隊に砲撃され空爆されて陸戦隊に占領されたようだが、海軍の見解はどうなのだね？」

ミニッツがキング大將に促されて説明を始めた。

「極東ロシア海軍とは名ばかりで、基本的に沿岸警備を主目的とした駆逐艦と潜水艦が主です。日本が宣戦布告をソ連にした時点で、すでに潜水艦隊は日本の駆逐艦隊によってオホーツクの全域で相当数が沈められており、港湾に残っていたのは駆逐艦と警備艦だけでした。日本海軍はおそらくこの日のために増艦した駆逐艦と巡洋艦八十隻を主に、対潜哨戒を行いながら、空母四隻、戦艦六隻を投入しての作戦であり、海上での勝負も沿岸都市での勝負も最初から目に見えていたのと同然です。大陸国家ロシアの宿命で、今まで不凍結港を持たずに海軍力を増強できなかった結果です」

実際、ソ連の駆逐艦および警備艦は日本の機動部隊が海上に現れると、殆どが接岸して艦を棄てて逃げたのだ。ソ連の潜水艦も潜水時間が短い短距離型が多く、執拗な日本駆逐艦の追跡に、多くが浮上して降服するか、あるいは日本軍の特殊爆雷により沈没した。軍港のあるナホトカ以外のオホーツク沿岸の港は駆逐艦も無く警備艇がそれぞれ数隻程度では、駆逐艦に先導された日本の上陸部隊に立ち向かうどころの話ではなかったのだ。

「今後日本は狭い日本海の南北の入り口を、その強力な海軍で封鎖し、大陸との輸送力を強化して極東シベリアの潤沢な資源を効率良く手に入れたことになります。特に、ハバロスクの未開発油田や北サハリンのオハ油田とその東海上の大陸棚下にある無尽蔵の石油を開発することになるでしょう」

突然発言したのは、マサチューセッツ工科大学の極東の地質学の

権威、デイビッド・ストーム博士だった。

「ストーム博士、極東シベリアにはどんな資源があるというのだね？」

「過去の調査では、現代文明に必要な殆ど全ての資源が眠っています。油田、天然ガス、鉄鋼石、錫、亜鉛、ダイヤモンド金銀などの希少金属、木材資源等々です。ただ、列強が今までそこに目をつけなかったのは、シベリアと言う、極寒の環境のためです。しかし、それらの資源は採掘設備さえ整えば、全アジアに供給しても有り余る量であると予想されています。蛇足ですが、ダイヤモンドの埋蔵量は南アフリカに次ぐ世界第二位なのです」

会議の誰もが黙ってしまった。そんな宝の山を日本が掘り当てた事に対する嫉妬のような感情が全員に湧いたのかも知れない。あるいは先を越されたという悔しさか。

「最近の情報では、日本の建設機械や土木機械が大型化され、ハバロスクに近い満州の工場で盛んに生産されていると言う事です。このソ連領ハバロスク近辺こそ、鉱物資源の最も豊かな地域なのです」

「日本は南方資源を狙っていると言ったのは誰だ！」

キング大將が机を激しく叩いて叫んだ。ストーム博士は動揺することなく報告を続けた。

「日本は輸送という観点からも、着々と準備をしていたのでしよう。陸送トラックの大型化、いわゆるタンクローリーも、海上輸送のタンカーの造船も我々の予想をはるかに超えたピッチでなされていたようです。エネルギーと資源を手にしたアジア民主連合を侮れないとご記憶下さい」

しかし、ルーズベルはニヤリとして軽口をたたくように言った。「博士、漁夫の利を得るのは米国だ！ この場の全員はそのつもりで今後の計画を練ってくれ」

ルーズベルの頭に沁み込んだ博士の言葉は、オイル、ダイヤモンド、金の三つだった。かつてのカナダやアラスカで起こったゴールドラッシュが脳裏に浮かんでいた。それこそ、膨大な国家予算を注

ぎ込んで、アジアの極東辺りまで軍事展開を行う理由にさえ思えた。

悦子は大西の機械化師団と共にハイバルから満州鉄道に乗って、ソ連軍の何の抵抗も受けずにソ連領チタに到着した。出迎えてくれたのは空路で先に来ていた王仁と大園司令だった。制空権を奪った日本空軍はチタに落下傘部隊四千名を降下させ、携帯噴進砲と軽機関銃でソ連の僅かな守備兵力を駆逐して占領していた。

チタはソ連が共産革命のどたばたの一九一八年から一九二二年まで、ソ連と日本の間の干渉国として作られた極東共和国があった場所、モンゴル人や満州人も多く住む南シベリアの重要都市だ。石炭、銅、鉄鉱石などを産し、貴金属類が豊富に産出する地方でもある。チタから西へ四キロにケノン湖があり、大園は早くもそこに晴空の水上爆撃隊を二百機ほど浮べて連日、イルクーツク周辺の軍事基地とその先のシベリア鉄道分断爆撃を行っていたのだ。チタの北四キロにはチタ陸上飛行場があり、戦闘機及び天空など合わせて八百機が爆撃と制空哨戒を行っていた。

チタの住民はアジア民主連合の到着を喜んだ。慢性的な食料・医療・物資の不足に強制労働と、赤軍に対する恨みと不平不満は頂点に達していたのだ。早速王仁は、チタ州の有力者を集めて民主国家樹立のシナリオを説いていた。かつて極東共和国であったことが幸いして、民衆の意識は高かった。

大西と大園はここで、ハバロスクからやって来るアジア民主連合の軍本体を待つのだ。延々と東シベリア鉄道を貨物列車が総動員されてやって来る。軍人と軍事物資を下ろし、出来立ての資源を買い取り、積載してハバロスクへ戻って行く。満鉄からも軍需物資と生活用品や食料品が満州の商人と共にどんどん入り込んでいた。チタは見る見るうちに活況を呈した町に変わって行った。

資源が貨幣に代わり、その貨幣で満州から続々流れて来る物資が買えた。工場が潤うと、行員の給与が支給され、そこに地元の農民や漁師らが市場を開き潤って行く。貨幣が人体の血のように必要な

ものを必要なところへ運んで行くのだ。王仁と悦子は、毎日変わりに行く街中を歩いた。

大園の晴空と天空の重爆撃隊は、その高高度性能と長距離飛行の長所を活かしきって、大胆なシベリア鉄道破壊空爆を続けていた。一万メートル上空を迎撃できるソ連の戦闘機がない事を見切ったの作戦だ。チタからモスクワまでは四千八百キロだ。晴空も天空も爆装で六千キロ以上の航続距離を持っている。イルクーツクより三千三百キロも西側のチャリヤビンスク辺りや手前のオムスク近辺のシベリア鉄道の線路を狙って鉄道の分断を図り、各地から集積されるべき東への補給を確実に阻んでいた。

敵の戦力補充がイルクーツクに着く前に、アジア民主連合の機械化師団でイルクーツクを占領する。その後ろにはチタに数十万の兵力を置く。だが、まずソ連は航空戦力で対抗してくるだろう。王仁はそう考えていた。列強から最新鋭機を供給援助してもらい、おそらく数千機の規模でやって来ることを予想していた。大園もそこは充分判っていて、各地へ電探基地の建設と飛行場整備訓練に余念がない。シベリア鉄道をいたる所で分断した爆撃隊は、各都市近辺の飛行場に目標を変えて日々飛び立って行く。大園のお陰で、チタの町とそれ以东の地域は平穏な時が流れ、その平穏さは活気と人々の明るい笑顔を作り出していた。

「王仁様、御覧なさいまし。シベリアの月……！」

「ええ、悦子さん、大きくて静かな月だ」

春も盛りと言え、南シベリアの夜は冷たい。悦子が何処から手に入れたのか、熱燗とおはぎを用意して、二人共コートを着込んでホテルの屋上に立ち、月見を楽しんでいた。シベリアの夜気は冴えてチタを東西から挟むような山並みに、月が凜とした青い光りを天から浴びせている。ケノン湖の鏡のような湖面にも青い月が映り、その光りも周囲に零れて、透き通った淡い青色で世界が包まれるような、奥の深い清々しい光景を描き出していた。

あまり酒を好まない王仁は、悦子が注いだお猪口をゆつくり少しずつ飲み、王仁が悦子に返杯すると悦子は一気に飲み干す。王仁の目の周りがほんのり赤くなっても、悦子の冴えた表情は少しも変わらないのだ。チタに到着すると、二人は軍人達とは別行動となり、もっぱら新政府建設の下準備をしている。やがてやって来る学者や各分野の専門家から編成されたアジア民主連合の民主化建設促進委員会へ、チタ州の人材と状況報告を橋渡しとして行うためだ。

「悦子さん、天の月と湖に映った月とどちらが好きかな？」

「もちろん、私は女ですから、湖の月になりたいと思います。王仁様が天の月であればですけど……」

「……、悦子さんは湖の月より綺麗……、おっと、このおはぎはうまいなあ！」

「王仁様は、おはぎとこの悦子のどちらがお好きなので？」

王仁は笑いながら、ちよつとどぎまぎしながら、

「もちろん！……」

月の光りに照らされた悦子の顔は微笑んではいるけれど、壮絶な美しさを放った。王仁は悦子を見ずに天の月を見上げて微笑みながら沈黙を保つ。焦れた悦子がまた聞いた。

「おはぎですか？ それとも悦子でしょうか？」

「あなたが戦車戦で怪我もなく無事で居てくれた事を、今、月に感謝したところさ」

王仁の声は優しい。月に照らされた王仁の横顔は悦子の好きな表情だ。悦子はその言い様に、心の底で満足しているのだが、形にならない会話に不満が残る。微妙な嬉しさと哀しさの入り混じった表情になった。王仁は天から眼差しをゆつくり悦子に移すとぼそりと話し始めた。

「天皇家の隠された家系、王仁の先祖は月からやって来たと古文書にある……」

突拍子もない話に、悦子は二の句が次げない。王仁のいつもの冗談の可能性もある。悦子は呆れた顔になるしかなかった。

「いや、別に冗談じゃないけれど、本当かどうかは私も半信半疑だし。でも……、悦子さんは『かくや姫』の昔話を知っているだろう？ 王仁家の家系図によるとね、我が祖先はかくや姫まで遡ると言う事になる……」

王仁が『家系』と言う言葉を使った時、悦子の心に訳も無く不安の細波が立つ。だが、その不安の理由を考えるより、王仁の事をもっと知りたいと思った。

「家系図はどの家も贋作である事も多いのでは……」

「私もそう思っている。多分大昔、我が祖先が天皇家に取り入るために作った出鱈目でたらめだとね……。ははは、つまらない話になってしまったね」

「いいえ、王仁様のことは何でも話してほしいのです」

「うん、月から来たということで、王仁の家に伝わる異能を強調しているのだろっね。だから、王仁家は天皇家以上に縛られた生活を余儀なくされて来たのさ。伴侶選びも結婚もね。血を大事にするわけさ」

悦子は顔から血の気が引いて行くのが判った。迂闊うかつだった。王仁と自分には身分と家系という大きな溝があったのだ。父母も判らない浮浪児だった自分と、天皇家に所属する王仁と釣り合いが取れる訳が無いのだ。悦子は急に力が抜けそうになった。そんな途方もないことを心で望んだ己が恥ずかしい。冷静で計算高い特務機関員高階悦子が、いつの間にか王仁にはでれでれた女になっていた事に今更ながら気づいたのだ。王仁はそんな胸中を知ってか知らずか、優しい眼差しでじっと自分を見つめている。悦子は自分の破廉恥な思いを表情に出さないために、教練で習得した感情操作の技巧を屈指して、他の事を考えようと必死だった。

「でもね、悦子さん。王仁家は私の代で終わるのだよ」

「……!？」

悦子は崩れそうな感情を必死で押し殺しながら、王仁の新たな衝撃の言葉を聞いた。

「お、終わるのですか？」

「ああ、かぐやの預言書という良く当たる門外不出の古文書があつてね。我が一族の事が事細かに書いてある。もちろん私の事も生い立ちから全て書いてあるのだけれど、その古文書の最後に、《帝が人と成り下られる時、一族の最後の王仁が帝を助け、この世に五族共栄をもたらす。その後、王仁もまた人と成り下るだろう》とあるんだ」

「で、では、五族共栄がなった時、王仁様はもう、王仁家と皇族の仕来りに縛られないということでしょうか！？」

「そういうことなんでしょうね。嗚呼、早く人になりたいね〜なんて」

悦子は側にあつたおはぎを掴むと敏捷に王仁に飛びついて、おはぎを王仁の口回りに押しつぶした。王仁は悦子を飛びつかせたままゆっくり立ち上がり、再び故郷かも知れない月を見上げた。

悦子は王仁におんぶするように抱きついたまま、頬を王仁の背中に寄せると、つうと涙が流れてきた。

スターリンの粛清によつてシベリア送りになつた人々はここ、チタにも数十万人を数えた。殆どが炭鉱や鉱山の劣悪な環境での強制労働で、憔悴し消耗しきつていた。アジア民主連合はまず、食料・医薬品の援助を手始めに、生活環境を整えるために、モンゴル族から大量のテント住居を調達して、仮住まいとした。本住宅建設には時間が掛かるからだ。かといって現状の家畜小屋のようなソ連の収容施設では病人が絶えない。モンゴル族のテントは毛皮で作られており、防寒特性が非常に良いのだ。アジア民主連合は来るべきシベリアの冬の到来に備えて、軍の兵舎にも使用する計画だったのだ。炭鉱などでは、労働者の採掘設備を一新し、労働時間を八時間としただけで、労働者は見る見る健康を回復してきた。

同時に、かつてのソ連赤軍の軍属だった人々や、政治、経済などの専門分野に詳しい流刑の人々を集めて、旧ロシア軍人達と共同で

民主赤軍編成と行政改革チームを次々と組成して行った。行政改革チームはいわばロシアのインテリ層が奇しくも各都市に存在した事で、民主化促進にはうってつけの人材となったのだ。アジア民主連合によって解放された極東ロシアの他の各都市も同じ状況で、組成された旧軍人による民主赤軍は、あつという間に五十万人にも登った。この新設軍隊は冬の到来までにじっくり後方で、新しいアジア民主連合の武器に習熟するために訓練される事になる。

チタやハバロフスクなどを筆頭にどの町もシベリアの資源を豊富に有し、アジア民主連合がそれを買い上げる形が出来ると、直ぐにどの町も活気を呈し、且つ、自治費を捻出した上に、五十万の軍事費を供出する余裕があることが判明した。事前に予想計算されたことではあるが、資源が富みであることを極東シベリアの人々はやっと悟ったというわけだ。ロシア帝国の農奴が存在した時代からソ連邦に至るまで、一貫してシベリアの富みは中央によって搾取されてきたことに気づいたのだ。

チタを解放して一ヶ月が経とうとしていた。イルクーツ以西のシベリア鉄道を分断された赤軍は、日本空軍の空襲を恐れて、夜間細々と兵員増強を行っている。昼間は深いシベリアの森に隠れ、夜移動してきたのだ。戦闘爆撃隊も日本の爆撃機が届かないチャリヤビンスクよりすこし西辺りに集結していた。陸軍歩兵およそ百万人。戦闘車両二千両（内千両は新型戦車）。航空機二千機。その内、イルクーツクに到着しているのは、歩兵二万人。戦闘車両二百両だと想定された。この先着部隊はバイカル湖の東に進出してイルクーツクへの防御陣地を作りつつあった。アジア民主連合は敵の全容がはつきりしてきたので、何処でその敵と渡り合うかが連日協議されていた。チタは東へ向かうシベリア鉄道と南東へむかう満州鉄道の両方が通る場所の後方兵站基地にうってつけた。やはり決戦場はバイカル湖の東になると予想された。

アジア民主連合軍は二手に分かれた。第一軍はバイカル湖に向かう道を、シベリア鉄道に乗ってバルヤガまで行き、そこから陸路モンゴルとの国境付近を歩き、バイカル湖南に位置するモンゴル鉄道国境の町ナウシュキイを占拠する。モンゴルからの援助を封じた後に陸路北上し、ティンダ周辺の敵を撃破しつつバイカル湖畔バブスキンで第二軍と合流する。第二軍は機械化師団が中心で、チタからやはり鉄道に沿って進み、バルヤガからも鉄道に沿ってウランウデ攻略を目指す。その後は第一軍の戦況を確認しつつ、グシノリョースクへ南下するか、そのまま鉄道に沿ってバイカル湖畔を南下するかを決定する予定だ。

ソ連はおそらくナウシュキイとグシノリョースクの間のティンダ辺りに陸軍を集結させると予想された。チタから西へ進軍できる上下の二本の道のどちらから来ても対応できる布陣だ。空軍はグシノリョースクの北に集結すると思われた。

すでに大園指揮の戦略爆撃隊がグシノリョースクとティンダを含むバイカル湖東の軍事施設を猛爆していた。だが、敵もアジア民主連合の航空勢力を用心して、やはり昼間は歩兵も戦車も近隣の深い森の中に隠れて消耗を防いでいた。しかし、その間こそ、アジア民主連合の前進の機会となる。

今回も悦子と王仁は、悦子が大西と共に第一陣、王仁は副指令の高田と共に第二陣と共に行く。第一陣はシベリア鉄道を使用して列車を連ねて進行、途中からは陸路だ。タイガー戦車二両を装甲車二両ずつで前後にはさんだ前方警戒車両が線路の破損や敵の出現を警戒しつつ悦子を乗せて先行前進していた。後方五キロには戦闘車両、携帯噴進砲と百式軽機関銃装備の歩兵車両が延々と続き、最後に野砲と砲兵が数百両続いた。上空には高高度を零戦改が、低高度を隼改が上空哨戒を行っている。悦子是最前列の前方警戒車両のタイガー戦車の中に乗っていた。

王仁は戦車・装甲車を中心とした第二陣の機械化部隊にいた。ウランウデ攻略をめざし、北に走る谷沿いの道を進撃する。両陣とも

チタの州境までは平穏な行軍だった。沿線の住民が総出でアジア民主連合の行軍を旗を振って出迎え見送った。しかし、バイカル湖東に隣接するブリヤート自治共和国に入ると人影は消えた。

加藤隼戦闘機隊は低空哨戒の任を受けて、百機の隊を二つに分け、各々五十機で代わる代わるチタを飛び立ち、第一陣と第二陣の前方五キロを高度千メートルで飛行していた。第一陣の哨戒を担当したのは加藤隊長自らで、この時二十五機の編隊で約五時間の飛行をこなしていた。チタから主戦場として想定されたティンダまでは約四百キロ、航続距離三千キロの一式戦闘機隼改にとっては苦のない哨戒空域で、そろそろ交代の二十五機が到着するころだった。ナウシュキイ上空に差し掛かり、大きな緩い旋回を描いている時に、南のモンゴル方向に僅かな気配を感じた。緩く起伏する草原を這うように超低空で飛行する戦闘機を発見した。加藤は高度を五百メートルまで下げながら敵進行方向の右側に遷移して、機種を判別した。ソ連のI-16とは明らかに違うスマートな感じで、識別マークはソ連の物だ。加藤は無線で大園に報告する。

「こちら加藤隊、現在ナウシュキイ上空、ソ連領とモンゴル領の国境を飛行中、モンゴル領内を低空で飛ぶ、ソ連マークの新型機五十機を発見、攻撃許可を得たし」

「こちら大園、加藤！ それはおそらくソ連の新型か、列強から供与された新手だ。いつもの訓練通り、二刀流で行け」

「了解」

加藤は僚機を引き連れて、敵の右斜め上空から高度差を利用した一撃離脱で覆いかぶさるように襲い掛かった。千四百馬力のハーフ五改のエンジンが唸る。一式戦闘機隼改はエンジンの馬力向上型で、速度は五百六十キロで、武装は炸裂弾を装填した機首十二・七ミリ二丁、両翼に焼夷徹甲弾を装弾した十二・七ミリ二丁、そして風貌後ろに二十ミリ斜銃一門を搭載していた。初期型に比較して旋回性能は重量増加により若干劣るが、巡航速度・急降下速度ともに向上

し、低空での戦闘では零戦との模擬戦でも優劣はつけ難いバランスの良い戦闘機になっていた。防備も燃料タンクは二重構造になって、外皮と内皮の間には生ゴムが充填されて自動消化機能があり、操縦席とエンジン周りには分散して防御版が施されていた。

敵機も加藤隊に気づき、各機分散して高度を必死に上げてきていた。加藤は一撃離脱攻撃の後には巴戦になる予感を感じた。高度がお互い低すぎるのだ。だが、それは隼の愚鈍なソ連戦闘機に対する最も得意とする戦法だ。

米国空軍参謀クレイ・L・ノートが指揮する義勇飛行隊、フライングタイガーは先発隊カーチスP40戦闘機二十五機でモンゴル・ウランバートル飛行場からソ連領テューダ陸軍飛行場を目指していた。敵の電探を避けるために、モンゴルの緩く起伏する草原を超低空で北上していたのだ。近々アジア民主連合の陸軍が進行してくるという情報に基づき、本格的防衛体制の魁としての第一陣の派遣だった。もともと、中国蒋介石岩を補佐するために設立されようとしていた義勇軍だが、中国のアジア民主連合よりの外交のため、一次凍結されていたのが、急遽、ソ連への義勇軍として実施された。全米の戦闘機操縦士から特別待遇と報奨金付きという条件で募集された百名のパイロットと、二百名の修理保全地上要員からなる部隊だった。P40は千百五十馬力のエンジンに十二・七ミリ機銃六門の重武装、且つ最大速度五百七十キロを誇り、丈夫な機体で急降下特性に優れていた。

飛行隊長リック中尉はP40ウォーホークが気に入っていた。何と言っても丈夫で取り扱いが楽だ。モンゴルの草原だろうとシベリアの荒れた大地だろうと、P40なら日本の戦闘機に負けるはずが無いと考えていた。知る限りの日本機とは速度は五百キロに満たず、武装は七・七ミリ機銃二門だという話だ。旋回性能はやら良いという話は聞くが、防御が弱く直ぐ火を噴くとも聞いていた。義勇軍に勧誘された時の係官の話だ。リック中尉は自分の経験から、空

戦は高度の優位を作る速度と上昇力と武装が物を言うと思っていた。旋回を屈指する巴戦など、古臭い複葉機のための第一次大戦の戦法だと思い込んでいた。

この日も果てしなく続くモンゴルの草原を、司令長官クレイが指示したとおり、敵のリーダーを避けて低空をソ連テューダ基地に向かっていた。アジア民主連合がリーダーを持っているとは初耳で、信じられない事だったが、命令は命令だ。それに低空飛行と言うのは対地スピードが視認体感できるので、楽しい飛行でもある。要はスリルがちょっぴりあるのだ。だが、そんな遊び心が災いした。リックが右上空を見上げると銀にも灰色にも見える空冷式戦闘機数十機が右上空から降下して来るのが見えた。リックは軽くロールしながら無線で僚機に知らせつつ、スロットルとピッチを最大にして上昇に移った。今出来る事は、機首を敵機に向けて上昇しながら正対する事だ。旋回して回り込むことも、降下する速度で加速して逃げることも出来なかった。

「こちら隊長機リック！ 敵機の正面を突っ切るぞ！ 敵の武装は豆鉄砲だ。当たっても蚊が刺す程度だ。正対してやり過ぎたら出来るだけ高度を稼いでから反転だ。相手は日本機だ。直ぐには上がってこれない。高度を使つて、常に相手より優速を保て」

僚機から了解の無線が入る。正面を見ると敵機の数もほぼ見方と同数だ。先頭の敵機の機銃が光った。

《二箇所じゃない！ 四箇所が光った。四丁だ。だが、七・七ミリだろう》

と思う刹那、曳航弾の光りがリックの機体をざつと横切った。機体にどんどんという嫌な振動があった。数発被弾したと思うがリックも六丁の十二・七ミリを発射した。ところが敵機全機がふうと沈み込んでリック達の曳航弾は空を切った。刹那、敵機が下を高速で潜り抜けて行く。その時、下から打ち上げてくるような大きな目の曳航弾が一瞬走った。

《しまった！ 別の敵が居たか？》

異様な角度から飛んできた曳航弾の軌跡に慌てたリックは、上昇しながら下方を見るが其れらしき機影は無かった。何だあれはと思いつながら後に続く僚機を振り返った。信じられない光景があった。半数の僚機が火を噴いて落ちて行く姿と、下からの突き上げるような曳航弾に驚いた殆どの僚機が慌ててばらばらに旋回軌道に入っていたのだ。その各々に敵機が後ろに二機づつ食い下がっていた。

《ば、馬鹿な！》

上昇機動にあるのはリック一機だけだった。そしてリックの機体の後ろにも二機の敵機が食い下がるように上昇してきていた。その位置は丁度、リックの頭の上の後ろ、それも背面飛行で食い下がってくる。急降下の加速を利用して、リックとすれ違い様に宙返りを打ちそのまま反転上昇してきているのだ。そんな馬力が日本機にあるはずが無いと思った。急降下のおつりを利用してに過ぎない。そのうち速度が落ちる。振り切れるとリックは思った。リックは再び後ろを振り返った。そろそろ力尽きるころだと思ったのだ。だが、リックの目に飛び込んできたのはさらに背面飛行のままリックに近づいた敵機の操縦士の射るような視線と、風防の後ろが光りを放ったことだった。リックの機体はエンジンを打ち抜かれて、速度がぐくくと落ち、機首を下げた。リックは必死で失った速度をさらに機首を下げて取り戻そうとする。その間も、後を振り返る。敵の二機はリックが被弾して上昇角度を落とすと、ひらりとロールして、今はリックの真後ろについている。二機、計八丁の曳航弾が雨のように降り注いだ。エンジンカウルの部品が剥がれ落ち、風防に激しくぶつかる。エンジンが止まり翼内タンクから火が出た。リックは風防を開けて必死で飛び出し、すぐさまパラシュートのリングを引いた。幸い高度は四百メートル程度、パラシュートが開いた。安堵した途端、己のせいぜいした息に気がつき、開いたパラシュートを見上げると、数機の僚機が巴戦に巻き込まれて敵機に追われているのが見えた。大きな旋回半径の僚機に敵機が鋭く切り込んで行く。真後ろに付いた敵機からばらばらと機銃が撃たれている。その後ろに、

もう一機の敵機が真後ろについていないのにも関わらず、機銃の曳航弾が僚機に放たれていた。

《あれは……？》

そう思った刹那、空戦に見とれて地面が近づいたのを忘れ、どんとしたたかに地面に落ちて転がった。受身を忘れたリックは右足を捻ってしまった。痛みの走る足を引きずって、再び上空を見上げると、最後の僚機が火を噴いて片翼が折れ、くると落下していた。《無線を入れる暇もなかった……》

リックは痛む足を引きずりながら、南へモンゴルの草原を歩き始めた。

《話が違う！ 俺たちは騙されたんだ……》

敗れたリックにモンゴルの風は乾いていた。一時金五百ドル、月給六百ドル、これは日本人の平均年収に当たるほどの高額だと言う。さらに一機落とせば一機につき報奨金五百ドル。義勇軍退役後は五百ドルの退職金と元の階級で空軍復帰と言う条件だった。だが、前線に着くや否や、部下二十五名が初陣で撃墜されてしまった。低高度の空戦で、脱出できた仲間が何人いるだろう？

「性能が違いすぎる！ この先何人が生き残れるんだ……」

リックの眩きに失意と絶望が滲み、足の痛みと何処までも続くモンゴルの大地の広がりを目眩がした。

第四話 対ソ戦（後書き）

ノモンハンで勝利した日本はいよいよ南シベリア、チタに進行します。ここはかつて共和国があつて、日本とソ連との緩衝地帯になつていた所ですね。そこからイルクーツを目指すアジア民主連合、第五話は、そんな激動する時代の十六歳のロシアの少女を描きたいと思います。

第五話 その一（前書き）

ソ連軍二千機の反撃が始まります。その中で、ウランウデに住む一人のロシアの少女が、運命に立ち向かい、道を切り開いて行く姿を描きます。

第五話 その一

1 ユリア

丸太小屋が両脇に立ち並ぶ道、所々雪解け水で出来た水溜りが乾くことなく、シベリアの春の雰囲気を醸しだしている。南シベリアの春は遅く短い。小屋の窓は皆小さく頑丈だ。長い冬の間の豪雪に耐えるように、窓枠はどの家も太い。嗜好を凝らした木彫りを窓枠に刻んでいる。どれも同じような小屋の中、飾り立てられる唯一の場所だ。

ユリアは水溜りを除けながら、街の中心部へ向かって歩いている。春とは言え、早朝の空気はまだ冷気を含んでいた。古着のコートの襟を立てた。雪が溶けて春と共にもたらされた噂は、ひそひそと街中で話題のチタに進攻して来たアジア民主連合の事だ。

かつてここ、ウランウデ（ベルフネウジンスク）は長い間ブリヤート共和国の首都だった。つい十年くらい前は極東共和国の首都として日本とロシアの間の中立国だったこともある。今はソ連という共産主義国の一部になってしまった。ソ連になってもっと暗い世の中になってしまった。農民は食べる物も無く飢えているし、町には物資も何も無くて、ガランとしている。人々も元氣無くうつろつくばかりだ。

ソ連と日本を中心としたアジア民主連合が戦争している。だから度々飛行機が街の上空を飛ぶ。ソ連の飛行機が全部負けて、飛んでいるのはアジア民主連合の飛行機ばかりだ。十六歳は、ソ連に負けてほしいと思っている。何か大きな変化が起こって、今の現実世界を壊してほしいと思っていたからだ。

噂では、隣の州都チタで信じられない事が起こっているらしい。アジア民主連合が進駐してきて、飢えが無くなり、病人が癒され、強制労働が消えたと言う。物資がほとんど日本や満州から運ばれて、

物が溢れているようだ。ソ連政府の人達はそんな噂の逆の事を言っている。昨日もチタでは人が沢山殺されていると触れ回った。ビラも配られた。皆兵士になって敵と戦おうと書いてあった。だが、ユリアは違うビラを隠し持っていた。アジア民主連合の飛行機がばら撒いたビラだ。

共にロシア民主国を建国しよう。自由市民になろう！ 搾取と差別の無い国を作ろう！ 働いた分の報酬が得られる国、日曜日は休みの国、ブリヤートの金と毛皮はブリヤートのために！ 暗殺と粛清の独裁者スターリンに従ってはならない！

極東ロシア

民主建国委員会

どちらを信じるか？ それはもう決まっている。ソ連はいつも嘘ばかりつくからだ。ユリアの歩みはいつの間にかゆっくりで、俯き加減になる。小さな水溜りが東の日を受けて、きらきらと小さく輝く。何時の間にか、父母の面影が浮かび、最後の団欒の晩が蘇えた。

あれはユリアの十五歳の誕生日。母が何処から手に入れたのか久しぶりのご馳走を作り、父母の友人達が集まった。愉快的話をしながら暖かい羊のボルチシを食べ終わると、父は暖炉の側でひそひそ友人達と話し始め、ユリアと女達は部屋の隅に集まって、楽しいおしゃべりをしていた。いつもの事だ。夜も更けて話し疲れたのか、ふと男達の会話も女達の会話も偶然同時に途切れた時、突然、ドアを激しく叩く音がした。母の顔色がさっと変わり、父は中腰になって構えた。

「開けないで！」

母が叫ぶように強く言った。

「皆には迷惑は掛けられない」

父の落ち着いた声が響き、父がゆっくりドアを開けた。赤軍の兵

土数人を伴った政治局の人が虚ろな目で立っていた。役人は小声で何か父に言っと、

「ユリア、お父さんとお母さんは用事でちょっと外に出てくる」

父が言っと、母がゆっくり立ち上がり、父と共に出て行つた。母の友人が泣き始め、隣のおじさんが机を拳でどんと叩いた。

「赤軍め！ ゲオルグとエスカテリーナを連れて行きやがった」

ユリアは意味が判らず呆然としていた。

「ユリア！ お父さんもお母さんも捕まっただ。もう帰ってこないぞ」

おじさんにそう言われて、おばさんがユリアを抱いてくれた時、体の力が抜けて涙が溢れた。

「一九三二年から赤軍は狂っただ」

隣のおじさんが話し始めると、ユリアは涙を流しながら皆と一緒に話を聞いた。共産主義国になって、全国の農場は集団農場化され

コルホーズ

た。土地を持つ農家は富農だと酷評されて、粛清の対象となり処刑され、あるいはシベリア奥地の強制労働に連行されてしまう。だが、コルホーズでは生産が上がらない。頑張っても頑張らなくても報酬が皆同じで充分でない。農業の専門家も殆ど粛清されていなくなつてしまつていた所へ、全国で飢饉が発生したのは当然の事だと言つ。驚く事に、政府は翌年用の種までも没収してしまつたのだ。当然、一九三二年から約一年間、餓死者が七百万人に達したそうだ。この街の牛や馬の頭数は半減、羊と山羊は三分の一になった。インテリだった父ゲオルグ・イワノフも、その当時富農の息子だったが、全財産を没収され、この地の集団農場へ送られて来たのだ。

隣近所も皆似たり寄つたりの境遇だった。父と母はモスクワ郊外の親戚と連絡を取り合つて、この街で反政府地下組織の構成員だったのだ。

ユリアは政治局役所の小間使いに雇われた。父母を奪った政府は、その子に責任を感じたのか？ いいや、人民への体面を気にしての

事だ。本来なら学校へ行かせるくらいは政府の責任だろうと言う近所の人の話だ。掃除や水汲み、ゴミ棄てが主な仕事で、読み書きが出来て計算までできるユリアには物足らない仕事だったが、父母の行方を知りたくて、役人達から得る情報が欲しかったから一生懸命働いた。真実を知りたいという気持ちでユリアの勝気で明るい性格を、寡黙な少女に変身させた。

掃除道具が収められた物置部屋があり、その物置は元々会議室用に作られていた。今は廊下に入りのドアが作られ、会議室からのドアは密閉されていた。そこで息を潜めれば、役人達の会話が鍵穴から聞き取れたのだ。会議のある日は決まっていて、毎週月曜日の午前十時からだ。その日は必ず一時間ほど早く役所に行って、仕事をなるべく早く終わらせて置く。会議が始まると、物置でじっと聞き耳を立てた。

そこで、ユリアは母エスカテリーナが処刑された事を知った。声を押し殺して泣いた。手足が痺れるほど体を硬くして耐えた。父は東シベリアの炭鉱で強制労働させられている事が分かった。正確な場所は分からない。震える怒りと悲しさを押さえるために、ユリアは暗記したプーシキンの詩を声を出さずに唱えた。

たとえ人生に欺かれても、悲しまないで、焦らないで
落ち込んだ日に寛いで、信じて、楽しい日はきつと来るから
心には果てが無くて、未来も永遠だけれど、今はいつも鬱
でも、すべては束の間、すべては過去になる。だから、
過ぎ去った日は、きつと懐かしい思い出になるから

ユリアは歩きながら、いつの間にか同じ詩を口ずさんでいた。今
はいつも鬱！ その鬱が時々血が煮えたぎるようにざわついている
のだ。

大西と悦子の第一軍は途中、敵に出くわす事もなくナウシユキイに到達した。モンゴルとの国境の町は南北に流れるセレンゲ河にそって細長く、東岸に街が集中していた。春が来て、まず先に芽吹くのは背の低い草花だ。岸辺は緑に覆われているが、雑木は裸の枝を張り巡らせているだけで、それが少し荒涼とした雰囲気を作っている。近づいて枝を良く見ると、節々に小さな薄黄緑の芽が出ているのだが、木々が装うのはまだ先の事だ。

軍はモンゴルとの国境付近に二個小隊を駐留させると、本隊は街を素通りして北上、河を渡りティータの手前で陣を構えた。上空偵察と斥候によると、敵の機甲師団がティータとバブスキンの間に横たわる北の山脈に潜んでいる事が分かった。敵の勢力は約五万、戦闘車両は新型戦車を含む千両と予想された。

もともと、バイカル湖の東一帯はモンゴル系ブリヤート人の居住地だったところだ。それが十六世紀に、金と毛皮を求めて東進してきたロシア帝国に組み入れられてしまった。ロシア革命後は一九二一年まで、ボルシェヴィキ政府に敵対した反革命政府、白軍の勢力下にあった。白軍の構成は旧ロシア帝国軍、白軍コサックからなっていた。そう言う人々が、ナウシユキイにも隠れ潜んでいて、軍に随伴してきた民主委員会による市民への呼びかけに応じて集まって来ていた。

ナウシユキイのソ連共産党員達は、アジア民主連合の進駐直前に、いつの間にか消えていた。通過してきたどの町もおなじだが、急に枷を外された市民は、最初は疑心暗鬼でうろたえながらも、笑顔を取り戻し始めるのに時間は掛からない。

ノモンハンでアジア民主連合が圧倒的な勝利を収めた後、国境の南、モンゴルは各地で内紛が勃発しているらしい。ソ連の傀儡政権は対応に追われている。アジア民主連合がブリヤートに進駐し、どんな戦いをするかが、モンゴルにとっても大きな意味を持っているのだ。

「大西司令官、空軍の大園司令から連絡書が入りました」

「悦子君、読んでくれないか」

「はい」

セレンゲ河を超えると、ティーダの平原に入った。隠れるような樹木も林も森も無い場所だった。大西はこの平原が終わり、山々が始まるあたりに敵が潜んでいると予想していた。制空権を奪ったアジア民主連合は、平原に布陣しても空から攻撃される事は殆ど無いはずだ。しかし、大園の連絡書には、ソ連の戦爆連合二千機が危険な夜間飛行を実施して、アジア民主連合の軍を空襲可能な所まで押し出しているらしいとの報告だった。

大西は陣を河岸まで後退させ、戦闘車両と砲兵を河岸の雑木林の中に雑木でカモフラージュして、歩兵は草原に散開させて逆八の字を描くように両翼を突出させて、やはり緑のネットでカモフラージュ、蛸壺陣地を構築した。味方の偵察機が上空を飛び、陣地や車両が発見できるかどうか、念をいれて確認させた。逆八の字のほぼ中央部にはタイガー戦車十両、一式戦車二十両を威力偵察部隊として集結させ、九七式対空戦車二十両で取り囲んだ。地雷除去専用一式ブルドーザー五台が随伴する。

「悦子君、第二軍の王仁君らはウランウデに着陣しているね」

「はい、ウランウデには敵は居ないようです。主力百万の歩兵は未だにイルクーツク周辺に展開しているようです」

「うむ、制空権が無ければ無闇に出て来ないということだね」

「はい、大園空軍司令はバイカル湖で敵の航空戦力を叩くおつもりですが、全てとは行かず、必ず討ちもらしがこちらにやって来るから、用心してくれとの伝言です」

「防空体制は打ち合わせ済みの通り、万事抜かりは無いね」

「はい、新型自走砲レーダー照準高射砲五十門が配置済みです。例の特殊対空用砲弾も準備完了です」

「うむ。では威力偵察部隊で山岳裾野を走行させて、敵の正確な位置を掴むことにしよう」

大西が副官を強く見つめると、副官は無線マイクを取った。
「作戦イ発動！」

タイガー戦車十両を戦闘にして威力偵察部隊がティードの荒野を進撃している頃、上空一万メートルで高高度偵察を続ける晴空偵察部隊の最前線きから、チタの空軍司令部の大園へ、敵の大編隊がバイカル湖に向かってしていると連絡が入った。間もなく、前線の山岳地帯に設置されたリーダー基地からも刻々と敵大編隊の接近を知らせる。

大園は各地に分散した迎撃機すべてを、バイカル湖上空に集めるように発進させた。自らも再び晴空高高度指揮官機に搭乗し、上空から情報を集めるために離陸する。徐々に敵編隊の陣容がはっきりしてくる。SB爆撃機千機、米国B17爆撃機二百機、ソ連新型戦闘機Yak 1が六百機、米国P40戦闘機二百機が各々幾つかの編隊を組んでいる。それに対して味方の迎撃機は約八百機だ。

大西は事前に察知した敵の機種と編隊に応じて、機内テール一杯に広がる大きな固定地図の上に敵機数と予想高度を記入し、担当迎撃隊を隊長別に決めて行く。それを副官が無線で予め決められた記号を読み上げて決定して行く。

「敵戦闘集団、SB約千機。編隊は四組に分かれて東進中。随伴護衛戦闘機は約五百機のYak 1と思われます。進入高度は爆撃隊が五千メートル。護衛戦闘機は爆撃隊より五百から千メートル上空を飛行中。バイカル湖到着時間は約一時間後」

「零戦と隼は打ち合わせ通り、各護衛戦闘機に当れ！ 高高度偵察隊は逐次戦況を報告せよ」

零戦の坂井隊長鶴嶋隊五十機と菅野隊長示現隊五十機は高度七千メートルでバイカル湖を越えて西進する。加藤隊長の隼隊百機も高度五千メートルを二つに分かれて少し先行していた。上空一万メートルにも晴空偵察部隊の一機が随伴して、刻々と敵の編隊の動向を

無線で伝えてきていた。隼隊の役目は敵戦闘機をSB爆撃隊から引き離す事だ。敵戦闘機は新型のYak 1と予想されている。水冷千五十馬力、最大速度時速五百七十キロと高速を誇り、プロペラ軸線に二十ミリ機銃一丁、機首に七・六七ミリ機銃二丁を装備している。自重が二・四トンを超え翼長も短い事から、急降下特性の優れた機体であると想像された。航続距離が六百五十キロしかなく、増加タンクを追加したとしても、零戦の三千三百キロと比較すると、戦場での滞空時間はおそらく短いだろうと思われた。零戦も隼も速度は四十キロ以上早く、武装も強力だ。だが、今回の敵はスペイン内乱時のベテランパイロットが多く居るはず。ノモンハンのようには行かないかも知れないと、緻密で組織的な編隊戦術が前もって決められていた。

「こちら晴空偵察十番機、このまま西進するとイルクーツク西七十二キロのラズドイエ近郊上空で会敵予定。敵戦闘機隊は高度約六千メートル、敵爆撃機隊は約五千メートル、五つの編隊で各々約百機で飛行中」

「こちら隼隊、了解」

「こちら零戦隊、了解」

加藤隊長率いる隼隊が五十機ずつの二編隊に分かれて加速する。

「隼全隊に告ぐ。第一目標は敵SB爆撃機。敵は二百機単位の五編隊だ。進路上で正対攻撃できる編隊だけを狙え！ 敵戦闘機が上から被さってくる頃が要点だ。各機、ばらばらに急降下で低空へ誘え。爆撃機はそのまま後の味方に任せろ」

加藤隊長は口髭を生やし、爛々とした武士のような鋭い目線で前方を凝視する。河に沿って広がる湿地帯が広がり、左手には緩い起伏が続き、遙か彼方の山脈まで少しずつ標高を上げて行く。晴れていても、湿地から立ち昇る水分が空気に含まれ、視界は微かにぼやける。加藤は前方に空気をぶらすような気配を感じた。

「敵編隊発見！ 編隊を崩すな！ 機銃試射！ エンジン全開！」

SB爆撃機の編隊がゴマ粒のように見えてきた。その上空には敵

戦闘機が居るが、まだ気づいていない。爆撃機との距離が二千メートルになった時、戦闘機群が動き始めた。

「遅い」

加藤はそう呟くと、前方の先頭集団百機の正面に隼隊五十機を導く。第二群五十機も右に平行して同じように飛ぶ。正対しているので相対速度は時速千キロにも及ぶ。加藤が前方固定機銃十二・七ミリ四丁を放つ。全機合計二百丁の曳航弾が光りの粒になってSBを取り巻く。敵の機銃も光り始めた。敵正面直前で、加藤は操縦棒の前に倒し、敵編隊の下にもぐり込む。刹那、風防上の二十ミリ斜銃照準器を見上げながら僅かなロールで捕らえて引き金を押す。編隊通過中、三機を斜銃が捕らえた。戦果を確認する間は無。次の編隊が前方僅か左方に迫る。素早く左に旋回、軸線を捕らえて再び正対する。一瞬後ろを振り返る。最初の編隊から幾つもの黒煙が下に向かって伸びている。だが、爆撃機撃墜はおまけだ。本番はこれからだ。

二番目の編隊を通り抜けて、加藤は上空を見上げる。敵戦闘機が上空千メートルの所を急降下して来ていた。

「全機二機一組で散開、急降下！」

加藤は叫ぶとエンジン全開のまま急降下に入れる。後ろを振り返ると、敵戦闘機が追って来るが、隼の急降下速度にはついてこれない。こちらがばらけたので、敵も編隊を崩している。高度が三千を切った。頃合だ、扇状に散開急降下した隼全機が、左へ大きな円を描きながら旋回し機首を上げ始める。急降下の速度を利用しての巴戦への誘いだ。その軌跡を追うようにはばらと敵機が食いついて来た。隼は旋回の半径をじわじわと詰めて行く。速度も速く、旋回半径も小さく切れ込んでゆく。敵の後ろを捉えるのに時間は掛からない。

最初の一機が火を噴いた。そこを横切るように、もう一機が飛び込んでくる。追跡すると旋回を始めた。水平旋回で必死になって逃れようとしている。僚機の山田機から斜銃が放たれ、機体が飛び散

った。下を別の敵機が腹を向けて通り過ぎる。味方機の誰かがそれを追う。

巴戦に巻き込まれたと悟った敵機は、半数以上が急降下で逃げようとした。それを隼が更なる急降下速度で追う。地表近くで幾つもの煙と火が見えた。逃げた敵も多い。半分は逃げたかもしれない。

「こちら晴空偵察十番機、敵戦闘機約半数二百五十機が隼隊を追跡。その内百機は西に逃走中。S B爆撃機は四編隊が編隊を崩すも、爆撃機撃墜数は約二百機。また、護衛戦闘機二百五十機が爆撃機上空五千五百メートルにあり」

「隼隊もやるな」

零戦の鵠鵠隊五十機を率いている坂井が呟いた。

「零戦隊、只今敵編隊上空七千メートルに到達。これより直上方攻撃開始」

坂井はそう言うと、機体をくると背面飛行にいて、風防の真上の敵編隊を睨みながら操縦棒を引いた。敵戦闘機が上昇機動に入るのが見えた。

「零戦隊全機に告ぐ。二機で一機の敵戦闘機に集中しろ！ 爆撃機には目もくれるな！ 軸線合わせを忘れるな！ 二刀流だ」

零戦の急降下速度は七百キロにも達する。機体の振動も無く、操縦の利きも良い。敵はイワシのようなYak 1だ。操縦が難しいと噂されている。坂井は距離千メートルで七・七ミリ二丁を放つ。射程距離が長く弾道も安定しているからだ。これで相手の動向を知る。その動きから予想して距離三百で二十ミリ二門を放つ。先頭機が火を吹いた。刹那、敵編隊の下に潜りこみ、軸線を合わせてロールで風防前上の照準器を敵機が通過するように、二十ミリ斜銃二門の引き金を数秒ずつ引く。編隊を抜けると即座に左旋回、反転して敵機を探す。後に続く僚機が次々と敵機を撃墜する光景が飛び込んてくる。己の撃墜を確認する暇は無い。だが、対抗戦ですでに半数は撃墜したと思った。目の前にふらふらと敵機が飛び込んでくる。

二機一組の坂井の僚機が背面飛行で坂井の風防の上に見える。距離は三百だ。そのまま二機で一機を追う。僚機の曳航弾が光った。敵機は翼が折れてきり揉みに入る。

急降下で逃げても零戦が追う。低空に到達する前に大半が追いつかれて火を噴いた。逃れたYak 1を低空で待っていたのは隼隊だった。

「零戦隊、敵戦闘機二百機を撃墜。残り五十機は低空で隼隊が撃墜した模様」

「よし、こちら大園、零戦・隼は全機基地へ帰還せよ。燃料と弾薬を補給後、上空で次の指令を待て」

敵のSB爆撃機は八百機が無傷でバイカル湖上空に達していた。だが、護衛戦闘機Yak-1はほぼ壊滅した。

第五話 その二（前書き）

三章『フルシチヨフ』と四章『ユリア、チタヘ』をお届けします。
フルシチヨフは極東ロシア民主国建国の鍵を握る人物。ユリアは王
仁と出会います。

第五話 その二

3・フルシチヨフ

イルクーツクの地下司令部、チェイコフ將軍の額に青筋が浮かぶ。湿って淀んだ空気がなおさら重くなるような陰気な顔だ。落ち窪んだ目が、机の上の報告書にせわしなく注がれる。小さな驚鼻と薄い唇が冷酷な感じを与え、短く刈られた銀髪がしな垂れて、実際の歳より老けた印象を与える。

フルシチヨフ政治局員は、己より五歳も若いこのチェイコフ將軍のお守り役として、スターリンより派遣された。四十歳で極東派遣赤軍百万人の頂点に立つ男の監視役なのだ。

「同志フルシチヨフ、バイカル湖の手前で最新鋭の戦闘機 Yak 1 の大半をやられたようだ。だが、爆撃機の被害は軽微らしい。そのままテイダに向かっている」

チェイコフはそう言うのと、慌しく次ぎの書類に目を通す。

「ところで、イルクーツク周辺に展開する百万人の軍隊を養う物資が無い！」

「補給はどうなっているのですか、同志チェイコフ」

フルシチヨフは分かりきった質問をした。西からのシベリア鉄道補給路をアジア民主連合の爆撃でずたにされていて、夜間の陸上トラック輸送でしのいできたが、すでに食料は尽き始めていた。

机の電話が鳴り、地下司令部のコンクリートの壁に呼び出し音が煩く響いた。

「同志スターリン、丁度良い時に電話をいただきました。我が戦闘機隊が敵の迎撃戦闘機を引き付けて、味方爆撃隊約八百機がバイカル湖上空に到達するところです。あ、はい、今のところ大きな損害の報告は届いていません。同志スターリン、それよりも食料補給の件ですが……」

チエイコフは椅子から立ち上がり、真剣な表情で電話の先のスターリンと話している。

「はっ、そう言うことであれば、現地調達しか無いと言う事になります」

フルシチョフは天井を仰ぎ、ゆっくりと視線を床に落とした。こめかみを右手で押さえて、スターリンの嫌な指示を予想した。電話を切ったチエイコフに水を向けてみる。

「同志チエイコフ、市民と農民から食料を調達しろという事ですな」
チエイコフはフルシチョフをちらつと睨み、再び受話器を取りあげた。ちよつと待て。何も言わないでくれと言っているのだ。相手が出るまでの間、受話器を耳に当てながら、

「この戦いに負ければ、この地もアジア民主連合の物になってしまふ。勝てば軍の補給が届いたら返すまでさ」

「それまで、市民も農民も何を食べるのだ？」

チエイコフはにやりと笑う。

「同志フルシチョフ、市民も農民もどこかに必ず食料を隠しているものさ」

「長期戦になればそれも尽きる。尽きた後のことも考えたまえ」

チエイコフの顔色が変わる。土気色だ。

「相手の倍、百万の赤軍と二千機の航空戦力が負けるといふのかね？」

「すでに戦闘機の大半を失ったのでは？」

「航空戦での事だ。総力戦では負けない。それに長期戦になればロシアの冬將軍がやってくるさ」

フルシチョフは長期戦になれば、人民が反乱するだろうと言おうとして口をつぐんだ。胸のどこかに小さな痛みがある。頭の中で、スターリンのためにこれまで戦って来た己を振り返る。形振り構わず、人民の平等を求めて……。気が付くと、己はスターリンの信任厚い政治局員にまで出世したが、愛する妻は故郷で餓死していた。己の妻だけではない。餓死者数は七百万人。粛清されて死刑になっ

た人は三十万人、シベリアへ強制労働のために送られたのは一千万人。この事実を正確に数字で知る人間は殆ど居ない。重くなった体の力が徐々に抜けて行く。チェイコフは電話に出た相手に威圧的に言った。

「同士ウラジミール君、イルクーツク周辺の市民・農民から食料を供出させなさい。赤軍百万人が飢えては困るからね。分かっているだろうが、家捜ししても供出させるのだよ」

電話で指示を与えるチェイコフは、顔に暗い影が差して陰気さが不気味さに変わる。フルシチョフは一刻も早く、この淀んだ空気の元凶とも思えるチェイコフから離れたいと思った。

地下司令室を出ると、春風が庁舎前広場の若葉をつけた木立を揺らす。春だと言うのに人影が無く、春風の穏やかさが虚しい。だが、フルシチョフにとっては、あの地下司令室の空気に比べれば、外の風は天国に匹敵するほど甘く優しい。

上空を轟音と共に大きな影が通り過ぎる。一機の友軍爆撃機が敵のずんぐりした戦闘機に追われている。友軍機は高度を上げて逃げようとした。食い下がる敵戦闘機の翼から、大砲のような大きな連続発射音が響くと、友軍の爆撃機はフルシチョフの見上げる上空で爆発した。飛び散った破片が春風に流されて遠くに落ちて行く。

《航空戦力は圧倒的な強さと言う噂は本当らしい。とすれば、ノモンハンでの味方陸軍の完全敗北も本場で、政府発表は信じられないと言う事だ》

政府発表とは、ノモンハンのジェーコフ司令官が、裏切つて敵に投降したと言う話だった。逆に噂は戦車も航空機も全く歯が立たず、敵は一兵も損失せずに、味方は兵の半数を失つて完全に敗北したと言う。国外の情報が入り難いソ連にあつて、フルシチョフは政治局員の立场上、多くの情報に接することが出来た。そう言う情報を国家に有利なように捻じ曲げて捏造し、人民に伝える事も仕事だったからだ。

アジア民主連合の中心的な国、日本の天皇の人間宣言を知ったとき、フルシチョフは心の芯から震えた。王が民のために民になる。そんなことはありえないと思った。貴族制を廃止して貧民のための政党を作り、国政に参加させるなど……、御伽噺のでっち上げだと思った。だが、チタに彼らがやって来てから、チタで一体何が起ったと言うのだ。進駐して来て、たった一ヶ月でチタが別の国になったという噂。人民が笑顔で生き生きとし、物が溢れ、貧困が消えたなんて信じられない。これが本当なら、己の共産主義に掛けてきた二十年以上の人生は一体？

フルシチョフは、目を掛けている腹心の若者、セルゲイを思い出し、彼のアパートへ歩き始めていた。

《セルゲイに頼もう。実際にチタに行ってもらい、純な若者セルゲイの目でチタを見てもらおう》

そう思いつくと、気分が少し軽くなったような気がして、あの地下室の嫌な不気味さを、しばし忘れる事ができた。

4・ユリア、チタへ

アジア民主連合の機械化部隊がウランウデに進攻してくると言う噂が流れると、ユリアが勤めていた政治局事務所の共産党員はいち早く消えていなくなった。きつと西のイルクーツクへ逃げて行ったのだろう。共産党員が居なくなると、町の人々はどこからかトラックを用意して来て、売る物を次々、荷台に積み込み始めた。それが一台、二台と徐々に増えて三十数台になる。家財道具や僅かに蓄えた物をチタに売りに行くのだ。そうしなければ、飢えをしのぐことが出来ない。ユリアも僅かな父母の形見や売れそうな物を携えて、一台のトラックに乗せてもらい、チタに行くことにした。

トラックの荷物の狭間に入り込むと、重ねられた荷物と荷物の隙間から若い男が見えた。同じようにうずくまっついていて、目があった。痩せた顔に青い目がきょろりとして愛嬌のある笑顔だ。金髪が風に

揺れている。

「お嬢さんもチタに行くのかい？」

「ええ、あなたも？」

「ああ、チタの噂を確かめたくてさ」

二十歳位の男は手を荷物の隙間に差し入れ、ユリアの目の前で手のひらを広げた。ミルクキャンデーが一粒乗っている。

「食べなよ、美味しいよ」

男の声がした。ユリアはキャンデーを取り、包みを解いて頬張る。甘いミルクの味が広がり、少しずつとろける。甘いものなど、もう何年の味わったことが無いような気がした。隙間から涼しげな笑顔が見えた。

「美味しい。ありがとう」

「甘いものは珍しいだろう？ 僕はこれ売りに行くんだ」

「こんな珍しい物、何処で手に入れたの？」

トラックの隊列は川沿いの道をシベリア鉄道に沿って東に向かって進んでいた。揺れながら悪戯っぽい目がユリアを見つめる。

「貰いものだよ。カバン一杯に持って来た。一個いくらで売れば良いかな？」

「そうね、まずはチタの相場を調べて、それから値決めすれば良いわ。貰ったのだから仕入値はタダ、相場より少し安くすればきっといくらでも売れるわよ」

ユリアが淀みなく言うと、若い男は目を見開いてユリアを見つめ返している。

「君は何を売りに行くの？」

「たいした物は無いの。着る物や小物が少しよ。それより、私の目的はお父さん探しなの」

男は細い顎を少し上げて、目を細めて空を見上げた。横顔は華奢で端正だけれど、真面目な印象が伝わってきた。

「僕はセルゲイ、君の名は？」

「ユリアよ」

「ねえ、ユリア。良かったらキャンデーを売るのを手伝ってくれないか？　きつと僕が売るより、君が売ったほうが、売れると思うんだ。儲けは山分けで構わないよ」

「ずいぶん良い条件ね。でも、私がキャンデーを売っている間、あなたは何かをするの？」

セルゲイは微笑んだ。

「君のお父さん探しを手伝うよ。きつとそっちの方が僕に向いている。僕の本当の目的もチタで何が起きているかを調べる事なんだ」
トラックがガタンと揺れ、荷台に春の穏やかな風が吹き込んできた。荷物が少しずれて、二人の間の狭間が少し大きくなる。セルゲイの顔は優しくなった。ユリアの胸の中で、小さな不安が一つ消えてゆく。父親探しを手伝ってくれる人が居るなんて、驚きと嬉しさが同時に湧き上がってくる。でも、チタで調べる目的を持ったこの人は一体、何者なんだろうという疑念もあるけれど、条件は悪くないと思った。

「そうね。組んでも良いわ。でも、一つだけ条件がある」

セルゲイは少し訝しげな表情を浮かべるが、ユリアは微笑んで言った。

「チタはきつと、乱れているかも知れないわ。だから、あなたは私のボディガードもしてほしいの」

セルゲイは大きな笑い声を上げ、

「良いとも。君を守る役目も引き受けた！」

セルゲイは再び荷物の狭間に手をつ込み、ユリアとの握手を求めてきた。ユリアの小さな手が包まれ、セルゲイの優しい力がしっかり伝わってきた。そういえば十六歳のユリアにとって、たった一人で遠くに行くなんて、初めての経験なのだ。そこにセルゲイが現れてくれた。同じ目的地を目指し、お互い智慧を絞って協力できることに小さな勇気が湧き、胸の内に春の風が吹き抜けるような気がした。

左手に河を見ながらしばらく東に行くと、川向こうにソ連軍の空港が見えてくる。ウランウデの街から東へ十キロ弱のところだ。ソ連機はアジア民主連合に殆どやられて、この空港も軍隊はほとんどイルクーツクの西に引き上げたらしい。少数の守備隊が残っているが、飛行機が一機も無くて灰色の滑走路が東西に長く走り、がらんとしている。アジア民主連合が進軍してくるとすれば、まずはこの空港に進攻してくるだろうと言われていたが、ソ連軍は空軍力で対抗できないので、放棄したのだと噂されていた。アジア民主連合の戦闘機が時折偵察に飛んできて、空港の具合を調べているが、自分たちが使いたいのだろう、爆弾が落とされることは無かった。

ユリア達のトラックが通りかかると、突然、空港のゲートが開き、軍用トラックと装甲車が橋を越えてこちらに向かってくる。装甲車が一番後ろのトラックに乗っていたユリア達を追い越して、トラックの先頭車を目指した。するとトラックの列が止まった。トラックの荷物の上にユリアとセルゲイは身を乗り出して先頭車を見ると、軍用トラックから兵士が飛び降りて、銃をかざし、叫びながら走ってくる。

「荷台に乗っている者は皆降りろ！ このトラックはソ連赤軍が徴用する！ 荷物はそのままにして降りろ！」

空に向かって銃が撃たれ、威嚇が始まった。それぞれのトラックから民間人が、のそりと降り始めた。ユリアもセルゲイに手を引かれて荷台から降りた。ユリアの胸に暗い気持ち湧き上がり、顔に表してはいけない怒りが指を曲げ、拳が強く握り締められた。

「逆らうと、スパイとしてこの場で処刑するぞ！」

にやにやしながら赤軍兵士がさらに脅しの言葉を発した。

「赤軍は泥棒までするの！」

ユリアはこらえきれずに叫んでしまった。兵士がぎょろりとユリアを見つめるが、ユリアの若さを見くびって、

「子供は黙っている！」

と、にやにや笑いながら言う。横に立つセルゲイが言い返す。

「誰の命令なんだ？」

「イルクーツクのチェイコフ総司令官の命令だ。赤軍百万の兵を養うための徴用だ。軍令手形も発行される。民間人は全て強力しなければならんぞ。このトラック隊はすべて向きを変えて、東空港へ荷物を届けるのだ。逆らえば銃殺にして良いという命令だ」

「なんてひどい軍隊なんだ、赤軍は！ 国民を虐げて恥ずかしくないのか？」

セルゲイが怒気を含んで叫ぶと、兵士は銃を空に向けて発射した。ユリアの体がびくつとすると、セルゲイが落ち着いてユリアを隠すように前に立ちはだかった。

黒い影がさつと地面を走る。空を見上げるとアジア民主連合の戦闘機が二機、降下してきて地面すれすれに轟音を響かせて飛んで行った。兵士達にはやけた表情を一変させて、トラックの下にうずくまった。戦闘機は川向こうで旋回して、再びトラック隊に向かってくる。慌てた兵士達は軍用トラックに走り戻る。

戦闘機は三度ほどトラック隊を低空で往復すると、東へ飛び去って行った。ユリアとセルゲイは再びトラックの荷台に登り、先頭の方を窺う。赤軍の装甲車とトラックが一目散に走って来る。トラック列の先には、戦車が何十両も土煙を上げてこちらに向かってくるのが見えた。あれはアジア民主連合の機械化部隊の先発隊なのだろう。赤軍のトラックが通過したとき、後ろの荷台にさっきの兵士が青い顔をしてうずくまって腰掛けているのが見えた。赤軍トラックは河の橋を渡り、東空港へ逃げてゆく。ユリア達の前を戦車三両が赤軍を追いかけに行く。戦車の砲塔から、走りながらしゅるしゅると煙を吐きながら砲弾が放たれた。一発は赤軍の装甲車の前に落ち、トラックの両脇にもそれぞれ着弾すると、閃光が見えて大きな爆発音が響く。装甲車に火がついて止まり、道を塞ぐ。トラックも急停車して、ばらばらと兵士が飛び出してきて、反撃するどころか一発も打ち返さずに丘の向こうへ一目散に逃げて行く。それを追って、戦車から機関銃が発射される。戦車はそのまま、下り降りるように

橋を渡り追いかけて行く。

トラック隊の脇を一行に戦車が通り過ぎる。戦車の列が延々と続き、その後には歩兵を満載した大型トラックが何処までも続いているように見えた。最後の戦車がユリアのトラックの道脇に止まり、砲塔のハッチが開いて、東洋人が一人出てきた。後続のトラックを先に行かせるように指示しながら、後から来た一台の装甲車を止めると、年配のロシア系の男が降りて、東洋人と一緒にユリアのトラックに歩いてきた。

東洋系の男が何か喋ると、ロシア系の男が通訳した。

「こんにちは、お嬢さん。お嬢さんたちは何処に何をしに行くのですか？」

「チタに物を売りに行くのよ。私はお父さん探しもしたいの」

東洋系の男は自分を「ワニ（王仁）」と名乗り、アジア民主連合の参謀だと言った。

同じ質問をセルゲイにもした。セルゲイは驚くような事を言った。「僕の名前はセルゲイ。ソ連共産党政治局員のフルシチョフに頼まれて、チタを視察に行くのです」

王仁と言う男は晴れやかな笑みを浮かべるとセルゲイに言った。

「チタの何を見たいのかね？」

セルゲイも微笑んで真面目に答える。

「アジア民主連合がソ連の民衆を幸せにしているかどうか？ それを知りたいんだ」

王仁は大きな笑い声を上げ、天を見上げた。セルゲイもつられて微笑んでいる。ユリアはその笑い声に快さを感じた。セルゲイの言った質問はユリアも確かめたいと思っていたからだ。そして、ソ連共産党の中にも同じ事を考えている人が、フルシチョフのような人がまだ残っている事に、小さな希望のような暖かい気持ちに湧き上がる。

「セルゲイ君、君は私と一緒にチタに行こう。トラックでは時間が掛かりすぎる。私が飛行機をあそこに見える飛行場に呼ぶから、飛

行機で行こうじゃないか」

「嬉しいお誘いですが、実は先ほど、この女性のボディガードになると約束してしまいました。約束を破る訳には行かないので、僕はトラックで彼女と一緒にチタにまいります」

セルゲイはユリアを見つめながら言う。ユリアはなぜか頬が赤くなるような気がした。

「なるほど。約束なら仕方ないね。でも……。お嬢さん！ ユリアさんか、あなたのお父さんのお名前は？」

王仁は何か考えがあるのか、涼しげな黒い瞳をユリアに向ける。
「ゲオルグ・イワノフと言います。年は四十歳。もともとウランウデの集団農場で働いていました。昨年、反政府活動で父母とも一緒に検挙されて、母は処刑され、父は東シベリアのどこかで強制労働されているはずなのです」

ユリアの顔に静かな影が差した。セルゲイの顔も曇った。

「ユリアさん。今、東シベリアで強制労働させられていた人々ほとんどん開放されている。私が軍の組織を使って調べてあげよう。だからユリアさんも一緒に飛行機でチタに行こう。セルゲイ君、これならどうだね」

「はい、ユリアさえよければボディガードの僕は願ったりです」

セルゲイと王仁がユリアの顔を覗き込む。静かな影が徐々に薄れ、ユリアはセルゲイの青い目と王仁の黒い瞳を順に見て言った。

「悪いお誘いではないみたいです。今日はどうも、幸運を運んでくれる二人の大事な人に出会えたようでうれしいです」

ユリアの大人びた言いように、セルゲイも王仁も満面の笑みを浮かべる。王仁は装甲車に戻ると、無線機を取り出す。フルシチョフの名前とユリアの父の名前が何度か聞き取れた。

第五話 その三 バイカル湖空中戦

5. バイカル湖上空

バイカル湖上空一万メートルを飛行する晴空特別偵察機の中で、大園は戦況を確認しつつ、進撃してくるSB爆撃機約八百機へ迎撃隊を誘導していた。敵のYak-1戦闘機群を蹴散らした見方の零戦と隼隊は弾薬と燃料補給のためにチタに引き返した。

迎撃の第二陣は高度六千を飛行する天空爆撃機二十四機。敵のSBは百機ずつ八個の編隊を組んで東進してくる。天空はその各々に三機一組で、やはり八個の編隊を組んで北から接近、敵編隊の上空から爆撃機による爆撃機の攻撃を仕掛ける手はずになっていた。編隊指揮は大園が上空の晴空から無線で取る。

レーダーと機内地図を相互に見ながら、大園は三機ずつの編隊長に指示を出す。敵のSB爆撃機は液冷九百六十馬力の双発で最大速度は時速四百五十キロ、武装は七・七ミリ機銃六門だ。天空は火星二十一型改がついに二千馬力を達成し、過給器を備えた上に四発で、二十ミリ旋回機銃五門、七・七ミリ機銃三門の重武装で最大速度五百五十キロを誇った。百キロの速度差があれば、接敵するのは容易い。

天空の第一編隊三機が最前列のSB編隊百機の上空千メートルに右旋回しながら近づいて行く。天空の先頭機に乗り込んだ岡田等中尉は空対空噴進砲に関する技術将校だった。天空の操縦席下方には小型レーダーと爆撃照準器が連動されて設置されている。その前には二十ミリ動力旋回機関砲のかわりに、空対空・空対地特殊百ミリ噴進砲一門が装備され、岡田中尉の指示の下に射手山本上飛曹が射撃準備に追われていた。

噴進弾誘導技術の魁として、日本が最も力を入れたのは近接信管技術だ。レーダーの開発途上で生まれてきたこの技術は、砲弾が敵

目標の十五メートルに近づくと信管が作動し爆発する。小型レーダーが砲弾一つ一つに埋め込まれているのだ。王仁の示唆による電子技術への開発が進んだ事により、信頼性の薄い真空管に変わって生まれた半導体、ダイオードやトランジスタの技術が小型レーダーを可能にした。レーダーと言っても、敵機が近づいてくる距離を音波のドップラー効果によって測定する検波器としてのダイオード、その検波された音波をフィルターに掛ける回路と、フィルターによって得られる一定以上の周波数になったら大電流を放出するサイリスタの基本三部品からなる。他にも電力を供給する砲弾の先端に付けられた風車と集音マイクや、サイリスタ回路に付けられた可変抵抗器があるが、部品も構造も単純なものだ。

岡田中尉がレーダーに映る敵編隊の先頭に標準を合わせると、動力式百ミリ噴進砲がジジツと動き始めて、ゴマ粒のように前方下方に見えてきた敵編隊の方向へ、砲身を向けて静かに敵を追うように動いている。双方の速度が計測され、見越し射点に砲を打ち込めるように自動的に照準されているのだ。

「山本上飛曹、最初の一発は俺に打たせてくれるか？」

「ええ、中尉のこれまでの努力を考えたら、実戦第一発は中尉に引き金を引いてもらいます」

「ありがとう」

山本は射手席を立ち、岡田に譲った。岡田は射手席に着くと、照準器を正面千メートル下を正対して迫ってくる敵先頭編隊にあわせる。

「距離三千メートル、安全装置解除」

岡田が安全装置を外す。

「距離二千、照準固定！」

「距離千五百、発射！」

「発射」

岡田が引き金を引くと同時に叫んだ。前方に白い煙を吐きながら空対空噴進弾が放たれ、敵の先頭編隊百機の先頭付近に飛んで行く。

数秒の後、敵編隊上空百五十メートルで近接信管が作動して炸裂、噴進弾は子爆弾七十六個が下方に蛸の足のように広がる。一つの子爆弾は四百グラムの焼夷弾が後尾の四羽の取り付け角度に応じて、編隊を上から取り囲み、覆いかぶさるように降った。夕弾と通称される親子爆弾（クラスター爆弾）の実戦使用第一撃だ。

その時、天空の機体が凄まじい細かい振動と発射音が襲った。爆弾倉に備え付けられた十二・七ミリ機銃百丁の斜め銃が一斉に下を通過する敵編隊に放たれたのだ。岡田は席を立つと、後部銃座の観察窓に走った。戦果を確認する事も仕事だ。後部銃座には山本の同僚、池田上飛曹が啞然とした顔つきで、天空の通り過ぎた下方を見つめていた。

「池田、どうだ、戦果は！」

池田は我に帰り、報告する。

「はっ！ 当機の夕弾により被弾した敵爆撃機は二十数機、内、撃墜確実は十五機です。爆弾倉斜銃による撃墜は天空の進行経路上にあった五機全てが撃墜あるいは撃破です。また両機もそれぞれ左右の空域で同じ敵編隊を同様に撃墜しました。夕弾による撃破合計は六十数機、斜銃による撃墜は十五機、総合計は七十五機です。岡田中尉！ あれをご覧下さい。火を噴いて落ちてゆくのが夕弾による撃墜機で、十数の煙は斜銃により、空中分解したものです」

岡田は天空が通り過ぎた下方空域に身を乗り出して、銃座の風防に顔を擦り付けるように見た。行く筋もの煙が地に向かい、火災を発生して高度を落とす敵SBが十数機みえた。攻撃を免れて飛行するSBは二十七機が数えられた。それを確認した岡田は、今度は中央部の側面銃座の観測窓に走る。たどり着くと、天空の第三編隊が別の編隊百機を攻撃するところだった。

三発の噴進弾が放たれて、敵編隊の上空に三つの蛸足が炸裂する。それに触れると敵のSBが燃え上がった。ソ連の乗員がほとんど外に飛び出してくる。乗員を失ったSBがふらふらと高度を落としてゆくのだ。天空三機から斜銃の光りの雨が下を通過するSBに注が

れる。蜂の巣にされたS Bは翼が折れたり、エンジンが脱落したり、分解してしまう。通り過ぎた機体を数えると、やはり三十機以下に減っていた。岡田は己の体が震えているのを感じた。

「大園指令、天空各編隊より報告。敵S Bの六から七割を撃墜・撃破したのとことです。夕弾の技術将校、岡田大尉の報告も、夕弾は敵編隊に対する空対空兵器として絶大な効果有りと言ってきています」

大園は報告とレーダーに映る影の大きさを見て、その報告が事実なのを知った。

「残存機は二百機強となった訳だな。良し、鍾馗隊の出番だ。会敵位置はバイカル湖上空！」

「はっ！」

指令補佐官の中島中尉は無線機を取って、暗号記号を読み上げた。

二式単座戦闘機鍾馗二型改百機、飛行隊長渡辺啓少尉はバイカル湖上空に到達した。鍾馗隊は五十機ずつ二つに分かれ、第一戦隊は六千メートル、第二戦隊は四千メートルを遊弋、西の空を凝視していた。渡部は左右の両翼から突き出る五式三十三ミリ機関銃を頼もしげにみる。二十ミリの三倍の破壊力を持ち、二十ミリよりも初速が速く、弾道特性に優れた新兵器だ。一丁に六十発、一秒に八から九発発射できる優れもの。対大型機や防御に優れた戦闘機を想定して開発された。それも一式戦隼とは違う速度と上昇力を追求した二式戦鍾馗だから搭載できる代物だ。鍾馗に搭載されているエンジンは八一 九改千八百馬力。最高速度は時速六百九十五キロにも及ぶ。五千メートルまでの上昇力は四分を切る局地迎撃戦闘機だ。機首には対戦闘機用に十二・七ミリ機銃が二丁ある。玉に傷は旋回性が犠牲になっているが、一式戦隼との模擬空戦では、巴戦では惨敗するが、一撃離脱戦では圧倒的な優位を示した。さらにドイツのメッサーシュイミットB f 109との模擬戦では、巴戦、一撃離脱戦、射

撃精度の三点で優位だった。

この鍾馗二型改も今日が初陣だ。渡部は三十ミリ機銃の試射を済まして、大きな反動を感じながら西にSB爆撃機の乱れた編隊を見つけた。

「こちら鍾馗隊長機、敵SBの第一編隊二十数機を発見。第一部隊が上空から第一撃、第二部隊はその間に下方から突き上げる。敵編隊を抜いたら深追いするな。次の敵編隊を索敵する」

無線で各小隊長から了解が入る。渡部は愛機を緩降下に入れた。エンジンが唸りを上げ、速度計の針が飛び跳ねるように加速を伝えてくる。眼下に双発のSB爆撃機の先頭機を照準機が捉えた。距離八百で機首固定機銃の十二・七ミリ二丁を放つ。曳航弾が胴体後部に吸い込まれる。距離三百で三十ミリの引き金を一秒ほど引いた。機体に大きな振動が伝わる。一瞬数発が翼の付け根にあたりが裂けたのが見えた。刹那、SBの右後方を急降下ですり抜けた。機首を少しずつ上げて、後ろを振り返るとSBの翼がゆっくり折れて、機体はきりもみに入った。撃墜だ。ゆっくり上昇しながら部下の戦いぶりを観察する。殆どが一撃で翼を折り、胴体がちぎり、エンジンを吹き飛ばした。五十機の鍾馗の第一部隊が通り過ぎた後に、敵の姿は無かったのだ。

「ようし。第一撃完了。第一部隊はそのまま高度四千まで降下、第二部隊は高度六千まで上昇し、今度は第一撃を担当せよ」

「了解。こちら第二部隊長、長谷川。敵の第二編隊発見。高度約五千、機数約三十機」

第二部隊の先頭機が翼を小さく振り、左へ僅かに機首を向け速度を増して行く。

伝家の宝刀とはこの三十ミリのこと。まだ左右五十発ずつ計百発残っている。一秒で左右合計二十発弱の三十ミリを受けたら、飛んでいられる敵機はいない。敵の第二陣三十機が上空に小さく見え始めた。編隊を固めて小さくなるうとしている。前方上空を行く第二戦隊が先頭機からひらりひらりと背面飛行に入る。直上方攻撃だ。

二機ずつの小隊がそれぞれ目標のＳＢに襲い掛かる。長距離から機首固定の十二・七ミリ二丁の曳航弾が放たれ、それを軸線に機動が僅かに修正される。弾幕を浴びたＳＢの中には火を噴く物もでる。通りすぎる刹那、爆発が編隊のあちこちで起こった。三十ミリを浴びたのだ。四散する残骸がクルクル回りながら落ちて行く。圧倒的な破壊力が空を火と黒煙と破片で一杯にする。

渡部は後続の第三陣を捕らえていた。徐々に高度を上げて攻撃位置に付こうとする。が、第三陣は爆弾をバイカル湖に棄てると編隊を崩し、各々ばらばらに旋回を始めた。前方で起こった二十数機的全滅を見たのだ。恐怖に駆られたＳＢは踵を返して逃走しようとしているのだ。

「第二戦隊は高度を上げて、第四陣に備えよ。第一戦隊は前方の逃走するＳＢを各個撃破。追跡範囲はイルクーツク市上空まで。それ以上は深追いするな」

渡部はそう無線で連絡すると、スロットル前回で降下しながら逃げるＳＢを追った。百五十キロ近い速度差でぐんぐんと接近して行くが、ＳＢも必死に降下して速度を増し、低空に逃げようとする。イルクーツク市に入り、後方二百まで接近すると、焦ったＳＢは上昇右旋回に入った。照準機に翼の付け根が大きく写ったときに、三十ミリを一秒放つ。二十発近い三十ミリが大穴を幾つも開けて機体が翼の付け根で折れたのを確認し、渡部は上昇する。

「隊長、敵の後詰め編隊が上空を通過して行きます」

列機の落合が無線で知らせる。

「よし、高度を上げて下方突き上げで攻撃。第一戦隊は集合！」

渡辺が追跡しようとしていたＳＢの編隊は最後尾の戦隊だ。前には第二戦隊が第四陣を屠って、第五陣に襲い掛かっていた。渡辺の第一戦隊と第二戦隊の間には、五、六、七、八のＳＢがまだ居るのだ。それぞれが前後を挟撃する形になった。

敵の最後尾の編隊を追っていると、第五陣を屠られた第六陣が再び恐れをなして、引き返し逃げて行く。それを追って第二戦隊が低

空を追跡し、次々とS Bを撃墜している。渡部は爆弾を積んで速度が遅いS Bに素早く追いつくと、速度差と馬力を生かした直下方からの突き上げ攻撃を掛ける。一機に対して二機の鍾馗が放つ三十ミリは再び圧倒的な破壊力を見せた。S Bは爆弾をバイカル湖手前で投棄すると逃げ出し始めた。

「こちら渡辺、第八陣は爆弾を投棄して逃走中。第二戦隊は後方低空で迎撃せよ。第一戦隊は前を行く最後の第七陣を追跡」

渡部は再び高度を五千まで上げながら前方の敵、第七陣二十数機を追った。

「こちら晴空指令機、最後の第七陣はバイカル湖上空で進路を南東に転進、ティードに進路を向けた。第一戦隊との距離、約十キロ、約二分四十五秒後に接敵」

渡辺は機首を東南東に向け、スロットルを開けて加速する。千八百馬力の大型エンジンを備えた鍾馗の加速は鋭い。バイカル湖の南の淵を左から右へ向かうS Bの編隊が見えてくる。渡辺は編隊を率いて上昇し、緩く右上昇旋回しながらS Bの編隊を右下千メートルに捕らえた。右にバンクを掛けながら降下する。敵の七・七ミリの曳航弾がパラパラと降り始める。だが急降下で加速した鍾馗に当るはずも無い疎らな攻撃だ。S Bの脇をすり抜ける時に大きな衝撃が機体を揺さぶる。S Bが空中爆発した衝撃だ。渡辺はゆっくり機体を引き起こしに掛かる。上空を見上げると、再び火と黒煙と残骸が空域を染め、S Bから脱出した落下傘の花が見えた。

渡辺は緩く上昇しながら周りを見回す。敵影は消え、鍾馗が飛び交う。完璧な勝利を思う。が、嫌な胸騒ぎがする。渡辺は南東を凝視する。山肌の緑に隠れて小さな影がティードに向かって忍び寄る。小さな影を凝視するとその周りにもっと小さな影の気配があった。距離が大分ある。あの高度ではリーダーには映らない。

「こちら鍾馗隊渡辺、南東方向山岳地帯を低空で飛行する敵の編隊らしきものあり」

渡辺は鍾馗隊に集合を掛けて、全速でティード上空を目指した。

第六話 決戦場ティード

6・決戦場ティード

鍾馗隊隊長の渡辺からの情報はすぐさま、ティード平原の際に展開する大西の機械化部隊に通報された。同時に東に放たれた低空担当の偵察機からもより詳細な情報が悦子に入る。低空侵入の敵は米国義勇軍のB17重爆撃機二百機、それを護衛するP40戦闘機二百機の合計四百機余りだ。それがバイカル湖の南の山岳地帯を迂回しながらティードに向かってきている。後三十分余りで味方陣地の上空に達する。鍾馗隊百機が追跡しているが、P40二百機に護衛されていては、容易にB17を阻む事は難しい。かつ鍾馗隊はすでにSBとの戦闘で燃料弾薬の不安が出てきていた。

「大西司令、敵のB17は確実にやってきます。ご用意を」

「悦子さん。準備は万端さ！ おそらく、敵の空襲に合わせて、敵戦車隊も出てくるだろう。それこそ、千載一遇の機会だ。作戦計画通りにやろう。鍾馗隊には決して陣地上空に近づくなと大園司令に連絡してくれ。同士討ちはごめんだからね」

「はい」

大西は静かな表情に自信を漲らせ、悦子は静かに西の山岳地帯を睨み、無線機を取った。連絡将校が高射砲隊に状況を伝える。本体を取り巻くように配置された自走砲、百ミリ対空対地砲五十門と百五十ミリ隊空対地砲五十門が砲身の仰角を低高度に下げて行く。二十ミリ高射機関砲を備えた九七式戦車も陣地を囲むように散開する。陣地の内外には戦車戦用の戦車が巧妙にカムフラージュされ、五万の歩兵も広く散開して蛸壺にカムフラージュの蓋をして潜んでいる。七十五ミリ歩兵噴進砲千門を持った噴進砲部隊は一門に付き二名で、高射機関砲九七式戦車をさらに大きく囲むように扇形陣を作っていた。

大西と悦子は少し後方の小高い司令部から陣を眺める。連絡将校が前線北北西から敵の戦車部隊が進撃してきたことを告げた。戦車約千二百両、全て新型だと言う。歩兵約三万は今だに、山岳裾野の森林地帯に潜伏している。空爆の直後の攻撃を狙っているのは明らかだ。アジア民主連合の第一軍地上部隊は四百機の敵機と千二百両の戦車を相手にするのだ。対する味方戦力はタイガー戦車百両、一式戦車二百両、九七式対空対地二十ミリ機関砲戦車五十両、砲兵隊は百五十ミリ対空対地自走砲五十両、百ミリ対空対地自走砲五十両、七十五ミリ歩兵噴進砲千門と歩兵五万だ。戦車数からすると明らかに劣勢だが……、大西と悦子の表情は余裕さえ浮かべていた。

速度の速い敵戦闘機P40百機余りが前方の山岳を飛んでくるのを望遠鏡で捕らえられた。砲兵隊が自走砲の迎角を調整して、発射の合図を待っている。測量担当兵が距離を読み上げる。距離一万メートルで二式自走砲の九二式十センチ加農砲五十門が火を噴いた。数秒後、山岳地帯が始まる裾の付近の低空で五十発の弾丸が炸裂、無数の白煙が四方に飛び散る。まるで五十個の投網が空中に投げられたようだ。その白い投網に無数の小さな炎が見えた。投網に飛び込んだできた敵P40戦闘機約百機の編隊上空百五十メートルで、近接信管により親子爆弾が炸裂したのだ。打ち出された砲弾は対空用のタ弾で七十六個の子爆弾が焼夷弾の雨となって敵編隊に覆いかぶさった。合計五十発のタ弾は三百八十個の子爆弾の網となって敵P40の行く手に立ちふさがった。さらに、九六式百五十ミリ榴弾砲五十門が続けて放たれた。こちらにも近接信管が付けられて、無数の榴弾が雨のようにP40に降り注がれ、百機のP40は穴だらけになり、燃え上がり、分解し、あるいは旋回して回避しようとは死になった。編隊を乱してうおさおしているところに、次々とタ弾と榴弾が放たれて、上昇したり、旋回したりしている。タ弾の投網状の弾幕がだんだん味方陣地へ近づいて来た。距離千メートルで、タ弾と榴弾の弾幕が集中して濃密な煙の膜ができた。その煙を突っ切ってくるP40は僅かではばらだ。それを五十両の二十ミリ対空

砲が弹幕を作り始める。一両につき二連装だから百門の二十ミリだ。一機、一機と煙から出てくるP40に、百門の二十ミリが集中運用される。距離五百まで近づくP40は稀だ。だがそこまで幸運だったP40に待っていたのは更なる悪夢だ。七十五ミリ歩兵携帯噴進砲から近接信管付きの夕弾が放たれたのだ。各三組、約三百門が交互に夕弾の弹幕を作り続ける。

ウィリアム・テイベッツ中尉はB17二百機の編隊を指揮していた。敵迎撃戦闘機に対抗するために、本来なら五十機つつ四編隊に別けるところを、それぞれを接近させて二百機が一団となるように密集した編隊を作った。目標まで十五キロのところ、ウィリアムは前方へ先行進出していたP40の第一編隊に異変が起こったことを察知した。無線から意味不明の叫び声が無数に聞こえ始めたからだ。

アジア民主連合が高性能なレーダーを所有し、航空機のパフォーマンスが非常に高かったと判断した米軍義勇軍は、ソ連軍がバイカル湖へ中高度で進撃したことを受けて、低高度でレーダーを避けつつバイカル湖南を迂回するコースを選んだ。義勇軍本部からの情報では、ソ連軍航空機千五百機がバイカル湖上空で壊滅したらしい。ウィリアムはアジア民主連合の無数の迎撃戦闘機を想像した。二倍・三倍以上の機数を揃えなければ、千五百機が一瞬に撃墜される事など考えられないからだ。前方五キロを先行するP40百機に何が起こったのか？　ここまで敵戦闘機の迎撃を免れて、奇襲が出来るかも知れないとほくそ笑んでいた矢先の事だ。きっと、この先には無数の迎撃戦闘機が待ち構えているのかも知れないと想像した。

「隊長、こちら後部銃座、後方右上空三キロに敵戦闘機が追尾して来ています。機数約百機」

ついさっき、迎撃に向かった護衛機P40百機の網を潜り抜けたのか？　あるいは別の敵なのか？　ウィリアムは相当数の迎撃機を敵は備えていると考えた。

「よし、目標までもう少しだ。投弾したら加速して南下、モンゴルに逃げるぞ！ 敵は低速な日本機だろう」

ウィリアムもまた、日本の戦闘機の数値性能を見くびっていた。だが、用心のために、本来ならこの辺から徐々に高度を上げて、対空砲火に備えたいところだが、敵戦闘機に追いつかれた時のことを考えると、低高度を保つほうが得策だと考えた。低高度では戦闘機の機動が制限されるし、速度も落ちるからだ。それに移動性を重視する敵の陸上機動部隊が、十分な高射砲を備えているはずも無いという判断もあった。この判断はこの時点で、兵器常識からすると正しいとしなければならない。

が、目標まで十キロの地点でウィリアムが見た低空で炸裂する弾幕は、誰もが今だかつて見たことも無いものだった。敵の砲弾は正確に正面手前上空百五十メートル付近で炸裂し、無数の白い尾を引く筋が投網のように広がる。ウィリアムの先頭機は運よく投網のど真ん中を進行したため、被弾を免れたが、左右の僚機は被弾して数箇所から火を噴いている。続いて同じように前方で炸裂した砲弾は無数の榴弾を撒き散らし、ウィリアムの操縦席にも数発が飛び込んできた。隣の副操縦士ジョンソンの左肩に食い込む。ウィリアムは旋回して前方に次々にできる弾幕から逃れたい恐怖に駆られた。膝が震え、操縦棒を握る手がびしょり濡れる。ウィリアムは密集隊形の非を悟り、叫んだ

「各機、分散しろ。このままでは全滅だ！」

すでに後続機群は上左右に緩く分散して行く。が、すでに編隊前方部を構成していたB17の半数は、ウィリアムの先頭機を残して撃墜されたようだ。敵の砲火はウィリアムの後方へ移動して行く。それも束の間、ウィリアムの機を無数の曳航弾が包み込む。前方に光りの棒の雨が地上から天に向かって打ち上がるのだ。左エンジンが火を噴く。操縦室にも無数の炸裂が起こり、航法士の絶叫が後ろから聞こえた。ウィリアムは爆弾を棄てるように指示する。緩い下降に居れ、不時着地を探す。この低高度では落下傘脱出は不可能だ。

敵陣の前に広がる草原を目標に、火を噴きつつ高度を下げる。地面効果で機体が少し浮き上がる。さらにエンジンを絞る。機種を僅かに挙げると、尾翼が草原の草を薙ぐのが分かった。刹那、衝撃が襲い、尾翼接地、胴体接地、傾き、燃えた左エンジンが脱落し、左翼が&#25445;げ、ゆっくり横に回転しながら地面を擦り続ける。

目の隅に敵の陣地と戦車が見えたとき、機体が止まった。

「乗員退避、急げ！」

ウィリアムは叫ぶと、ハッチから副操縦士のジョンソンを地面に落とす。航法士は事切れている。地面に降りたウィリアムはジョンソンの肩を支えて、機体から離れた。後部ハッチから乗務員が傷つきながら出てくる。幸い、火災を発生したエンジン部分が胴体着陸の際に脱落し、大きな爆発を免れた。

ジョンソンを草原に寝かして後方を振り返ると、ウィリアムは信じられない光景を見た。ジョンソンの破壊された機体を先頭に、延々と扇方に広がる撃墜された味方機の残骸が無数に目に飛び込んで来たのだ。上空には最後の数機が敵の投網のように広がる対空砲弾幕を潜り抜けてきたのが見えた。が、ウィリアムを襲った光の雨が再び襲い、さらに一回り小さな投網が無数に味方機を取り囲むのを見た。残った友軍の二機は機体から無数の火を噴いて、がくつと機種を下げてウィリアムの目の前で地上に激突した。地上には残骸がまた二つ増えて、空中には硝煙と黒煙が流れ、味方機は何処にも見当たらない。ウィリアムは膝の力が抜け、崩れ落ちるようにしゃがみこむと、両の手を突っ張って、上体をやっと支えた。脳裏に去来したのは米軍の義勇軍四百機全滅という事実、信じられない結果への驚愕と錯乱だった。

悦子は目の前に広がる撃墜された敵機の残骸を見ていた。一つ一つの機体が火を噴き、翼が折れ、地面に激突するのを黒煙の狭間に目撃した。P40戦闘機百機、B17四発重爆撃機二百機は陣地に

到達する前に、完璧に撃墜された。対空用夕弾と近接信管を持つ砲弾、噴進弾の兵器優位がもたらした完全勝利。余りの圧倒的な勝利には、なぜか苦い味がした。無数の砲弾と曳航弾の中を、勇敢にも突き進んで来た敵の乗員の死が哀しいからだ。

こんな時はいつも、王仁の飄々とした姿が思い浮かぶ。

《王仁様ならこの光景をどう感じる？》

だが、戦闘は終わっていない。敵戦車群が迫っていた。硝煙と黒煙が立ち昇る方向へ、おそらく、爆撃が成功したように見えているのかもしれない。新型敵戦車T34千両、米国製M4戦車二百両が土煙を上げて草原の十キロ彼方を疾走して来る。

「大西司令、砲兵隊は対空弾から対地弾への換装完了。歩兵噴進砲部隊も換装完了です」

「悦子さん、敵戦車の主砲射程は二千メートルだったね？」

「はい、T34もM4も七十五ミリ砲ですので、この距離から砲弾を受けてもタイガーも一式中戦車も大丈夫です。タイガーの八十八ミリ主砲は射程三千メートルで装甲七十五ミリを貫通します。T34の最大装甲は五十ミリ、M4は砲塔前面が七十六ミリですが他は五十ミリ平均です」

一式中戦車隊、特に民主ロシア兵と満州兵を中心とした部隊は新型対地夕弾噴進砲の射程距離の関係から、千メートル以内の接近戦を主張して来ていた。だが、悦子はM4戦車の発射速度毎分二十発に注意を喚起していた。これは一式中戦車の発射速度とほぼ互角である。タイガーは毎分七発、T34はそれ以下だと思われた。

「砲兵隊も命中精度を高めるために距離三千が理想と言っています」
「うむ。ノモンハンでも助かったが、今回も敵の砲兵隊は居ないということだ。ではロシア隊と満州隊をT34の前面に出して陽動とし、距離三千まで引き付けて、まずは砲兵隊の砲撃で打撃を与え、その後、タイガーと一式中戦車を進撃させてアウトレンジ戦に持ち込む、いいね」

「はい、新型一式と二式の自走砲それぞれ五十両を距離三千で砲撃

した後、進撃させましょう」

新型自走砲二種は、タイガー戦車のライセンス生産の過程で生まれた新型だ。一式自走砲は五式百五十ミリ榴弾砲を、二式自走砲は九二式十センチ加農砲をそれぞれ、満州で作られたタイガー戦車の車体に取り付けたのだ。この自走砲の登場で、機械化師団に強力な砲撃隊が常に追隨できるようになった。砲弾を取り替えれば、高射砲にもなる多機能移動砲だ。先の対空砲撃でも近接信管付き砲弾の夕弾と榴弾によって大きな戦果を得ていた。

悦子が答え、連絡将校がメモを取り、前線各部隊に伝えるために無線兵に渡す。悦子は別の無線機を取り、いつの間にか上空で偵察を行っている百式偵察機に敵陣の模様を確認している。記号が読み上げられ、卓上に置かれた地図に記号を書き込んでゆく。

民主ロシア隊と満州隊のそれぞれ五十両、計百両の一式中戦車が陽動部隊として、突出して進撃して行く。敵の主力、新型T34も高速だ。千両が怒涛のように進撃してくる。一式中戦車は距離二千で一撃を放ち、車体を反転させて向きを変えて逃げる姿勢をみせた。砲塔だけ旋回させて後ろを砲撃しながら戻ってくる。敵T34の千門の七十五ミリ砲が唸り、着弾が一式中戦車を取り囲む。が、距離二千メートルでの着弾破壊力は一式中戦車の平均装甲六十ミリを貫通できない事を見越しての陽動だ。一式中戦車が応射しているのは夕弾ではない。通常の回転噴進式四式百ミリ噴進弾に変わって、ロケット形状の十字尾翼を持つ噴進弾だ。これにより射程距離が二千メートルに伸びている。本来は近距離五百メートルで命中精度が高まるタイプだから、直撃すれば一撃で仕留めるが、この距離では数発が当たるに過ぎない。だが、これで相手の隙を誘うのだ。T34は一式中戦車の攻撃を見くびって、数を頼りに突進してきた。

T34の陣形は二百五十両を一行として計四列、ほぼ方阵を組んでいる。その後にM4が二百両後詰として控えていると、上空の百式偵察機からの報告があった。大西は一式と二式自走砲を二台で一

組として二百両の一行に配置し、敵の第一列が距離三千になった時に砲撃を開始した。二式百ミリ自走砲から放たれた砲弾は、やはり近接信管を持ち、距離百メートルで直径四十ミリの子爆弾を二十発、二十度の分散角度で放つ。その子爆弾は成形炸薬弾（ヒート弾）だ。成形炸薬弾はドイツとの技術協力によってもたらされたモンロー／ノイマン効果を利用した秘匿兵器で、子爆弾の炸薬は爆発方向を誘導する形状に形成され、前方に強い穿孔力が生じる（モンロー効果）と、さらにその形状に合わせた金属ライナー（ノイマン効果）を敷設することで、爆轟波によりライナーは動的超高压に晒されユゴニ才弾性限界を超える圧力に達する。この時、固体の金属でも可塑性動性を持つようになり、液体に近似した挙動を示す。これにより、融着体と呼ばれる金属塊となつて前方へ超音速で飛び出すのだ。これが敵戦車の装甲にあたるとまるで金属を溶かしたように打ち抜いてしまうので、ヒート弾と俗称で呼ばれるが、高温で溶かすわけではなく、音速を超えた圧力によつて、メタルジェットと呼ばれる可塑性の金属が、金属分子を常温で液体のようにさせる現象を利用した兵器なのだ。直径四十ミリの子爆弾が装甲百ミリを打ち抜く事を可能にしている。

一式百五十ミリ自走砲からは同じ対戦車用夕弾に子爆弾が三十発が収納されていた。百門の轟音と共に発射された夕弾はT34の第一列二百五十台の低空で無数の子爆弾をばら撒く。直撃した子爆弾は爆発を起こし、小さな閃光を発した。その直後、殆どのT34が火災を起こす。中には弾薬に引火して砲塔を吹き飛ばして頓挫する。近接信管と親子爆弾の拡散効果で、一撃の命中率はほぼ五割にも達する。第一撃で百両以上のT34が沈黙した。T34の隊列は乱れ、進撃速度が落ちた。米国義勇軍のM4二百両は砲撃が始まるとT34の後で、消耗を防ぐように進撃を止めた。タイガー百両が前進してT34の残りを距離三千から狙い撃ちしながら進撃する。それを追い越して、一式中戦車が百両つづ二列の陣形で前進した。千五百まで近づくと、新型長距離百ミリ噴進弾を放つ。これは自走砲の夕

弾砲弾と同じに、対戦車用四十ミリ成形炸薬弾十六発を近接信管によつてばら撒く。この距離はT34の七十五ミリ砲弾を一式中戦車の装甲六十ミリが防げるぎりぎりの距離だ。打ち所と弾着角度が悪ければ貫通してしまうかもしれない瀬戸際でもある。

が、二百五十両ずつのT34の列は、第一撃自走砲の夕弾ですでに百両以下に減っている。そこにタイガー二百両の正確な砲撃と一式中戦車の二百両の噴進タ弾の弾幕を食らった時点で、敵第一列は沈黙してしまった。完全なアウトレンジ攻撃だ。敵の砲弾は届いても味方戦車にダメージを与えない。だが、こちらは自走砲百門、タイガー二百門、一式中戦車の二百門と合計五百門の敵の砲数の倍に当る砲撃を第一列に各個撃破のごとく集中できたのだ。

敵の第二列以降はこちらのアウトレンジ作戦の意図を読み取ったのか、第二列以降が前進速度を増して猛烈に進撃して距離を詰めようとして来た。各列の間の距離も次第に詰まってきた。自走砲の放ったタ弾が再び敵の最前列で炸裂し始めた。タイガーと一式中戦車の砲撃も間断なく続く。半数をやられた敵は、隊列を乱して横に散開し始めた。固まって進軍することの不甲斐無さを悟ったのだ。左右に散開したT34の意図は明白だ。前方からの集中した砲撃を分散させて、左右から回り込みながら味方陣地へ接近しようと試みたのだ。だが、その方向には扇方に蛸壺陣地を構成した携帯七十五ミリ噴進砲歩兵部隊が左右に五百門ずつ展開していた。

悦子は知っていた。特務機関が調べ上げたT34の欠点。砲塔内部が非常に狭く、通常砲塔には車長、砲手、装填手の3人が配置されて円滑な砲撃が可能になるのだが、T34は砲塔が狭く、二名しか入れないのだ。だから車長が砲手も兼ねていた。そうになると、敵味方を識別して連絡を味方と取り合う指揮をしながら砲手を行う事になり、実戦になると単独で判断しがちになる。且つ、無線も備えておらず、連絡はハッチを開けて手旗信号で行わなければならない。左右に分かれたT34は烏合の衆と化し、各戦車が勝手に迂回し

始めたのだ。自軍が有利なのか窮地なのか、その情報はほぼ届かない。目の前の敵だけに向かってくる。

大西は戦況を見て、左右に分かれて混沌とした動きを見せているT34を、噴進歩兵部隊に任せるように指示して、本体は前方の残りの陣形を組んでいる七百両に進撃させた。案の定、敵に後ろを突かせる隙を見せても、そこに進撃しようと突っ込んでくるのは数両のT34だけで、大部分のT34は両翼をうろろするだけの混沌ぶりを見せた。そこにカムフラージュされた蛸壺から七十五ミリの歩兵噴進砲が一台一台に狙いをつけて放たれる。新たな方向から攻撃されるとろたえたT34は殆どが後退を始めてしまう。だが、前方に進撃した一式中戦車の内、六十両は三十両づつ左右に分かれて戻るようにT34の後方を追撃して、T34を噴進歩兵部隊へ追い詰める。挟撃されたT34は後退を止めて、再びカムフラージュされた扇方に展開した噴進歩兵部隊の中央部に移動、射程五百で噴進砲によって各個撃破されてしまった。

前方では同じアウトレンジ砲撃が始まる。違うのは残り五百両のT34も二百両のM4も、後退を始めた事だ。だが、自走砲の射程は百ミリが一万八千メートル、百五十ミリが一万二千メートル、逃げてモタ弾の砲撃からは逃れられない。

大西は後ろに控えるM4に砲撃を集中するように指示した。

眼下に広がるティーダの草原は、敵、アジア民主連合の砲撃で火柱と黒煙に満ち、味方の半数の戦車が頓挫している。ジョージ・カーター中佐は米国義勇軍の陸軍部隊の司令官として、ティーダ草原北方の山岳部中腹、標高五百メートルのソ連赤軍前線司令部で、目の前に起こる信じられない状況に打ちのめされていた。次の決定的結論を出す指示を出すために、無線機マイクを握り締めている右手に冷たい汗が流れる。

隣のカムフラージュされたソ連軍の司令幕舎では、ロシア語で罵倒するような大声が洩れ聞こえる。ソ連軍のT34には無線機が戦

車部隊長車両にしか装備しておらず、司令部からの指示は到底前線の各車両には届かないからだろう。敵の蛸足のように拡散する砲撃がM4の戦列に届き始めた。

「各M4戦車隊は小隊ごとに扇形に広がって後退しろ。固まるとやられるぞ」

ジョージは躊躇いを棄て、後退して山岳部に隠れるように指示を出す。だが、すでに遅かったかもしれない。M4の戦列に届いた最初砲撃で、十数両が火を上げているのが双眼鏡に移った。

M4の最高速度は時速三十八キロ、T34は五十五キロの高速だ。後退し始めたM4をT34が追い越してゆく。味方の頭上に敵の蛸足榴弾が集中し出した。敵は最前線の中戦車が距離千五百を保ち、速度の遅い重戦車は二千、自走砲は三千を保っている。味方戦車の砲撃は敵中戦車に集中しているが、新型七十五ミリが当たっても跳ね返されて、進撃は止められない。

敵の中戦車も高速だ。M4を少し上回る速度で散開したM4を追撃してくる。敵の重戦車と自走砲は標的を移した。M4追い越して言ったT34に変えて、ゆっくりと草原の中央を進撃してくる。二百門に近い砲弾が炸裂するたびに、T34は十数両がやられて燃え上がった。

扇形に散開したM4は敵の自走砲砲撃からは外れたが、追撃してくる中戦車からロケットのような砲弾が放たれ、M4の上空で炸裂して小さな蛸足榴弾を浴びている。車体から小さな炎が見えると、やがてエンジン部から発火し、砲弾の誘発で砲塔が飛び散る。相変わらず、敵は千五百の距離を開けて無傷だ。数両のM4が果敢に敵中戦車に向かって行く。するとその方向にいる敵だけが後退し、距離を開ける。その間に左右に回りこんだ敵戦車からの砲弾を浴びてしまう。敵は無線で連絡を取りながら、見事な組織機動戦を展開しているのだ。だが、その数両の勇氣ある突撃のお陰で、他のM4は後退を続け、山岳部の谷に入りこむと、森林の中に隠れ潜む事ができた。T34も二百両ほどの損害を出しながら、山裾の森林地帯に

隠れた。

敵は進撃を止めると、山裾から千五百に中戦車、二千に重戦車、三千に自走砲を配置した。その後から数千の歩兵が陣を扇型に囲むように布陣する。この歩兵は携帯ロケット砲を持ち、さらに小型の蛸足榴弾を発射する部隊のようだ。

「司令官、M4は約五十台がやられました。T34は千両中、森に逃げ込んだのは僅か二百両です」

副官のスミスが情報を持ってきた。

「先ほど米国義勇軍総司令のシエン・ノート大佐に無線で連絡、B17二百機とP40二百機はほぼ全滅したと報告しました」

「シエンは何か言ったか？」

「はい、なぜだ？ と理由を聞かれましたので、敵の対空砲は新兵器で命中率も破壊力も信じられないほどだと答えておきました」

「同じ事が戦車隊にも起こったとシエン総司令に報告しておいてくれ。航空機も戦車もアジア民主連合には歯が立たないと必ず言うんだ」

ジョージが副官を下がらせようとした時、突然、周りに砲弾の雨が降り注ぎ始め、大きな爆発音と衝撃がジョージを襲い、爆風にジョージの体は数メートル吹き飛ばされた。敵はこの司令陣地を発見したのだ。体の節々が衝撃で引きちぎられたのかと思い、ジョージは手足を動かしてみる。耳鳴りがひどく、頭が割れそうだ。手足が動く事を確認して、次に頭を触る。頭も異常が無い。ほっとして、硝煙に煙る数メートル先を見ると、副官が倒れ、無残な姿に成り果てていた。

ジョージがよろよろと立ち上がろうとする刹那、再び至近弾が閃光とともに着弾した。ジョージの意識はそこで切れ、蘇える事は無かった。

七、ロシアの希望

7．ロシアの希望

イルクーツクの地下司令部、チエイコフの陰気な顔は思いつめた脅えで凍りついていた。ティードから入電する戦果は、驚くより、恐れをこの小心な男に抱かせている。空軍千九百機が壊滅し、戦車も三分の二の千両近くが破壊された。残った約四百両弱の戦車も敵に歯が立たないと、森林の中に逃げ込んでいる。イルクーツク周辺には百万の歩兵が控えているが、敵の空軍と戦車を中心とする機甲師団に歯向かえる状況ではない。まして、食料が不足してきていた。住民から強制的に徴発した食糧も、数日分しか無い。住民の目は虚ろな眼差しから、怒りの眼差しに変わった。

「なぜだ！」

チエイコフ総司令官が叫ぶ。その問いに答えられる者は誰も居ない。フルシチョフでさえ、戦力比較で数の有利がソ連軍にあると思ってきたからだ。飛行機も戦車も無く、百万の歩兵で戦うのか？ それとも……。フルシチョフにはチエイコフが選択する道がもうすでに読めていた。この男が恐れているのは、アジア民主連合ではない。この敗戦がもたらす責任が間違いなく己の粛清に繋がるからだ。チエイコフ自身も大佐の階級から、スターリンの粛清によって、大佐以上の軍人が九割近く粛清された結果として昇進して来たからだ。残された道は、三つ。降服か徹底抗戦か？ もう一つは逃亡だ。スターリンからの直通電話が突如鳴る。チエイコフはびくつとして体を堅くした。チエイコフがフルシチョフを見つめて、卑屈な笑顔を作った。

「同士フルシチョフ、まだ戦況分析が終わっていない。同士スターリンに報告するにはもっと調査と時間が必要だ。すまないけれど、私はこれから前線視察に行きたいのだ。同士スターリンにそう伝え

てくれないか？」

チエイコフはそう言うと、電話を取らずに身支度を始めた。フルシチョフはチエイコフの選択が何か、一瞬にして悟った。この男は前線視察と称して逃亡を選択したのだ。

「同士チエイコフ、お安い御用だ。もっと正確に状況を把握する事が、今、最も重要だ。よろしい。私から同士スターリンに伝えておこう」

チエイコフは安堵の表情を浮べると卑屈な礼を言つて、そそくさと地下司令部を、従卒の名を呼びながら出て行った。机の上の直通電話は鳴り続けている。フルシチョフはふうと息を吐き出して力を抜き、受話器を取った。

「同士チエイコフ、我軍の勝利を早く聞きたいのだが？」
スターリンの声は高みから人を見下す威圧感に溢れていた。

「同士スターリン、フルシチョフです。チエイコフ総司令官は前線の視察に出ております。戻った後で、正確な情報を直ぐ報告すると言つ伝言です」

「ああ、同士フルシチョフ、元気かね？」

「はい、こちらの同士は皆、一生懸命戦っています」

「うむ、俄仕立ての帝国主義、アジア民主連合などに祖国を蹂躪させてはならない」

「はい、祖国のために皆命を掛けて戦うでしょう」

「よろしい、ではチエイコフに電話するように伝えてくれ」

「はい、同士スターリン」

フルシチョフも幾つかの選択肢を選ばなければならなかった。だが、この淀んだ地下司令室では、決断しなくなかった。地下司令室を出ると、何時の間にか夕暮れになっていた。西側の建物の向こうに霞んだ太陽が沈む。西日を浴びながら、宿舎に向かっていつの間にか歩き出していた。四十五歳のフルシチョフには、重い記憶が幾つも重なって、それが体の重さとだるさになっていた。共産主義の理想に燃えた若い頃、反革命軍との戦いに明け暮れた日々。力と熱

情に溢れ、理想が一步一步実現されて行く事に、己の選んだ道が正しい事を言い聞かせていた。

だが、愛する妻が餓えて死んだ記憶が蘇えると、栄光の道が急に色褪せた。妻の澄んだ青い目を思い起こす。優しい眼差しだった。己の理想のために、田舎で放って置かれた妻は、フルシチヨフが気づいた時にはすでに故人となっていたのだ。フルシチヨフもその時、同じ言葉を発した。

《なぜだ！》

その問いに響き返す何物も無く、空しく掻き消えた。妻の痛みが心の何処から湧きあがり、澄んだ妻の瞳が虚ろに窪んだ表情が浮かぶ。大人しくて忍耐力のある女性だった。支えてくれる夫は戦地、隣近所もまた多くの餓死者を出した村で、妻はたった一人で何に耐え、何を望んだのだろうか？ 妻が夫に見た夢は一体なんだろうか？ 力尽きるその刹那、妻は一体、何を……？ いつの間にか涙が流れた。

「少なくとも、今の己は妻には相応しく無いだろう」

フルシチヨフは立ち止まり、呟いて、深い黒々としてきた天を見上げた。天の深みに目が慣れると、プーシキンの詩が胸の片隅から湧き出すように無言の言葉になった。

たとえ人生に欺かれても、悲しまないで、焦らないで

落ち込んだ日に寛いで、信じて、楽しい日はきつと来るから

心には果てが無くて、未来も永遠だけれど、今はいつも鬱

でも、すべては束の間、すべては過去になる。だから、

過ぎ去った日は、きつと懐かしい思い出になるから

己が信じてきたものが、ある日突然、間違いであると気づいたら……。フルシチヨフは、それが今！ 自分に起こったことを感じた。

「フルシチヨフさん！」

背後から声を掛けられて、振り向くとセルゲイがオートバイに跨っていた。

「セルゲイじゃないか？ 君はチタに行っているはずだが？」

「もちろん、行ってきましたよ。飛行機で行き、飛行機で戻りました」

「なんだって？」

「大事な話が山ほどあります。このオートバイに乗ってください」

セルゲイの表情は明るく輝き、自信に満ちていた。フルシチョフはその若者の輝きを信じてみようと思った。きつと、己の人生を変える何かを掴んでくれたに違いない予感がしたのだ。

フルシチョフを乗せたセルゲイのオートバイは東のアンガラ川岸辺を目指して二キロほど走った。アンガラ川はバイカル湖から流れ出て市街の中央に至り、やがて市の東を蛇行して流れて行く。市外から外れると畑と湿地帯が広がり始め、岸辺の小さな丸太小屋に着いた。オートバイのエンジン音と風音の狭間にセルゲイが驚く事を言った。アジア民主連合の参謀、日本人の王仁と言う人物がフルシチョフに会うためにやって来ていると言うのだ。セルゲイは偶然にもウランウデで、この人物に会い、フルシチョフの名を出したら、飛行機を呼び寄せてチタに連れて行き、チタの全てを見せてくれたそうだった。セルゲイは興奮して叫ぶように話した。

セルゲイはチタは素晴らしいと言った。貧しい人も富める人も自由市民になって、生き生きと生活していると言う。肅清された政治犯も全て解放され、知識と経験に基づいて自治組織の中で活躍していると言う。市場や町の通りは物で溢れ、人々の熱気で茹だる位だと言う。その活力の源は、チタが有する天然資源と鉱物資源だ。それを、アジア民主連合が買い取り、買い取った資金で物が満州や東シベリアから鉄道で脈々と運ばれているのだ。

フルシチョフはセルゲイの話の内容よりも、セルゲイの澆刺とした態度から、全てを感じ取っていた。やはり、何か喜ばしい事が、

チタ以東のシベリアで、アジア民主連合の到来と共に起こっているのだ。セルゲイは不思議な事を言った。チタには乞食の代表が政治局員の一人に選ばれているという。

夕闇は濃くなり、小屋から光りが薄く洩れている。セルゲイがオートバイのエンジンのスイッチを切ると、ドアが開いて、長身の影が三つ、小さな影が一つ出てきた。

「フルシチョフさん、お待ちしておりました。さあ、どうぞ中へ」
通訳らしきロシア人が言うと、背の高い東洋人が軽く会釈してフルシチョフを誘った。

丸太小屋には電気が来ていない。ランプの光りに照らされた人物をセルゲイが紹介する。それを通訳のミヤコフが王仁と呼ばれる参謀に伝えた。王仁は日本の伝統的な服装をしているのか、ゆつたりとした衣服を身にまとい、終始笑顔でフルシチョフを見つめる。隣には中肉中背の四十位のロシア人、ゲオルグ・イワノフと言う人物が居て、粛清されハバロスクで解放されて以来、民主ロシア建国のために、政治局員に選ばれたと紹介された。その隣に座る少女は十六歳でゲオルグの娘、ユリアだ。

王仁が口火を切る。人懐っこい笑顔をフルシチョフに向けて、明るい自信に満ちた声だ。

「フルシチョフさん、チタには検閲がありません。新しくできた民主ロシアの軍隊も同様です。誰もが誰にでも手紙が出せ、電話が掛けられるのです。自分の身の回りに起こっていることを遠くの親戚や友人へありのままに伝える事ができるのです」

王仁は意表をついた事から話し始めた。だが、フルシチョフはその意味が直ぐに分かった。王仁はフルシチョフの顔に浮かんだ僅かな動きを見逃さずに続ける。

「チタ、いや東シベリアの新聞もラジオも全ての報道媒体も自由です。アジア民主連合を批判し非難する言論の自由が保障されています。反面、東シベリアの自由や経済の活力、人々の生活などもあり

のままに報道されるのです」

「フルシチヨフさん、アジア民主連合には国境も無いのです」

話を添えたのはイワノフだ。イワノフはハバロスクで解放された後、満州や韓国まで視察に行ったと言う。そこで見たものは国境を自由に行きかう澆刺とした人々だったと言う。

「今、チタヤハバロスクで行っている最大の改革は、最低賃金の保証です。最低賃金とはどんな仕事にも適用され、その人が年間普通に生活できる給与の事です。さらに誰もが受けられる病氣医療用の社会保険、失業保険、親のいない子供達の教育施設など、かつてのロシアが夢見た社会制度が急速に確立しつつあるのです」

イワノフは娘のユリアを見ながら語る。ユリアは目を輝かして聞き入っていた。

「王仁殿、この東シベリアで起こっている新しい動きは、必ず西に伝播すると言いたいのだね」

「ええ、フルシチヨフさん。人が自由であることは、人の言葉が広がって行く事なのです。西のロシアの人々が国境を作らない限り、検閲を強化して人の耳と口を無理やり閉じない限り、自由市民が生き生きとして幸福なことは、西に必ず伝わって行きます」

「戦争に負けて、占領されて、国が良くなるなんて信じられない事だ……」

「お隣の国が圧政から解放され、自由に物が言えて、自由に好きな仕事が出来て、自由に人と物が行き来できれば、お互いの国が栄えるのが道理です。東シベリアは天然資源の豊かな地域です。この極東ロシア民主国は本来豊かになるべき国なのです。日本はかつて、韓国に進出し、そして満州にも進出した。日本がもし、かの地を属国化して、欧米と同じように帝国主義の道を歩んだとしたら、満州も韓国も今の繁栄はありえなかったでしょう。そして日本もまた、搾取だけしてお互い分かち合う事をしなかったのなら、今の日本の未曾有の繁栄は無かったのです」

「今のウランウデは皆飢えているのよ。病氣になっても医者も薬も

無い。市場には物も無いし。それでも、赤軍は皆から食べ物や品物を奪おうとしている」

ユリアが言った。チェイコフの命令が早くも実行されていたのだらう。

「王仁殿、今の私に何ができるだらうか？ あなたの国の軍隊にやられた極東派遣軍総司令官のお目付け役、ソビエト共産党政政治局員のフルシチョフに何が……？」

「スターリンの真実を世界に語って欲しいのです。そして極東ロシア民主国のリーダーの一人として建国に携わって欲しいのです」

ユリアが突然強く言った。

「フルシチョフさん、お願いです！ 皆が幸せで飢えない国を作ってください」

セルゲイもイワノフもユリアも、そして王仁も熱い眼差しをフルシチョフに向ける。その視線には何か途方も無い希望に溢れていて、フルシチョフは少したじろいだ。だが、心のどこか深い所ですっと前に、こんな日が来る事を予想していたのか、決意はすでに出来ていた。

だが、フルシチョフは重大な決断を確り記憶に留めるために、ほんのちよつと一人になりたかった。

「王仁殿、我が心の内はすでに決まっています。ですが、大事な事は一人になって決めるのが私の習慣です。しばし、小屋の外で川面を見つめる時間をいただけないだろうか？」

「もちろんですとも、フルシチョフさん。人は一人で生まれ一人で逝くものです。さらに、人は誰かのために生き、誰かのために逝くものでもあります」

フルシチョフはじつと王仁を見つめる。王仁の表情はランプの暖かい光りに照らされて薄い影が浮かんでいたが、目の光りと声音には微塵の影もなかった。

アンガラ川はバイカル湖から唯一流れ出る河だ。他の川は四方か

らバイカル湖に流れ入る。命がバイカル湖で育まれ、アンガラ川を下る。やがて、北に流れてエニセイ川に流れ入り、北極海に注ぐのだ。フルシチョフは静かに流れを見つめ続けた。遅い春の雪解け水は、力強い流れとなつて、ゆっくりだが滔々と動いてゆく。フルシチョフが見つめる一点の水は、上流のバイカル湖の無尽蔵の水へ繋がりを、下流はアンガラからエニセイを経て、紆余曲折しながらまた北極海の無尽蔵の海へ途切れることなく続く。フルシチョフは脳裏の中で、水が途切れずにバイカル湖の水から北極海の水まで繋がっている朧な絵が浮かんだ。目の前の水が動いているのではなく、バイカル湖から北極海へ繋がる水そのものの全体の動きが感じられた。水は一つなのだ。そして、この水をさえぎる物は何物も無い。

《誰かのために生き、誰かのために逝く》

王仁は不思議な事を言つた。東洋独特の言い回しだ。だが、この言葉を聞いた時、フルシチョフは一瞬、妻の面影を見た。決意を表明する勇気が沸々と湧いてきたのだ。

気がつくと、後ろにユリアがティーカップを両手に挟んで立っていた。

「フルシチョフさん、春とは言え、まだ夜風は体に毒です。暖かいお茶を飲んでください」

「ありがとう、お嬢さん。ユリアさんだったね。でも、やっと決心がついたんだ。これからはあなたやセルゲイの若い人のために、生きて行こうと思う」

ユリアは満面に笑顔を浮べた。ユリアの手が静々と伸びてフルシチョフの手を握り、小屋へ誘つた。

「王仁殿、まずはイルクーツクにいる赤軍百万の武装解除を行いましょう。すでに、チェイコフ総司令官はスターリンの粛清を恐れて逃亡しています。私がスターリンの悪事を暴いて軍を説得してまとめましょう。その後、東シベリア民主国建国を宣言、アジア民主連合に加盟しましょう。百万の軍を新たな国家の軍として編入しましょう。もちろん、西に帰りたい兵は返しますが、おそらく誰も西に

帰りたいとは思わないでしょう」

フルシチヨフは力強く言った。ランプが瞬き、皆の顔に光りが灯った。

フルシチヨフと王仁は更なる詳細な打ち合わせのために、深夜、黒く塗装した晴空特別機が小屋の前のアンガラ河に静かに着水し、そこからチタに向かった。チタで視察と現状の打ち合わせを一日でこなし、またイルクーツクに戻る予定だった。

バイカル湖の上空に差し掛かると、副操縦士が操縦室から出てきて言った。

「昼間の空戦で、相当数のソ連機がバイカル湖に不時着水、あるいはパラシュート降下しています。ソ連軍からの救援船舶は全く出ていない模様です。百式偵察機の報告では百数十人があちこちで漂流しております。バイカル湖は広いので、現在、水上機を総動員して搜索救難に当たっておりますが、大園司令の伝達で、当機も燃料と時間が許す限り、救難活動に参加せよとの事です」

「了解した。早速救難活動に入ってください」

「はっ、我々の担当はバイカル湖南です」

通訳のミヤコフが状況を説明してくれた。飛行機は高度を下げ、探照灯を湖面に向ける。低空を何度も東西に往復し、少しずつ北上しているようだ。機内前方部の覗き窓にしがみ付いていたユリアが叫んだ。

「あつちに何か浮いています！」

操縦士も探照灯係りも気づいて、機首をユリアが目指す方向にゆっくり向け、探照灯が水面を彷徨うように照らした。大きな流木に数人がしがみ付いているのがちらりと光りに映った。飛行機は回り込んで着水し、ゆっくり流木に近づく。探照灯がしっかり照らすと、四人のソ連操縦士の一人が必死に手を振る。叫び声も聞こえた。

「水面下の流木の大きさが分からないので、これ以上の接近は無理です」

流木から十数メートルの所で副操縦士が言い放つ。王仁が側面のハッチを開いて、大声を上げて手招きする。ミヤコフもフルシチョフもセルゲイも叫んだ。操縦士達もなにか弱く叫んで、流木から離れて弱弱しく泳ぎ始めた。だが、長時間、春の雪解け水のバイカル湖に浸って、体力が殆ど尽きているのだ。一人が湖水に沈んで行く。ユリアが叫び声を上げた。

王仁が着ている物を脱ぎ捨て、湖水に飛び込む。セルゲイもフルシチョフもミヤコフも続いた。王仁が沈みかけた操縦士を引き上げた。他の者も溺れそうな者を引っ張るように泳ぎ帰ってくる。ユリアが叫んだ。

「頑張つて！ あと少し。頑張つて！ もう少し。あともう少しで生きられる！」

ロシア語で叫ぶ少女の声を聞いた男達に力が出た。堅くなった両腕で必死に水をかいた。機内の兵士も湖水に飛び込み、残った操縦士らも口々に叫んだ。

「がんばれ！がんばれ！がんばるんだ」

了

七、ロシアの希望（後書き）

極東及び東シベリアを民主化して、『仮想戦記 五族共栄』も一段落と言ったところです。米国の当時の戦略もそうですが、ソ連の当時の実体も、ソ連邦が解体して初めて出てきた事実がかなりあるようです。その辺を調べながらの作業になってしまい、筆は遅々として進みませんでした。しかし、地勢を調べながらの色々な作業自体はとても楽しく、スターリンやフルシチョフを調べることも軽い興奮さえ感じてのめり込んでいました。

『五族』はこれまで、読者の皆さんの中には気づかれた方もいるかも知れませんが、アジア民主連合の兵士は一兵も戦死していないのです。明らかに、仮想戦記といえども、戦記物としてはリアリティ不足に思われるかもしれませんね。ですが、これは意図したもので、科学技術と兵器の圧倒的な優位性を描きたかったのです。昭和十九年六月のマリアナ沖海戦で、レーダーにより索敵誘導された米機動部隊の艦載機に、小沢艦隊の艦載機が待ち伏せされ、機動部隊に近づけた特攻をも辞さぬ新型の彗星も彩雲も、敵のVT信管（近接信管）の対空放火に殆ど全滅した状況を下敷きにしています。

さらに、近年発生した米軍のイラク侵攻もまた、制空権を確保し、最新鋭のスーパー戦車で進撃した米軍に対して、イラクの正規軍はほぼ反撃らしい反撃もできずに終わっている事実。孫子の兵法にも勝てない戦はしない事とあります。さらに戦を始めるなら絶対に勝つ体制で臨む事が求められることではなかったのか？ それは意味深長で、当時を知らない戦後生まれの戯言であるかもしれませんが。でも、太平洋戦争当時の日本の指導者達はそのすでにミス犯したのかも知れないと、過去を分析する事が無用であるとはどうしても思えないのです。

当時、ソ連で起こっていたことは一種のホロコーストでもあったのでしょうか。日本政府と軍部はそれを知っていたのでしょうか？

シベリアに眠る豊富な資源を知らなかったのでしょうか？ もし、確りと実情を把握していたら、何もわざわざ遠い南方へ海軍力を頼らずとも、韓国や満州を基盤として、シベリアへの道も有ったのではないか？ そこが仮想戦記の良い所ですね。想像が膨らみ、興味が尽きない点です。

読者の方でこの辺の事情にお詳しい方のご教授を賜りたく思います。

第五話で書きたかった事、プーシキンの詩にあるように、生きている間には、時に、人生に裏切られたように感じる時があるものです。特に戦乱にまみれた時代には、肉親が死んだり、思わぬ人生の転機が訪れたり、あるいは無能な指導者の下で強制された過酷な生活を余儀なくされたり。でも、それもまた、じつと耐える前向きな忍耐力さえあれば、何時かは微笑んで回想することが出来るよとプーシキンは言っているんですね。

そんなことが少しでも伝われば、望外の幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757c/>

仮想戦記 五族共栄

2010年10月9日00時24分発行